
隆介の羨ましき？日常

聖龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隆介の羨ましき？日常

【Nコード】

N4380E

【作者名】

聖龍

【あらすじ】

成績も顔もスポーツもごく普通の高校生佐々城隆介。そんな彼の日常がある日変わってしまった！何とも羨ましい彼の日常を描くドラマタラプロメディー！！

プロローグ(前書き)

はじめまして、聖龍です。初めて書くのでめちゃくちゃなところもあると思いますが宜しく願いします！

プロローグ

僕の名前は佐々城隆介。

零恋高校に通う高校生である。

成績は中の上

スポーツは中の下

顔は下の上といったどこにでもいそうなごく普通の高校生である。

そんな僕の日常がある日突然変わることなど誰も予想しなかった…

第1話：いきなり転校生！？

ピピピピピピピピ...

「うーん。もう朝か。」

これから僕の一日が始まる...

ちなみに今はAM6：30である。

別に学校が遠いという訳ではない。

ただ学校にぎりぎり着くのは正直性に合わないというだけだ。

さっそく起きて、着替えて、朝食を作る。

僕にはすでに両親はいない。父さんは10年前事故で、母さんは6年前に病気で亡くなった。

そんなわけで今は両親が残した莫大な財産のおかげで生きている。

朝食を食べ終え現在はAM7：40

そろそろ学校に行く時間になり、準備をして家を出た。

僕の通う零恋高校はそこその進学校で毎年何人かはT大やK大レベルの大学に合格している。僕が受かったのは奇跡に近いと言ってもいい。

全校生徒数は約500人

13クラスに分かれていて1クラスは特進の20人、2クラスは女子クラスになっている。

この高校は2年前から共学となり、男子と女子が2：8と極めて女子が多いのである。ちなみに僕は顔は普通なのでモテたことがなく、あまり期待してない。

AM8：00に学校に到着

クラスに行くとするで何人がいて、二人話しかけてきた。

「よう！隆介。おはよう！」

いつも笑顔を絶やさないこの人は僕の数少ない友達の村神涼太。

成績優秀・スポーツ万能・容姿淡麗の完璧超人

さらに家事も全てでき、誰にでも優しいため女子からの人気は絶大だが彼女はいないらしい。

「ああ。おはよう涼太、舞。」

「朝からテンション低いわねえ。もっとシャキっとしなさいよ！」

こっちのうるさい奴は僕の幼なじみの相沢舞。

サラっとしたショートヘアーにきれいな瞳、顔も良くスポーツもできるので男子からは人気がある。僕には理解できない。こんな凶暴女のどこがいいんだか…イデデ！

「今失礼な事考えたでしょ？」

お前は読心術でも使えるのか！？

「な、何言ってるんだよ！お前のような可愛い子に考えるわけないだろ。」

「えっ？そ、そう？ならいいけど…」

何故か顔を赤らめてつねってた手を離れた。

「はいはい痴話喧嘩はそこまで。席に着こつや。」

涼太は半分呆れたかのように言った

「痴話喧嘩なんかしてないわよ！」

「そうだそうだ。何でこんな奴と…」

「何

「はいはい分かった分かった。とにかく席に着こつ。」

僕たちは席に着いた。

HRが始まり、僕は退屈そうに聞いていた。

「いきなりだが、ここで転校生を紹介する。」

今頃転校生！？まだ6月だぞ。

別の生徒が

「先生、男子ですか？女子ですか？」

「女子だ。かなり可愛い子だぞ！」

うおー！ー！と僕と涼太以外の男子のテンションが上がる。

「静かしろ！んじゃ、入ってきて。」

ガラガラ…スタスタ

「え？」

その子を見たとき、何か不思議な感じがした。
まるで今まで忘れた記憶が急に蘇ったように…

第2話：波乱の予感！？

話を戻そう。

その転校生は髪は金髪のロングヘアでくつきりとした二重、お淑やかな雰囲気を漂わせる絶世の美女だった。

「自己紹介を頼む。」

と先生が言い、その子の口が開いた。

「はじめまして。神代沙耶と言います。宜しく願います。」

他の男子はおろか、僕も少し見とれてしまったが、何故か舞がとてつもない殺気を出して睨んできたのですぐ正気に戻った。

それにしても何故だろう。さっきから何かが引つかかっている気がする。気のせいだろうか…

そんなことを考えているといつの間にか放課後になっていた。

舞は陸上部、涼太はバスケの助っ人で結局僕は一人で帰ることになった。

下駄箱に行くと一枚の手紙があった。

中身を見ると

「放課後、体育館裏でお話があります。少しだけ時間よろしいでしょうか？ 神代沙耶」

……………まさか、告白！？

なんて事ありえるわけない。全てがノーマルな僕にそんなことはあり得ない。

とある公園にて…

「ひくっえくっ。」

「どうしたの何で泣いてるの?」

「うええ。お母さんとはぐれちゃったの。」

「そうだったんだ。じゃあ僕も一緒にお母さんを探してあげる。」

「本当?」

「うん。だからさあ、泣かないで笑ってようよ。」

「うん!」

その時の笑顔は子供だったけども天使のような感じで可愛かった。

「そうか。あの時の女の子だったんだ。」

「思い出してくれたんだ。あの後お母さんを見つけるまで一緒に遊んで一緒に探してお母さんを見つけてくれた。」

「……………」

「あの時私は本当に嬉しかった。隆ちゃんがとても優しく接してくれて。…だから今ここで言います。私は隆ちゃんが好きです。大好きです!!隆ちゃんはどうですか?」

…何故だろう。嬉しいはずなのに。何故素直に喜べないんだ?神代さんを好きじゃないから?

違う。今まで誰かを好きになった事がないから分からないんだ、恋愛というものが…。

「ごめん神代さん。僕、人を好きになるとかそうゆうのよく分からないんだ。…だから、友達から始めないかな？僕も神代さんの事をよく知って、それから返事を返すってのは駄目かな？」

神代さんは最初少し暗い顔をしていたが、すぐ笑顔になり

「うん。分かった。私、隆ちゃんに好かれるように頑張る！アプローチもかけるから覚悟しといてね？」
「はは、お手柔らかにね？」

などと話してる二人を（偶然）見て怒りをあらわにしてるのが約一名いた。

言わなくても分かるが、隆介の幼なじみの舞である。

「うふふ。いい雰囲気じゃないのよ。明日隆介を尋問しなきゃね。」

や、ヤバいオーラが出まくってますよこの人…

まあそんなこんなでとりあえず友達同士になれた二人は仲良く下校していた。

「ねえ隆ちゃん。その神代さんってのはやめようよ。」

「あつそれもそうか。何て呼べばいい？」

「マイハニー！」

「お願いします！それは勘弁して下さい！！」

「（ちっ）んじゃー普通に沙耶でいいよ。」

「（何か今『ちっ』って聞こえたような気が…）分かった。じゃあ改めて宜しく沙耶。」

「うん。宜しくね隆ちゃん」

と言って腕を組んできた。…何か転校してきた時と比べて随分キヤラ変わったな。こっちが素か？

「ちよ、ちよつと沙耶。腕を組むのは色々とまずいつて！」

「えー！何がまずいの？」

と笑いながらさらに強くくっついてきた。

う、腕に柔らかい感触がー！と思いながら必死に理性を保っていた。

「あれ〜？隆ちゃん顔真っ赤だよ〜？可愛い〜！」

もうヤダ……。

あの後沙耶と分かれてしばらく歩くと家に着いた。

ドアを開けようとしたその時

「隆介〜〜！」

まあ分かると思うが舞である。

嫌な予感がするのだがシカトするわけにいかず後ろを向いた。

そこにはドス黒いオーラを出しながら笑顔でいる舞がいた。

「どっどっしたの舞？」

「隆介〜。あたし偶然体育館裏を通ったんだけど、そこであんとと神代さんがとても楽しそうに話してるの見たんだけど何で？いつからそんなに親しくなったの？」

「い、いやーそうか？普通に話してただけなんだけど。」

ドゴンー！！

「正直に話せやコラ。」

ひ、ひいい。コンクリートの壁が割れた。

「い、いや本当だって。本当に普通に話しをしていただけだったって。」

「ふん。信じられないなあ。顔を真っ赤にしてデレデレしてたからねえ。もしかしてあんたと神代さんは昔会っていて、それであんたが優しく接したから神代さんがあんたを好きになってあの時に告白したというラブコメ的な流れなんじゃないの!？」

「…当たってるよ!何で分かっちゃうんだ?読心術でも使えるのか!?だがここで当たりなんて言ったら僕は明日の太陽が拝めなくなってしまう。」

「な、何言ってるんだよ。そ、そんなはずないじゃないか。漫画じやあるまいし。」

「ふん。まあいつか、明日神代さんに聞いてみよう。じゃあまた明日…あ、明日久しぶりに迎えに行くから!」

「な、何だよ急に。別に」

「分かった!?!?!?」…はい。」

僕ってホント弱!!

やれやれ…

第2話：波乱の予感！？（後書き）

小説書くって難しいなあ…。

でもめげずに書き上げたいと思います。

第3話：隆介の災難と涼太の秘密！？（前書き）

前半の方は微工口なのでご注意を…。

第3話：隆介の災難と涼太の秘密！？

翌日…

ジュジュジュ……

「う、うん、朝か。」

今日もいつもと変わらない朝…と思ったら、顔に温かく柔らかいものが当たっていた。
よく見るとそこにはなんと…沙耶がスヤスヤと寝ていた。

「な、ああー！ー！！！！？？？？」

思考回路を戻した僕は大声を上げてしまった。

「ふあゝ。あつ隆ちゃんおはよう！」

「あ、ああおはよう…じゃなくて！！何で沙耶が僕の布団で寝てるんだ！？」

「だって隆ちゃんの寝顔見たかったんだもん。隆ちゃんのかわいい寝顔に見とれてたら何か眠くなってきたから寝ちゃった。」

…何か怒る気も失せた。

それより早く準備しなければ！

「分かった。とりあえずどいてくれないかな？準備したいんだけど。」

「い〜や！もつと隆ちゃんという。…そ・れ・と・も今ここで私と愛の営みをしちゃう?」

ふぉー！何言っちゃってんのこの子は!?

「だ、駄目だつて！女の子がそうゆうこと言うもんじゃない!」

「顔真っ赤にしちゃって、かわいい！でも説得力ないよ〜?体はこんなになっちゃってるんだから。」

と言い、僕の大切なところを触ってきた。ヤバい！ヤバすぎる!

このままでは僕の理性は崩壊して本当に営みをするかもしれない。どうする僕!

つーか沙耶のキャラ変わりすぎだろう。

だんだん恐くなってきた。沙耶は100%Sだと分かった。

などと考えていると、ぷちっぷちっとなら聞いた。

見てみると沙耶が制服のシャツのボタンを外していた。

「わああー！何でボタン外すんだ!??」

「隆ちゃんが悪いんだよ?私を誘うから。」

何か沙耶の仕草が色っぽくヤらしい。

つーか誘ってないよ!

…ああ!下着が見えちゃった。ピンクのブラだ。

って何見てんだ僕は!変態か!?

「隆ちゃん、諦めて私とやろう?」

くっ、もはやこれまでか。諦めかけたその時

ガチャ…

「隆介、騒がしいわよ！あたしの家にまで声がひびびび……い……いて……」

最悪だ……

もう僕の人生はジ・エンドだなこれは。

予想通り舞は拳を震わせてものすごい殺気を出してきた。

沙耶は残念そうに服を整えていた。

「隆介……？いったいどういうことなの……！！??」

そう言っただけの首を片手で持ち上げた。

貴方は本当に女の子ですか？といたいたいくらいの馬鹿力だ。

こうなつてはもはや何を言っても無駄だ。

せめて殴られる回数を減らすように言い訳しようとしたら……

「せっかく隆ちゃんと愛の営みをしようとしたのに。邪魔が入っちゃったな。」

オーーーーー！！！！なんてこと言うんだ……！！

だがもう手遅れだ。

殺気がさつきより強くなり、手にさらに力を入れてきた。

苦しい……

グッバイ僕の短き人生……

そう呟いたら

「隆介のバカー……！！！！！！！！！！」

顔を真っ赤にした舞に見事にボコボコにされたよ。

薄れていく意識のなかで

「愛の営みなんて！愛の営みなんて！！…あたしもあんとしたいのに…。」

ん？最後の方は聞こえなかったな。

その後意識を失った…。

…目を覚ますと僕は学校にいた。

聞いたところ、あの後涼太を呼んで傷の手当てをして運んでくれたらしい。

さすが涼太だ。頼りになる。

「おう隆介！何か色々大変だったみたいだな。こっちも結構大変だったぞ。」

「そうか、ごめんな涼太。迷惑かけちゃった。」

「なーに水くせえこと言ってるんだよ！俺達は親友なんだから気にすんな！」

ああ涼太。お前がモテる理由が改めて分かったよ。

ほら、今の言葉でときめいている女子が何人かいるぞ。

そう考えていると、舞と沙耶が出てきた。

「隆介、ごめんね。あたしっいたらついカツとなったやつて…。」

偉い素直だな…

「いや、まあ別にいいさ。誰にだってそうゆうことあるし。」

「ありがとう隆介！」

笑顔で言われ、思わずドキっとしてしまった。
そんな僕を見て沙耶が殺気を出してきた。

「隆ちゃん？浮気は駄目だよ？」

「い、いや僕

「隆介はあなたと付き合っていないでしょ！」

何故か僕が言おうとしたら舞が口を挟んできた。

それから二人はしばらくぎゃあぎゃあ言い争っていた。

だがその時周りを見たら男子どもが殺気を出しながら睨んでいた。

無理もない。僕は見て呉れでは学年でもトップクラスの美女とい
んだから。

などど考えてる場合じゃない。

逃げなければ！

「佐々城隆介……！！貴様いつの間にか我が校のアイドル（にな
る予定）の神代さんと仲良くなったんだ……！！」

こえーよ……！！

僕は一目散に逃げた。

ラブコメではみんな追いかけてきて鬼ごっこみたいなのだ。

僕もそうなると思っていたその時！

ドゴ……ン……！！

ギャ……ン……！！

振り返ると男子のほとんどが今の一撃でやられていた。

そこにはなんと涼太がいた。

「おいテメーら！俺の親友に手を出すとどうなるか思い知らせてやる！！！」

り、涼太が笑顔じゃない。シリアスな顔をしている。あんな顔を見たのは初めてだ。

「俺は親友を傷付ける奴が一番嫌いだ。傷付ける奴は遠慮なく叩き潰す！！！」

みんなが怯えている。（男子が）
女子はこんな時でも見惚れている。

「分かったら散れ。次はこの程度じゃ済まさんぞ。」
みんな戻っていった。

涼太がこつちを向いた時にはいつもの笑顔だった。

やはり涼太は謎が多いなあ。

すると数十人の女子が涼太を囲んだ。
あれ？涼太から冷や汗が流れている。

「村神くん、かつこよかったよ！笑顔もいいけど真面目な顔の村神くんもよかった。」

「え？そ、そう？あ、ありがと。じゃあ俺は行くからじゃあな。」

脱兎のごとく逃げた。

女子も一斉に追いかけた。途中涼太のうわー！来るなー！という声が聞こえたのは気のせいだろうか？

涼太って女の子が苦手だったんだな。僕以上に…

また涼太の謎が一つ解けた。

これからは僕だけでなく、涼太も苦難が続くそうだな。
それとは別に沙耶と舞はというと

「大体なんで相沢さんは私と隆ちゃんの愛を邪魔するわけ？」

「だから神代さんと隆介は愛以前に付き合っていないでしょ！」

「そんなことないわ！私と隆ちゃんは結婚を前提に付き合ってるよ。
今朝だってあなたが邪魔しなければ……」

「あれはあなたが一方的なだけじゃない！全てにおいてね。」

「何ですって！？」

「何よ！？」

ぎゃあぎゃああー！ー！！

まだやってるよこの二人。いつまで続くんだよ……

やれやれ……

第3話：隆介の災難と涼太の秘密！？（後書き）

次回、新キャラ登場します。

お楽しみに！

第4話：悲劇の期末試験！？そして、隆介拉致される！？

来週は期末試験の日。

クラスでもたいていの人が勉強している。

僕たちもその最中だ。

ちなみに今は僕の家で涼太、沙耶、舞と一緒に勉強している。

僕は上位、涼太はトップなので大丈夫。問題は中学の時から赤点ぎりぎりの舞である。

涼太と違って勉強は駄目なようだ。

そう考えるとやはり涼太はすごい。

沙耶は…編入試験の点数を見たら僕ぐらい取れていた。故に問題ないだろう。

「聞いたところ、今回のテストは一年二年合わせて順位を出すらしいぞ。」

なるほど。1学年500人だから合わせて1000位で出すということか。

「へー。僕の実力でどこまで通用するか楽しみだなあ。」

「何言ってるの？2年相手に通じるわけないじゃない。無駄な事はやめときなさい。」

「…お前は1年でも相手になってねえだろうが。せいぜい赤点取らんようにしろよ?」

「うえ〜ん涼太くん。隆介が苛めるよ。」

「あれは相沢が悪いんだろ。俺にはフォローできん。それに、本当の事だろ（笑）?」

久々に舞を苛めれた。

などとやっつてる場合じゃなかった。

「ほら、勉強始めるよ。お前のために教えるんだから。」

こうして舞の勉強会が始まった。

「だから、そういう問題はこの公式を使えって言っただろ？」

「酷すぎるわねえ。これは赤点取っちゃうんじゃない？」

「な、何よ。ちよっと出来るからって。」

「いや。冗談抜きでこれはヤバいぞ。大体この問題は中学2年でやる問題だ。」

「へ？ま、マジで！？ヤバいよこれ！」

「先ずは公式を暗記しろ。次に公式にどの数字を代入すればよいか考える。あとは計算ミスがないように答えを出せ。これらを守れば数学は楽勝だ。」

そう、僕は理系科目は得意なのだが文系、特に国語がダメで上位になっってしまう。

全部できる涼太がホントに羨ましい。

夕方になり、僕は涼太と一緒に晩飯の準備をした。今日はシンプルにカレーだ。

涼太は僕より料理も上手ですでに一流ホテルのコックにもスカウトされているくらいだ。

完璧超人とは彼のことだろう。

夕食も食べ終え再び勉強タイム。

僕と涼太と沙耶で徹底的に教えてやった。

9時になり、ひとまず今日の勉強会は終わり。

そのまま解散…になるはずだがみんな

「何言ってるんだ(の)? テスト終わりまでここに泊まるんだが(よ)」「」

へっ? いやいや涼太は別にいいけど舞と沙耶はヤバいだろ?

「あたしは別にいいよ? 昔は一緒に寝たりお風呂入ってたじゃない。」

まあ、かなーり昔だけだな…。

「私も大丈夫だよ。だって隆ちゃんとお風呂入れるし一緒に寝れるじゃん。うふふ…。」

ん? 何かブツブツ言ってるようだが気にしないでおこつ。

「まあいいんじゃないの? 諦めてくれなさそうだし。何とかなるだろう。」

「……お前明らかに楽しんでるだろう?」

「え、そうか? ハハ…まあ細けー事は気にすんな!」

凶星かよ…。まあ多分大丈夫だろう。

「分かった分かった。でもみんな準備してるの? さすがに女物はないぞ。」

「大丈夫だ。みんな既に用意してある。」

指を差した方向を見るとでかいバッグが3つあった。気付かなかった…。

ハナから泊まるつもりだったのか…

先に舞、涼太の順に風呂に入って次は僕が行こうとしたら沙耶が

「はいはい。私も隆ちゃんと一緒に入る！」

「な、ななな何言ってるんだよ！入るわけないだろ！」

「何で？相沢さんとは入ってたのよ！私とじゃ嫌なの？」

「いやいや舞と入ってたのは幼稚園と小学校時代だから！今全くないから！」

すると今まで黙ってた舞が口を開いた。

「ダメだわ一緒に入るなんて！もうそんな年じゃないし。あ、あたしだって本当は隆介と一緒に入りたいけど…でも、恥ずかしいよ。」

「え？最後何て言ったの舞？」

「な、何でもないわよ！バカ！」

何で僕が怒られなきゃならないの？

すると沙耶は大きいため息をつき

「ホント隆ちゃんは鈍感なんだから。」

鈍感？ワケ分からん。

涼太に聞くと

「俺にも女心はよく分からん。」

と言われた。

まあ予想通りだ。

それから僕も入って出た。僕の入浴中、沙耶がマジで入りそうになり二人で止めたとのこと。

セ、セーフ！

沙耶の番のとき、僕も連れていかれそうになったが、二人のお陰でまたまたセーフ！

僕本当に大丈夫なんだろうか…。

それからテレビを見たり、トランプをやったりと……何かただのお泊まり会のようになっているが気にしない。

たまには悪くないな。

問題はここからだ。

就寝時間になり各々の部屋で寝るはずなのだが……やはり沙耶が

「やだやだ！隆ちゃんと一緒に寝たい！！」

「何言ってるのよ！あんたと隆介が一緒だったら何が起こるか分からないし！数日前の事もあるし。」

「だったらさあ、相沢さんもやればいいんだよ。少し大胆に攻めてみたら。」

「な、何言ってるのよ！で、でも悪くないかも……。あ、あたしも本当はしてみたいから……。」

まただ。また最後だけブツブツ言ってる……。

「なあ舞？」

「え？何？もしかして一緒に寝たいの？」

「何言ってるの？そろそろ寝らんと明日起きられんぞ？」

「バツバカ……！！」

ドゴン……！！

「ぐは……！！……！！」

見事に正拳突きがきまり、そのまま倒れ部屋に行った。
すると沙耶が

「ダメだよ隆ちゃん。女の子は傷付きやすいんだから。」

そうか、よく分かった……………ゲフ……………

数分後、復活した僕は部屋に入った。

今日は色々とありすぎて疲れたのですぐに眠ることができた。

翌日…

朝目が覚めたら沙耶がいた！ってことはなく誰もいなかった。

朝食の時に聞いてみるとどうやら舞が頑張って止めてくれたらしい。
助かった舞。

そんなこんなで一週間が過ぎ、とうとうテストが始まった。

問題を解いて15分後、ちらつと前や横の涼太や舞や沙耶を見た。

舞は…予想通り唸っている。これで赤点だったら怒るぞ？

沙耶は…まあ普通だった。涼太は…寝てる！？まだ15分しかたつてないぞ！

余裕なんだな……………羨ましい！

キーンコーンカーンコーン…

チャイムが鳴り、テスト終了。

ちなみに科目は現国・古典・数1・数A・化学・物理・生物・地歴
公民・リーディング・ライティングで、理科と社会はうち二つ選

扱。よって計10科目。
けっこう多かったなあ。

そして結果発表……

廊下に50位から4位までの人が張られている。

よく見ると二年生や特進ばかりだ。当然か…。

僕は……ない!!

すると涼太たちも来て

「どうした隆介？お前順位に入っていないぞ？調子悪かったのか？」

「そうだね。私も一応42位になってるのにい。」

「ま、まさか3位以内とか？…まさかねえ、ありえないわね。」

確かに……前は29位だったからまず無い。

ましてや今回は二年もいる。

ああ、終わったなあ…。

1年2年全員体育館に集合した。

3位以内はここで発表される。

前回、涼太が1位になって一躍有名になったんだっけ？
すると周りから

「なあ、今回も神崎楓さんがトップじゃねえの？」

「確かに。あの人には敵わねえよなあ。」

神崎……ああ、神崎財閥のお嬢様。

かなりプライドが高く恐れられてるって話だけど。

まさかこの学校にいるなんて。

すると後ろから

「オーホツホツホー！！誰も私には勝てませんわ！今回も1位は私の
ものですよ！！」

……ああ、一発で分かった。

この人には目をつけられてはいけない。

可哀想に涼太……。

そんなことを考えていると始まった。

「それでは、1年2年混合の期末試験の上位3名を発表しちゃいま
す！！まずは第3位！2年12組神崎楓さん！！平均97.8」

「なっ！？どうゆうことですよ！私が3位なんて！ゆ、許せません
！！残りの2人を叩き潰します！！」

ひいひいこえー！

舞とは別にこえーよ！

残りの2人ご愁傷様です。

「続いて第2位！1年2組佐々城隆介君！！平均98.6」

ああ、可哀想に佐々城隆介ってあれ？

「えー！ー！ー！！！僕！ー！ー！ー！！！！？？？？」

何て事だ！目をつけられてしまった。

予想通り神崎先輩が僕を殺気を出しながら睨んでいる。

もう帰りたい……。

「そして栄光の第1位は！！同じく1年2組村神涼太君！！！！何と
平均100！！！！」

うおー！！

体育館から歓声が沸く。

ハハ、やっぱすげえや涼太…。

「1年2組村神涼太。あの子の事は分かっていますからいいでしょう。問題は…やはり佐々城隆介という男。この私に勝ったことを後悔させますわ！！」

ひいひい！！何で僕だけなの！？

色々あったがとりあえず学校も終わった。

あの後僕は有名になり、さらに沙耶に感動のあまり抱きつかれ、舞に殴られたのは言うまでもない…。

放課後…

いつも通り舞と涼太は部活、沙耶は用事があると言って先に帰った。結局一人寂しく帰ることになった。

帰りにスーパーで夕食の買い物をして外を出たら、一番会いたくない人物に会ってしまった…。

そう、神崎先輩である。

「あらあら誰かと思えば生意気にも私に勝ってしまった佐々城隆介様ではないですか。奇遇ですね。」

や、ヤバイよ怖すぎるよ！とゆーか、様って…。

何とかしなければ…

「ほ、ホントに奇遇ですね。神崎先輩もお買い物ですか？」
「ええ。晩ごはんの買い出しですわ。金持ちのお嬢様は何も出来ないという偏見もありますから。」

意外だなあ、しっかりしてある。

「そうなんですか。立派じゃないですか！」
「それでもないですわ……」
「えっ？」

急に神崎先輩の顔が暗くなった……。

「金持ちのお嬢様・お坊つちやまというのはどんなに普通にいようと、どこかで敬遠されてしまいますわ。私は両親を憎みました。どうして私なんかを産んだの！？と。」

そうか：プライドが高いだけだと思ったけど、この人も僕以上に苦労していたんだな。

気持ちは分かる……けれど

「どうして！？どうしてそんなことを言うんですか！？確かにあなたがどれだけ苦しんできたのかなんて僕には分かりません。けれど！あなたの両親もどれだけ苦しんできたのか考えたことありますか！？？」

「えっ？」

「多分あなたの両親はあなた以上に苦しんで、苦労したと思います。でもその中で結婚してあなたを産んだという事が何より幸せだったはずです。あなたがやるうとしてしている事はその幸せをぶち壊そうとしているんです！」

「っ！？」

「あなたは今幸せのほうです。今も両親の愛を受けて育っているのですから。僕にはもう両親はいません。いないからこそ分かるんです！親といることがどれだけ幸せなんだかを…。」

神崎先輩は泣いていた…

「すみません隆介様。私が間違っていました。」

「謝るなら両親に謝ってください。きつと許してくれるはずですよ。」

「はい。今日はありがとうございました。」

「気にしないで下さい。それでは…。」

つと後ろを向いてちよつと歩いた瞬間！

ガッ！

「あ、あれ？」

意識を失った。

「すみません隆介様。私はあなたともつとお話したいのです。あなたを私の家にご招待しますわ！」

あっけなく連れて行かれてしまった。

やっぱこの人こえー！

やれやれ…

第4話・悲劇の期末試験！？そして、隆介拉致される！？（後書き）

次ではないんですが、もう少ししたらまた新キャラ登場させたいと思います。

お楽しみに！

第5話：隆介命の危機！？そしてまたまた波乱の予感！？

う……………こ、ここは？

気がつくと僕は見慣れない部屋にいた。

「ええと……………あの時、確か買い物をしてて、それで神崎先輩に会って、それから別れたあと……………急に意識を失って……………あつ……！」

ガチャ……………

「目が覚めましたか？隆介様？」

やはりそうだったか……………

「何の真似ですかこれは？」

「何も。私はただあなたを家に招待しただけです。少々手荒かったのは謝ります。」

「……………どういう風の吹き回しですか？あなたは僕を敵視したはずですが……………」

「ええ。最初は……………。しかしあの時の話で貴方は私の心にあつた闇に光を射してくれました。そんな人を敵視はできません。」

大袈裟だなあ……………

そんな大したこと言っていないんだけど。

「そこで一つ貴方に言いたいことがあります。」

「何でしょうか？」

すると神崎先輩は顔を赤らめて言った。

「私と結婚を前提に付き合ってくださいませんか？」

「はい。……………今何と？」「ですから私と結婚を前提に付き合ってください。」

しばしの沈黙……………

「……………ええ……………!!!?????」

神崎先輩の大きな家全体に響き渡った…。

「けけけけ結婚!!????どどどどうしたんですか急に!?!」

正直嬉しくないと言ったら嘘になる。

神崎先輩は沙耶に劣らず美人だ。

しかも先輩は大人っぽい雰囲気がある。

だが、いきなり結婚を前提に付き合ってとか言われたら僕も困る。

「私はこの身ゆえ女子はともかく男子とは殆ど話した事がなく、敬遠されてきました。……………ですが貴方は私の身分を知りつつも私を普通の女子として接してくれました。」

本当に嬉しかった。貴方のような優しい人がいてくれて…。」

そうだったのか…。

僕としては当たり前前のことだったが先輩にとっては特別だったんだ。

「という訳でさっそくお父さんとお母さんに挨拶に行きましょう。」

「と言って先輩は僕の手を掴んだ。」

「えっ？マジですか！？」
「…マジです。」

そう言われて部屋を出た。さすが金持ちだけあって家はとても豪華で、辺りを見回すと高価そうな絵や壺や色々なものがあつた。しばらく歩き一つのドアの前に立つと

コンコン…

「お父さん？私です。」

「むっ？沙耶か。入りなさい。」
ガチャ……

「失礼します。」

目の前には先輩のお父さんがいた。

見た目は20代後半と言つていいほど若いしかっこいい。身長も180くらいあるだろうか…172の僕より少し大きい。

「おお、目を覚ましたか。君が佐々城隆介君だね？」

「は、はい！」

「そんなに固くなることはない。……ところで君は楓を救ってくれたそうだな。ありがとう。君のおかげで楓と和解することができた。」

「いえ。気にしないでください。ただ僕は今までの人生を神崎先輩にぶつけてしまっただけです。」
むしろ僕が謝ることだと思います。」

「そんなことないですわ。現に貴方は私を救ってくれました。謝る必要などございませぬ。」

「楓の言う通りだ。君には一生たつても返せない借りを作ってしまった。」

そこでどうだろう。楓から話しは聞いていると思うが、楓との結婚について聞きたいと思うが。」

嬉しくないわけじゃない。でも……

「すみません。その件についてはまだ返事は返せません。結婚はまだ早いし、それに僕と先輩はまだ知り合っただけ。もっと先輩のことを知った時に返事を返します。」

「ふむ、そうか。」

「すみません。」

「謝る必要はないさ。こっちも少し性急すぎた。」

分かった。ではとりあえずこの件は保留にしておこう。……ダメならダメでもいい。君の返事を待っているよ。」

「はい！ありがとうございます。」

いいお父さんだ。

ものすごくカッコいい。

「ではそろそろ家に帰そう。日も暮れてきた。家まで送るよ。」

「え？そんな悪いですよ。」

「でもここから家までだいたい1、2時間かかりますわよ？」

「マジで！？……じゃあお願いします。」

「私も同行しますわ。」

やっぱり。まあいつか。

車では先輩と他愛のない話をし、そしてあっという間に家に着いた。

「それじゃ先輩。また明日。」

「…隆介様。一つお願いしてもよろしいでしょうか。」

「何ですか？」

「私を楓と呼んでくれませんか？」

「え？」

「やはり先輩というのは堅苦しいです。これからお互い知るために
もまず名前からと思ひまして。」

「そ、そうですね。でも呼び捨てはできないので楓さんでいいでし
ようか？」

「楓さん…。いいですね。これからそう呼んで下さい。それではま
た明日。」

「はい。楓さん。」

楓さんは上機嫌な顔をして帰っていった。

家の前をみると家全体から黒い殺気が満ちていた。
間違いない。この感じ沙耶と舞だ。
入りづらいがそうも言ってられないので覚悟してドアを開けた。
すると

「お帰り隆介。遅かったねえ？」

「隆ちゃん？どこに行ってたのかなあ？」

案の定、笑ってはいるが物凄い殺気を出していた。

「いや、ちよつと買い物だなあ…。」

ダン！！

「正直に話せてんだよこの野郎！」

ひいひいー！！怖すぎるよこの二人！

「わ、分かったよ。」

とりあえず今までであった事を説明した。

「そ、そんな事があつたんだ。」

「うん。僕も驚きの連続だったよ。」

「神崎先輩もとても苦労してきたんだ。でも…。」

ん？再び殺気が…。

「まさか結婚をOKするんじゃないだろうねえ!？」

「ねえ!？」

怖いよ〜（泣）

「ま、まだ分かんないよ。まだ早すぎるしさあ。」

「そんなの断りなさいよ。」

「無責任なこと言うなよ！断るにも断り方つてもんがあるだろう。」

「二人とも落ち着きなよ。」

沙耶が止めた。

「隆ちゃんが優しいのは私も知ってるよ。大方、断って神崎先輩が傷つくのが嫌だから迷ってるんでしょう?。」

「う、うん。」

「優しいね。でも隆ちゃん。あまり時間はかけないようにね。やっぱかければかけるほど傷ついていくからさあ。」
「す、すごい。沙耶が初めてまともなことを言った。舞も驚いている。」

「分かった。ありがとう沙耶。助かったよ。」
「うん！（しっしっし。これで隆ちゃんの好感度アップ！結婚なんてさせてたまるもんですか。）」

あゝあ。台無しだよ。

「ごめんな舞。八つ当たりして。」
「ううん、いいよ。あたしも急に怒ったりしてごめんね。」
「（むっ何かいい雰囲気になっちゃってるし）」

翌日……

事件は起る……。

AM7:20頃

ガチャ……

「おはようございます隆介様。」

え？

「な、何で楓さんがいるんですか？」

「私も貴方に好かれるようにしばしばアプローチさせていただきますわ。」

何ということだ。こんなところを沙耶や舞に見られたら……

「おはよう隆介（隆ちゃん）。何……し………て。」

ああ、運命とは残酷なものだな……。

ドカ！！バキ！！

予想通り舞と沙耶に無言で笑顔のまま殴られた。

登校中三人とも無言で険悪なムードだったので非常に気まずかった。

ようやく学校に着き、楓さんと別れたあと教室に行き、涼太に会った。

「よう隆介！昨日は大変だったみたいじゃないか。」
な、何で知ってる！？

あの事は僕を含めて四人しか知らないはずなのに、
相変わらず謎の多い奴だな。

「しかしあの神崎楓さんに結婚を申し込まれるとは、やるじゃないか。」

「あれ？お前楓さん知ってるのか？」

「ああ、あの人の父親に仕事を頼まれた事が何度かあってな。」

「仕事って？」

「それは秘密だ。あまり口外できないからな。」

何かヤバい仕事でもしてるのか？まあいいけど。

「そんな事よりあちらのお二人さんがキレ気味なんだけど。」

後ろを見ると殺戮モードに入ってた二人がいた。

「隆介ー！ー！！何で神崎先輩を気安く楓さんて呼んでるのよ！！」

「隆ちゃー！ん！！いつの間にそんなに仲良くなったのかな？？」

ヤバ！殺される！

逃げよう！

ヒュ！！

「逃げられるわきゃねーだろ！！」

「そんな悪い子にはたっぷりとお置きしなきゃね。」

い、いつの間に背後に回り込んだ！？

バキドカバチガンバシ！！

見事にブラックアウトしてしまった。

保健室……

うっん。やはり僕は生きていたか。

しかし毎日あんなだったらマジ死ぬかも……。しかし頭が暖かくて柔らかい感じが…

「お目覚めですか隆介様？」

楓さんだった。よく見ると膝枕をしてる。

「か、楓さん？どうしてここに。」

「隆介様が倒れたと聞いたので…またあの小娘どもの仕業ですね？」

「はは、まあそうです。」

「すみません。私が同じクラスであれば守ることができましたのに…。」

いやいや！あなたまで一緒だったら僕はとっくにこの世にいませんから！！

「気にしないでください。もう大丈夫ですから膝どけてもらっていいですか？」

「いけません！まだ治りきってないので安静にして下さい！」

これ以上時間をかけるとまたあの二人が来るかもしれない…

ガラ…

あっ……。何でこうタイミングが悪すぎるかなあ？

「隆介大丈夫？ごめんさつきは。」

「ごめんね隆ちゃん。ついカッとなって。」

あっ見られた。

またあの時と同じかよー！（泣）

「隆介のバカーーーーーー!!!!」
「隆ちゃ〜ん？まだお仕置きが足りなかったみたいだね？」

中略……

「膝枕くらいならあたし（私）がしてあげるのに……」
また何言ってるか聞こえなかった。

こんな日常いつまで続くんだろうか。
そう思ったときにブラックアウトした。

目を覚ましたら教室にいた。

また涼太が治療してくれたようだ。

すまない涼太。

さて、あいつらに怒ろうとしたら、泣きながら謝ってきたのでさすがに怒る気になれず許してしまった。

「そうそう隆介。俺の情報によれば明日二人転校生が来るらしい。」
「沙耶が来てまだ1ヶ月しかたつてないのにまた！？しかも二人！？」

「ああ。それとこれは俺の勘なんだがその転校生、お前と過去に会ったやつだと思うんだ。根拠は無いがそんな感じがするんだ。」
「何てこった……涼太の勘は100%当たるんだよ。」
外したとこなんざ見たことないしな。
しかも転校生はどちらも女の子らしい。

またまた波乱の予感…。
やれやれ…

第5話・隆介命の危機！？そしてまたまた波乱の予感！？（後書き）

次は新キャラです。

お楽しみに！

第6話・転校生は（自称？）フィアンセ！？（前書き）

テスト期間のため更新が遅れました。
申し訳ございません。

第6話：転校生は（自称？）フィアンセ！？

涼太の予言らしきものを聞いた翌日の学校……

涼太の情報が正しければ今日転校生が来るんだよな。二人……。

あまり期待はしない方がいいよな。

そう考えているとホームルームの時間になった。

「おーし。ホームルーム始めんぞ……と言いたいが、実は今日は転校生が来る。」

一人の生徒が

「センセー。女の子ですか？」

と言った。

「ああ。しかも二人だ。両方とも可愛いぞ！」

うおおー！！と隆介と涼太以外の男子が一気に騒ぐ。

「静かにしろ！！進まんだろ！！！」

シーンとなる……

「ったく。んじゃ入ってきて。」

ガラ！

あれ、何だろう？沙耶の時みたいなの違和感を感じる。やっぱり知り合いだろうか……。

「自己紹介を頼むよ。」

「初めまして！柊杏華だよ！宜しく！！」

エライテンション高けーなオイ。

「お、お姉ちゃん目立ちすぎたよ。は、初めまして。柊優香と言います。」

えと、よっ宜しくお願いします。」

こっちは対称的に引つ込み思案か。

柊杏華の方は髪はポニーテールで目は二重で背は低い顔は美人だ。柊優香の方は髪はストレートのショートヘアで目は二重で背は杏華より若干高く顔は美人と言うよりは可愛いと言った方がいいだろうな。

「えっと席は……。」

「先生！隆の近くがいいんですけど。」

「隆？ああ佐々城の事か。別に構わん。空いてるところに座ってくれ。」

「はいー！」

「ありがとうございます。」

スタスタ…ガタ…

「隆、詳しい話は昼休みの屋上で。」

「え？あ、ああ分かった。（誰だっけ？）」

ああ、視線が痛い。特に左右にいる二人の視線が痛い。

涼太は必死に笑いを堪えて楽しんでるし。

ハア……。

昼休み

さて、屋上に行くか。

涼太と未だに殺気を出して睨んでる二人もやはりついてきている。

と、そこへ

「あら。隆介様ではありませんか。どうなされたのですか？」

神崎楓登場。

「あつ楓さん。これから急用で屋上に。」

「屋上ですか？」

「はい。今日来た転校生に呼ばれて……。」

「急に呼び出しなんて……。何か嫌な予感がしますわ。私もお供させていただきます！」

「え……！？マジですか？」

「マジです！さ、行きましょう！」

ああ何ということだろうか。

屋上

ガチャ！

「ようやく来たわね隆！」

「来てくれてありがとう隆くん！」

柊姉妹が弁当を持って待っていた。

「あ、あの〜。状況がさっぱり分からないんですけど…。」
「や、やっぱり覚えてないんですか？」
優香が涙声で言う。

「う、うん。何て言うか…ごめん。」
「じゃあないよ！小学校の時ちよっと遊んだくらいだからね。」
「小学校の時……。」

5年前

「こらー！！お前ら何優香をいじめてるんだー！！」
「やば！杏華が来た！」
「大丈夫だ。こっちは10人もいる。負けるはずかない。」
「確かに。おい杏華！10対1じゃさすがのお前でも不利だろ。」

いじめっ子が迫る。

「（くっ確かにあたしだけじゃ不利だ。でも負けられない！）」
「やれやれ。お前ら女の子相手に集団かよ。情けないな。」
「だ、誰だ。」
「お前らに名乗る名前はない！」
「あんた…誰？」
「その前にこいつらを倒そう。」
「う、うん。」

15分後…

「す、すごい…。」

何と隆介だけでほとんど倒してしまった。

「大丈夫だった？」

「ふえ！？は、はい大丈夫です。」

「そうか。よかったよかった。」

ニコツと笑う。

ドクン……

あっあれ？何だろう…

この人を見ると急にドキドキしてきた。

何だろうこの気持ち…。

これが好きってやつなのかな？

「ありがとう！あなたのお陰で助かったよ。」

「いいよ。それに僕は弱いものいじめするやつ嫌いだからね。」

「あんたいい奴だね。せつかくだから一緒に遊ばない？」

「いいよ。遊ぼう！」

隆介が歩き始めた時

「お姉ちゃん。」

「何？」

「私あの人のこと好きになっちゃったみたい。」

「何だあんたもか…。」

「えつまさか…お姉ちゃんも？」

「うん。あいつ強いし優しいしかっこいいからね。」

「そうだね。」

「おーい何してんだ！早く行こうよ！」
「今行く！！」

三人の出会いはここから始まった…

そして3ヶ月後…

「えっ転校！？」

「うん。家の事情でそうなっちゃった。」

突然の転校に驚く隆介。

「うわあーん！ごめんねー！」

「そっか。それじゃ仕方ないな。」

泣いている優香を慰めながら言う。

「だからさあ。えと…その…。」

顔を赤らめてもじもじしながら言う。

「何？」

「もし大きくなって再会できたら私たちと結婚してくれる？」

「うん！！…えっ！？」

「やったー！！よかったよお姉ちゃん！！」

「これは絶対再会しなきゃね！」

「え…あの…ちょっと！！」

「短い時間だったけど楽しかったよ。じゃあね！！」

「ちよっとー！！…！？？」

そして現在に至る……

「……………」

全員が絶句した…。

「ちょっと隆介……！！あんた結婚なんて約束しちゃったの
お……！！??？」

「隆ちゃん？私と結婚するんじゃないの？」

「何をおっしゃいますか！隆介様と結婚するのは私です！！」

「ほほう。これは面白い。修羅場というやつか。」

ああ、もう帰りたい…

「……………隆介(ちゃん)様……………」

「は、はい??？」

「覚悟……！」

結局こうなってしまうのか……ガク……

まだまだ災難が続きそうだ。

やれやれ……

第7話・隆介ピンチ！…そしてとつとつマイツが！…（前書き）

前半微エロです。

↓注意下さい。

第7話：隆介ピンチ！？そしてとうとうアイツが！？

「う……いてて……ここは？」

気がつくとも教室にいて既に放課後になっていた。
すると……

「「^{くん}隆（ちゃん）！一緒に帰ろう。」

杏華と優香と沙耶か……。

まあ二人には色々話したいこともあるしいいか。

「いいよ。帰ろうか。」

帰路に着く途中

「でもびっくりしたよ。まさかあの約束（？）を覚えてたなんて。」

「そりゃそうだよ。隆にとっちゃ大したことないかも知れないけど、あたらしらにとっちゃ本当に大切なことだったからね。」

「そうか。ごめん、期待を裏切って……。」

「いいの。私たちが勝手に決めたことだから。でも本当に結婚出来るようにアプローチするから！」

「はは……どうも……。」

「（マ、マズイ！！このままじゃ隆ちゃんを取られちゃう。この後はじっくり大胆に攻めなきゃ……。）」

ゾク……

「（う！な、何か悪寒が……気のせいかな？）」

それから二人と別れ、沙耶は何故か僕の家遊びに来た。

とは言っても普通に会話したり、ゲームしたり、晩飯を食ったりとありきたりなことしかしなかった。

沙耶が風呂に入ってるときに考え事をした。

「(一ヶ月くらい前から、沙耶が来てから本当に変わっちゃったな。何の取り柄もない普通の高校生に美女が何人も…。」

沙耶、楓さん、杏華、優香、皆僕が好きって言うけど僕はどうすればいいんだろう。災難続きだけどやっぱり今がものすごく楽しい。関係が壊れるのは嫌。でもいつか決めないといけない。待ってる人に失礼だから…。(難しいなあ…。)」

「何が難しいの?」

「沙耶?風呂上がっ……た……の……。」

「どうしたの?」

「な、ななななな何だその格好は――――！！！！? ? ? ? ?」

今の沙耶の格好は下着とタオルのみだった。

「だって暑いんだもん!あつもしかして私の格好で興奮してるの! ? いやー嬉しいなあ。」

「じゃあこのままやるのか?ベッドもあるし。」

「ちよちよちよちよちよちよと待て!!!駄目だよ女の子がそんなこと言っちゃ。」

「ウブなんだから、かわいい!そんなかわいい隆ちゃんを見ると理性がもたないよ。」

そう言い沙耶は隆介をベッドに押し倒した。

「駄目だよ沙耶!あの…その…こつというのは大人になってからじゃないと。」

「いつの時代よ…。それとも隆ちゃん私とシたくないの？」
「え？」

「だって隆ちゃんいつも私を拒むからさあ。私スタイルには少し自信あるよ？ほら、触ってみて。」

そう言っつて沙耶は隆介の手を掴み、自分の胸に当てた。

「あん…いいよ。」

「うわー…何やってんだよ！！？？」

「どう？結構大きいでしょ？」

「う、うん…じゃなくて！！これ以上やったら取り返しがつかんつて…！」

「私はいいよ。隆ちゃんとやれるなら。」

それに下半身は正直だよ？」

沙耶は隆介のアレをズボンの上から触ったり握ったりした。

「隆ちゃんがこんなに…。私も頑張らなきゃ。」

プチッと音がした方を見たら沙耶がブラのホックを外し、胸がさらけでていた。

「（や、やばい！前の時よりも更にやばい。ど、どうすれば…）」

「さあ隆ちゃん！二人で一足先に大人の階段を上ろう。」

ズルっとズボンを脱がされアレを直に触ってきた。

「うあ…ちよ…よせ…。」

「もう止まらない。私も我慢できないから。」

そっついで沙耶はついにパンツまで脱いでしまった。

そしてそれを見て十数秒後……

「ぶは……!!」

勢いよく鼻血を出して気絶してしまった。
ある意味ラッキーだったかもしれない。

気がつくと朝になっていた。

沙耶は何処にもおらず、置き手紙があった。

「今日は帰らせてもらうよ。それと昨日はごめんなさい。私隆ちゃんが取られるかもって焦ってた。

私は本当に隆ちゃんが大好きだから。どうか嫌わないで。
それじゃ学校で

沙耶」

「そんなことわれちゃ何も言えないよ……。それと僕は沙耶を嫌ったりしないから。」

少し苦笑いした隆介だった。

ナレーター変更……

学校に行き、ホームルームが始まると急に先生は落ち込んだ。

「センサー。一体どうしたんですか？」

「あ、ああ。お前ら…特に女子に残念なお知らせがある。」

「なっなんですか!？」

「実は…とうとうあいつが退院して今日から復帰するんだ。」

しばしの沈黙…

「えー…!!!????(×20くらい)」

「だどよ隆介！」

「そうか。とうとうか…。」

「はあ…ヤダヤダ。」

だが柊姉妹と沙耶はわからなかった。

「ねえ。あいつって？」

「まあすぐ分かる。気を付けな。特に優香はな。」

「「「?????」」」

そして

ガラ!

「おはよう俺の可愛い女子たちよ!それから野郎共も。」

ああ、とうとう来ちゃったよ。

奴の名は時雨悠登。俺と涼太の悪友で、顔は僕以下、スポーツは普通、成績は舞よりちょい下という特に目立ったものはない。

それに加え、極度の女好きかつ変態なため女子には嫌がられているが、本人は全く懲りてない。

「おお!!!君達が噂の転校生か。俺は時雨悠登。どう?これから俺

とデートしない？」

「……お断りです……！」

「いやーそうゆう冴えないところも可愛い……いいじゃないか……！！」

涼太のボディーパーカーがきれいに決まっていた。

「いい加減にしろ悠登！嫌がってるんだから諦める！」

「たくつつれねーな村神。あつ相沢！お前でもいいへぶ……！」

「いちいちうるさいんだよボケ！目障りだ変態……！」

「そ、そんな……。」

「自業自得だ悠登。」

「ちついいよなー佐々城は。こんな美女たちに囲まれてよ……。」

「退院しても相変わらずか……。」

「オラーとつとと席につけ変態……！授業始めんぞ……！」

「せ、先生まで……。」

「（当たり前だ。）×ALL」

全員がそう思った。

昼休み

「いよーし！ナンパしに行くぜ……！」

「勝手にやってろ。僕たちは行くこうか。」

「……は……い（おう）……。」

バカはほつといてさっさと行った。

「しかしあいつも変わっちゃいないわねえ。」

「確かに。」

「ねえ、あの人がどうゆう人なの？」

「まあ大体分かってると思うがあいつは只の変態だ。犯罪レベルのな。」

「ど、どういう事ですか？」

「中学校の頃は普通に女子の着替えを覗いたり、修学旅行の時なんか脱衣所に侵入して女子の下着を盗んだりと最低な事しかない最低な奴だ。」

「何それキモい。女の子の敵じゃん。」

「そ。だから皆特に優香は気を付けてね。」

「は、はい。」

こうして昼休みは終わった…。

教室に帰ると悠登がボロ雑巾のような状態でぐったりしていた。

「何だ？ナンパでボロボロにされたか？」

「ああ。あの超有名な2年の神崎先輩に声を掛けたら“汚らわしい顔のくせに汚らわしい声で私に話しかけるな！！”と言われて見事にやられた…。」

あちゃー、あの人に声掛けるなんていい度胸してるなあ。

あの人は武術・剣術・棒術などのエキスパートだぞ。ホントに馬鹿な野郎だ。

帰りのホームルームで…

「よし、伝達事項は以上だ。あ、それから夏休み前の臨時テストの

勉強しとけよ。この順位によって宿題の量が決まるからな。宿題し
たくない奴は勉強しとけよ。」

「ええー……!!!!」

叫んだのは言うまでもなく舞と悠登だった。

また面倒な事になってきたな。

やれやれ……

第7話：隆介ピンチ！？そしてとうとうアイツが！？（後書き）

またまた新キャラ登場しました。

ひよっとしたらまだ出すかも知れません。

お楽しみに！

第8話：ドキドキ(?)の勉強会!?

えーただ今僕の家で勉強会をやっています。

メンバーは僕、涼太、舞、沙耶、柊姉妹、変態(悠登)です。

「へえ。優香は見る限り優秀だねえ。」

「そ、そんな事ないですよ。えへへ。」

「隆!あたしだって悪いわけじゃないんだよ。」

「いや、舞よりちよっと上くらいじゃ何も言えないよ。」

「確かに言えない…。」

「「な、何よ!!隆(介)は頭のいい人が好みなの!?!」

「ち、違うよ!そうじゃなくて。」

「あうう。違うんですか?」

「だからー!!」

「いやー隆介!お前といるといつも楽しいことばかり起こるなあ

!」

「るせー!!お前も手伝え!!」

しばらくこんな状態が続いた。

何か忘れてるような…

「オイー!!俺をシカトするなー!!」

あっそういえばお前もいたんだっけ…

「ひでー!俺いつもそんな扱いじゃん。」

いや、それはお前の性格に問題があるんだろ。

「よし、全員注目！」

皆涼太の方を見た。

「これから俺が作った模擬テストをやってもらおう。科目は数学・化学・物理・生物・地歴公民・英語だ。選択科目については自分で選んでくれ。」

「……えー……！マジ！？」「」

「マジだ。言っておくがこのテストの点数によって晩飯が食えるか食えんか決まるからな。」

「そつそれつて俺が一番不利じゃね？」

「知らん。日頃から勉強せんで遊んでるやつが悪いだろ。」

今日の晩飯は俺と隆介特製のシチュー、パン、サラダ。食後のデザートとティーだ。分かるな？点数が悪くなるにつれて減っていく。ひもじい思いをしたくなかったら点数を取ることだ悠登。」

「うつつ……。」

こうして始まった。

「そこまで！前に持ってきて。ちなみに晩飯を減らす基準はこれ。」

80以上	0品
65以上	1品
50以上	2品
40以上	3品
30以上	4品
29以下	5品

「んじゃーいい順に発表すんぞ。第1位隆介！平均92。」

「すごい隆！頭いい。」

「さすがです。隆くん！」

「いやーそうでもないよ。」

「そうだな。せめて95は欲しかった。」

「無茶言うなよ…。」

「んじゃー第2位優香さん！平均88。」

「すごいよ優香！頑張ったじゃん。」

「えへへ。ありがとう隆くん。」

「姉とは大違いだな。」

「何か言ったか！？」

「んじゃー次いこう。」

無視かよ…

「第3位沙耶さん！平均81。」

「ギリギリセーフね。」

「よかったね沙耶。」

「うん！隆ちゃん。ご褒美のキスは？」

ギロ！！

「勘弁して下さい！（三人の視線が痛い。優香もものすごく怖いんだけど…。）」

「おもしれーな！んじゃー気を取り直して第4位杏華さん！平均5

6。」

「二つも抜きか。」

「ドンマイお姉ちゃん。本番は頑張ろう！」

「うん！」

この姉妹は仲いいな…

「んじゃー第5位相沢！平均51。」

「あ、危なかった。」

「舞くももう少し頑張ろうよ…。」

「悪かったわね！どうせあたしはバカだよ！」

な、なんで僕が怒られなきゃいけないんだろう。

「さあ〜で最下位は名前を呼ぶのも不快になる変態君！平均14。」

「や、やっぱり俺ってこうゆう扱いだ…。」

「つーわけでお前は飯抜き。他のみんなは向こうで飯食おう。」

「…」「…」「はい！」「…」「…」

「お、おいしい！！これ隆が作ったの？」

「まあ殆んど涼太のお陰なんだけどね。」

「そんなことない。お前もかなりうまくなってる。自信を持って！」

「お、おう！」

「あの〜隆くん。レシピ頂けないでしょうか？」

「あれ？優香も料理できるの？」

「優香もあたしもできるよ。結婚しても困らないように…ね？」

僕にウィンクしてきた。

沙耶と舞が気付かなかったのは幸이었다。

途中悠登がねだってきたが、己の無力さを呪えと言ってやらなかった。

飯の後も勉強をし、10時にお開きになった。

そしてテスト当日…

「始め！」

と言われ一斉にペンの音が聞こえてきた。

僕も集中して問題に取り組んだが、何と涼太のテストより簡単であつさり解けてしまった。

「よしそこまで！ちなみに宿題の量はこれだ。」

90以上	無し
80以上	4分の1
70以上	3分の1
60以上	2分の1
50以上	通常
40以上	1.5倍
30以上	2倍
29以下	3倍+補習

ふむ…なかなか良く振り分けてるな。

「順位は廊下に貼ってる。ちゃんと確認しとけ。」

順位を見ると…

1位	村神涼太	平均100			
2位	佐々城隆介	平均97	3位	柊優香	平均95
9位	神代沙耶	平均87			
48位	柊杏華	平均70			
77位	相沢舞	平均62			

485位 時雨悠登 平均23

哀れ悠登…補習頑張れ。

余談だが、楓先輩の2年では先輩は平均100でトップだった。すごい。僕が勝てたのは奇跡だったに違いない。

下校中…

「テストお疲れ。皆頑張ったね。」

「はい！よかったです。」

「いやー苦労したよ。」

「隆ちゃんも頑張ったね。」

「ほんと。100位以内なんて初めてだよ。」

「今日は皆にデザートを奢るよ。」

「……え？いいの？」「」「」

「うん。皆頑張ったから。たまには僕も何かしなきゃね。」

「……隆（介）（くん）（ちゃん）…」「」「」

皆がポーっとなる。

「（なるほど。こうゆう優しい性格の持ち主だからこそ彼女たちに好かれるのか。やっぱりお前はすげーよ隆介…。）」「」

「サンキュ！やっぱりお前は俺の最高のダチだぜ！」

「涼太…。」

この後皆にデザートを奢り、二万近くいったが、別に悲しくもなかった。

そのまま僕の家でお泊まり会となり、皆仲良く飯を食ったり、会話をしたり、ゲームをしたりと大いに盛り上がっていた。

脱衣所で…

「いやー楽しかった。やっぱ友達とはいいものだなあ。」

ガラ…

「また皆で遊びたいもの…だ…な…」

何とそこには一緒に風呂に入ってる杏華と優香がいた。

「あっ隆。何？一緒に入りたい？」

「りりりり隆くん！！どどうしているんですか！？」

「あついやごめん！わざとじゃないんだ。二人が入ってるのを知らなかったんだ。」

「なーに顔を真っ赤にしながら照れてるの？どうせ結婚したら一緒に入ったりするんだからさあ。」

「あうう。そ、そうだけどさあ。」

「と、とにかく悪かったよ！」

出ようとしたが…

「隆介？何してんの？」

「もしかして覗き？私というものがありませんか…。」

「ち、違うよ舞、沙耶！事故なんだ。知らなくて…。」

「あら？言い訳なんて男らしくないよ？いくらあの二人が可愛いからって覗きは良くないよ。」

「隆ちゃん？やっぱりまだまだお仕置きが足りないみたいだね？もう一回調教しないといけないみたい。」

「だから二人とも僕の話…」

「「問答無用！覚悟！！」」

ああ、何故僕ばかりこんな目にあうんだろうか。
ガク…

目を覚ますとりビングにいた。

気絶して10分たってないくらいだ。

もうだいぶ慣れてきたのかなあ？気絶時間が短くなっている。

風呂に入り、少し遊んだ後就寝となった。

僕も眠かったのでさっさと寝ようとしたら、ドアの開くような音がしたが気のせいと思いスルーしたがその時…

ギユ…

「えっ？」

後ろから誰かが抱きついてきた。

確認すると何と沙耶ではなく舞だった。

「どっとうしたの舞！？」

「…ね…いい。」

「え？」

「お願い。あたしを抱いて？」

「……………」

一瞬何を言っているのか分からなかった。

「き、急にどうしたんだよ舞！？」

「隆介は最近沙耶とか杏華、優香ばかりしか構ってなくてあたしは全然構ってくれない。不安なの。隆介があたしを捨ててしまっうんじやないかって。もういなくてもいいと言われるんじゃないかって…。ひくっぐすっ…。そう考えると、怖くなって。涙が止まらないよ…。」

「……………」

知らなかった。

僕は舞を苦しめていたなんて…僕は本当にバカだ。

「ごめん舞。気付いてやれなくて。

悪いとは思ってるけどやっぱり抱けない。」

「どうしてなの!? やっぱりあたしが嫌い? いつも殴ってばかりだから……………」

「そうじゃないんだ。…やっぱそうゆう事はお互いを好きにならなくちゃいけないと思うんだ。

だから無理だ。もっと自分を大事にしなくちゃ。」

「良かった。あたし嫌われたかと思った。」

「そんなはずないだろ。殴られるなんてのは日常茶飯事だし。」

「悪かったわね。暴力的で。」

「はは! ……でもどうして急に不安になったんだ?」

「そ、そりゃああんたが他の女の子と仲良くなれば不安になるよ!」

「…何故?」

ブチ!

「……………ふん!」

ガス!!

「ぐほ! ……いきなり何しやがる!」

「うっさいわねバカ! 鈍感!! 女たらし! ……!」

ボタン!!

何故か舞は急に不機嫌になって出ていった。

「えっあれ？何で？」

ワケわからなかった…。

何故機嫌が悪くなったのかは分からないが、一応明日謝っておこう。
いてて、腹がズキズキする。

見事にボディーブローが入ったし…。

寝よ寝よ…

朝起きるとみんなすでに起きていた。

「おはよう隆介！」

「おはよう隆ちゃん！」

「よう隆介！」

「おっは〜隆！」

「おはようございます隆くん！」

「あ、ああおはよう舞、沙耶、涼太、杏華、優香。」
びっくりした…朝からこんなに挨拶するとは…

朝食を軽く済ませ、学校に向かった。

今日は終業式だったな。

あ！忘れてた。

「ま、舞…」

「何？」

「その、昨日はごめん…」

「いいよいよ。いづれ気付かせるから。」

気付かせるって何だ？

それに昨日はあれだけ不機嫌だったのに今日はかなり機嫌がいいな…

やっぱり女の子ってよく分かんないな…

やれやれ…

第8話・ドキドキ(?)の勉強会!?(後書き)

次回は軽く登場人物の紹介をしたいと思います。
お楽しみに!

第9話：登場人物紹介！！（前書き）

ではでは登場人物の紹介を始めます。

第9話：登場人物紹介！！

佐々城隆介

身長：172cm 体重：59kg

成績：中の上 トップ3

スポーツ：中の下

容姿：下の上（実際は中の上）

好きなもの：家事、友達

嫌い（苦手）なもの：いじめをする奴、女の子

本作の主人公。成績以外はいたって普通の高校生だが、誰にでも優しく、困ってる人を放っておけない性格なので一部の女子からモテている。が、超絶な鈍感のため気付いていない。女の子に免疫があまりなく、裸を見たらよく鼻血を出したり、攻められると顔が真っ赤になったりと、今時珍しい『シャイボーイ』である。

村神涼太

身長：177cm 体重：60kg

成績：常に満点でトップ

スポーツ：全国常連の部活生より上

容姿：学校でもトップクラスのイケメン

好きなもの：友達、面白いこと、情報集め

嫌い（苦手）なもの：いじめ、人の恋路を邪魔する奴、女の子

隆介の親友。成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗、さらに家事もプロ級といった完全無欠の完璧超人。
ただ、たまに不可解な行動をとったりする謎だらけの人間。
家族は両親はすでにおらず一つ違いの姉と妹との三人暮らしらしい。女の子を怖がる理由は過去に何らかの事件があったせいだとか…。

相沢舞

身長：162cm 体重：47kg
バスト：79

成績：下の中 上の下
スポーツ：部活生の男子を凌駕する
容姿：学校でもトップ10に入るくらい
好きなもの：運動、甘いもの、隆介
嫌いなもの：虫、ちゃらちゃらした男

本作のメインヒロイン。隆介の幼馴染み。
ちよつと短気で暴力的で嫉妬深く、隆介をよく殴っているが、それでも優しく接してくれている隆介に幼い頃から好意を抱いているが、なかなか素直になれずにいる。
中学ぐらいから何かと遠回しにアプローチをしているが本人が鈍感なため気付いてくれない。
料理は壊滅的で、料理を爆発させたり、隆介を二日間眠らせたこともあったらしい。
胸があまり無く、自分の周りに大きな人が出てきて焦りつつある。

神代沙耶

身長：159cm 体重：46kg

バスト：87

成績：上の上

スポーツ：下の上

容姿：学校でもトップ

好きなもの：シヨッピング、隆介

嫌いなもの：友達以外で隆介に近づく女、デレデレする隆介

メインヒロインその2。

昔、隆介に困っているところを助けられ、それ以降隆介に好意を抱いた。

学校では上品に振る舞っているが、それ以外では隆介にベッタリで時々危ないこともしてしまうほど淫乱になってしまう事も。

隆介が他の女の子にデレデレしてしまうと、愛用の鞭で痛めつけ、調教して楽しむ超DSでもある。胸はかなり大きい、それでも見向きもしない隆介に対して疑問に思うことも…。

神崎楓

身長：166cm 体重：48kg

バスト：83

成績：2年では常にトップ

スポーツ：部活生を軽く凌駕する

容姿：学校でもトップ3に入る

好きなもの：努力、父親、隆介

嫌いなもの：お見合い、自分より優れてる人

隆介たちの1コ上の先輩。神崎財閥の令嬢。プライドが高く、自分より上回った隆介を敵視していたが、自分を救ってくれた隆介に好意を抱き、結婚まで申し込んだ。

昔、身分上人に敬遠され父親を憎んでいたが、隆介のお陰で和解した。

父親も隆介なら結婚を許すらしい。

柊杏華

身長：154cm 体重：42kg

バスト：81

成績：下の上 上の中

スポーツ：舞とだいたい同じ位

容姿：学校ではトップ10に入るくらい

好きなもの：妹、隆介、バラエティー番組

嫌いなもの：妹を傷つける奴、暗い奴

5年前に隆介と出会った女の子。

勝ち気で常にハイテンションでちょっと自分勝手だが、妹を傷付ける奴には容赦がなく、昔からいじめられっ子だった妹に代わって制裁を与えていた。

ある日、自分のピンチに救ってくれた隆介に好意を抱いた。

再開と同時に結婚すると勝手に決めつけてしまったが果たして!?

柊優香

身長：160cm 体重：45kg
バスト：86

成績：学校ではトップ5に入る

スポーツ：下の下

容姿：学校でもトップ10に入る

好きなもの：姉、隆介、読書

嫌いなもの：いじめる奴、男（隆介、涼太は除く）

5年前に隆介と出会った女の子。

杏華の双子の妹で、姉とは対称的におとなしく引つ込み思案。『あ
うう〜』が口癖。

昔、男共にいじめられ、男が怖くなったが、隆介に助けられ一目惚
れし、男で唯一平気になった。

大人しいが、メンバーの中でもトップを争うほどのヤキモチ妬きで、
時には隆介をびびらせるほどの視線を浴びせることもある。

かなりの着痩せタイプであり、胸は沙耶に続いて大きい。

が、恥ずかしいため人には見せず、知っているのは杏華だけである。

時雨悠登

身長：180cm 体重：72kg

成績：常に最下位いくかいかないくらい

スポーツ：中くらい

容姿：下の中

好きなもの：女の子、ナンパ

嫌いなもの：勉強、モテる男、彼氏のいる女の子

隆介、涼太、舞の腐れ縁。大の女の子好きで、昔からセクハラをほとんど当たり前のようにするなどの犯罪者でもある。

当然女子全員から拒まれているが、本人は全く自覚なし。

尚、カップルは大嫌いなので、（要するに妬み）様々な嫌がらせをして、男子生徒のほとんどにも拒まれている。

名前で呼ばれるよりも、『変態』と呼ばれる事が多い。

一部は『3K悠登』（キモい、キシヨい、臭い）と呼ぶことも。

片瀬凌哉

身長：184cm 体重：82kg

好きなもの：生徒、妻、娘、格闘、居合

嫌いなもの：変態、不良

本編には名前が無かったが、隆介たちのクラスの担任。24歳。スポーツ系が得意だが、K大を首席で卒業した文武両道の超エリート。恐いが顔もそこそこ良く、人当たりもいいため男女問わず人気がある。

結婚して、娘がいるとか…。

スポーツは全てでき、特に居合は世界でもトップ10に入れるほど

の達人級である。

第9話：登場人物紹介！！（後書き）

次回から本編です。

だから進めています。が宜しく願います。

もう少しエロくなるのかな？何て思っています（笑）

第10話：楽しいパーティーの始まり！？ 前編（前書き）

今回は初めて前編後編に分けて見ました。

第10話：楽しいパーティーの始まり！？ 前編

テストも終わり、今日は終業式である。
早いものだ…入学してもう三ヶ月か。

校長の長つたらしい話も終わって、LHRで通知表をもらった。

「体育だけ3で他は全部5か…。出だしは好調だな。」

「俺は意外にもオール5か。」

「意外じゃねえだろ。舞は？」

「うう。体育と国語しか5がなかった。」

「私は理科系と体育以外5だった。」

「あたしは体育と文系科目以外5だった。」

「あうう。体育2だったよ。」

僕、涼太、舞、沙耶、杏華、優香がそれぞれ言った。しかし皆取れてるなあ…

机に突っ伏してるバカは言うまでもないか…

そして下校…

「隆介、あんた夏休み何するの？」

「ううん。これといった予定もないんだよなあ。」

「じゃあ隆ちゃん！私の部屋のベッドと一緒に大人の階段を…」

「上らせるか！…！」

見事にハモった。
やっぱり皆仲良いねー。

それにしても沙耶が日に日に危なくなってきたような気がするが…

「今思ったけど何で皆そんなに怒るの？」

「言われてみりゃそつだな。」

「……………」

「あ、あれ？」

「…………ハア…………にぶちん。」

「……………」

乙女心など理解できるはずもない隆介と涼太であった。

皆と分かれ、家まで行くと、何か寒気がした。
気にしまいと家のドアに触れようとした瞬間

ダーン！！

「痛っ！？」

ドサ…

一瞬の事だった。

何者かに狙撃されて少し痛かった。

多分麻酔か何かだろう…少し痺れて眠……………

ガク…………

意識を失ってしまった。

「隆…………お…………て」

ん？何か聞こえたような…。

「隆介起きて。」

「舞？なん……………うわぁー！！！！」

「もう急に大声出さないでよ！！」

「なななな何で下着姿でいるんだよ！！??？」

「可愛いなあ隆介は。そうやってあたしの心を奪うからだよ？か・ら・だ・も・ね？」

どうなってるんだ？

いつもの舞じゃない…

「ねえ焦らさないでよ！あたしと愛を育もうよ〜。」
「…
といい下着を脱ごうとしたが…」

「ストー…ツプ！！！何かいつものお前じゃないよ！」

「隆介が悪いんだよ？あたしのアプローチにも気付かないから。」

「いつそんなことした？」

ブチ！

グイ…………ドサ！

「うわー！！」

くっ力が強い…振り切れないとは。

「あたしを傷つけた代償は高くつくよ？あんたの体で払ってもらおう！」

「待て待て！」

「問答無用！！！」

ガバ！

「うわああ！！！」

あれ？ここは確か…

ガチャ…

「どうされました？隆介様？」

「やっぱり楓さんでしたか…。」

「手荒な真似をしてすいませんでした。」

楓さんが謝る

「まあ無事だったからいいですけど、どうかされたんですか？」

「はい。今日は知り合いのパーティーに参加するのですが、ダンスの時にむさい男どもが私に近づいて来るので、隆介様と踊ろうと思っていました。」

「は、はあ。事情は良く分かりましたが僕みたいな一般人が参加して大丈夫でしょうか？」

「構いません。どなたでも参加自由なので。それに……私隆介様とどうしても踊りたかったのです……」

トキー！

や、やばい。顔が熱くなってきた。

「で、では早速準備をしましょう。アリス！セレス！」

「は！お呼びでしょうか？」

二人のきれいな女性が急に現れた。

「この者をパーティー用の服装を。」

「かしこまりました。」

二人にさらわれてしまった。

「いやーいい体してるねえ。」

「じゅる。このまま食べたい。」

「んなこと言ってる場合かー！！！」

まったく！どうして僕の周りには羞恥心がない女の子が多いんだ！？

かなりもめたが、ようやく服も決まり待機中。

改めてみるとこの服めっちゃ高そうなんだけど。

僕より三桁位違うだろう。

「コンコン…」

「隆介様？楓です。よろしいでしょうか？」

「楓さん？どうぞ。」

ガチャ…

「失礼します。…わぁお似合いですね。」

「そ、そうですか？馬子にも衣裳って感じもするんですが。」

「とんでもございません。それはたったの三百万程度のものですか
ら。」

「や、やっぱり馬子にも衣裳だ…。」

「たけーよー！！」

「僕のなんか一万いってないくらいだぞ。」

「でも楓さんもとても綺麗です。似合ってますよ？」

「え？そ、そうですでしょうか？あ、ありがとうございます…！」

「楓さんは顔を真っ赤にした。」

「さ、さあ準備も完了したので移動しましょう。」

「そ、そうですね。」

「僕たちはへりに乗り込んだ。」

「す、すごい。まさかへりに乗ることになるなんて…。」
「初めてですか？」

「はい。一般人じゃまず乗ることはありませんから。」

「そうですか。」

「ところで目的地までどれくらいかかるんですか？」

「大体4、5時間位。」

「そ、そんなにかかるんですか？」

「はい。関西にありますから。」

「だったらそれぐらいかかるか…。」

しばらく時間がたつと、見るからに豪華そうな家があった。あんなものが日本にあるとは…

へりを降りるとたくさんの執事やメイドが並んでいた。

「お待ちしておりました楓様。」

「出迎えご苦労様。こちらは私の客人の佐々城隆介様です。失礼のないように。」

「はい。」

「いやーそんな堅くならなくても…」

豪邸の中に入ると楓さんの家と似たような高価な絵や壺やその他モロモロがたくさんあった。

「しばらく歩くと…」

「やー久しぶりだね、ボクの楓ちゃん。もしかしてボクと結婚する気になったのかい？」

「白河雄也。やっぱりあなたも来てたのですね。残念だけどそれはあり得ませんから。」

「まーだそんな強がりよ…。おや？その貧乏臭いガキは誰かね？」
カチン！

「そうゆうあんたこそ誰なんだよ！いかにも七光りのバカ息子って感じがするよ。楓さんに無理矢理迫る変態が！」

ムカ！

「随分失礼なガキじゃないか。それに気安く楓さんと呼ぶとはいい度胸してるじゃないか。」

「やめなさい白河！私の婚約者への悪口は許しません！」

ピシ…

あ、口走ってるよ楓さん…！

「こ、ここ婚約者だと！？ボクというものがありません！こんな幸薄そうながきのどこがいいんだい！？」

「あなたに隆介様の素晴らしさを説明したところで到底理解できませんわ！」

「み、認めないぞ！おいそこのガキ！」

「何だバカ息子？」

「決闘だ！剣を使った真正正銘の決闘だ！」

「な、何言ってるの？あんた剣の達人で…。」

「いいだろう。受けてたつよ。」

「隆介様！相手は達人です。勝ち目は…。」

「ない訳じゃないですよ？僕も刀を使ったことありますから。」

「ですが…」

「大丈夫です。奴を叩きのめしてあなたに近づかないようにしますから。」

「どうしてそこまで…」

「僕嫌いなんです。ああやって権力にすがって偉そうにする奴。」

「分かりました。けれど無茶はしないで下さいね？」

「はい！」

こうして決闘が始まるうとしていた！

果たしてどうなる！？

今回は『やれやれ……』の締めは無しだ！

第10話：楽しいパーティーの始まり！？ 前編（後書き）

さあ決闘はどうなるか！？後編に続く！！

第11話：楽しいパーティーの始まり！？ 後編（前書き）

前後編終わりです。

次は……

第11話：楽しいパーティーの始まり！？ 後編

奴との決闘のため、準備をしていた。

「（奴は僕より5、6歳上。経験でいったら奴の方が上だ。やはりあれを…）」

そう言い僕は一つの小さな箱を手を取った。

この箱は涼太からもらったもので、どんなにでかいものでも納めることが出来る不思議な箱だ。

涼太の企業が開発したものだ。原理は一切不明。

一体あいつどんな企業に勤めてるんだ？

不思議に思いながら箱を開けると、一本の刀を取り出した。

刀身には一点の曇もない綺麗な刃となっていた。

「宜しく頼むよ『灰塵』」

そして試合会場へ…

そこには他の金持ちの人がたくさんいた。

不満だらけと思ったら意外と盛り上がっていた。

「隆介君。」

「楓さんのお父さん…」

何とそこには楓さんのお父さんがいた。

「楓から聞いたよ。…面倒事に巻き込んですまない。」

「いいんです。僕が勝手に受けたんですから。」

「ありがとう。…知っての通り白河は楓に付きまとっている。頼む！奴を叩きのめして楓を救ってくれ。」
「もちろんです。僕もあいつは嫌いですから。」
「君ならそう言ってくれると思うたよ。だが、無茶はしないでくれ。」
「はい！」

しばらくすると

「やあ少年。逃げなかつたんだね？」
「当然さ。あんたを倒して二度と楓さんに近づけないようにしてやる。」
「なるほど。ではこうしよう。君が勝ったらボクは楓ちゃんから手を引こう。…でもボクが勝ったら楓ちゃんには近づかないでもらうよ？」
「いいよ。その条件乗った。」
「決まりだね。じゃあ始めようか？」

チャキつと奴が剣を構える。
構え方からして奴は中々の腕前だな。

「じゃあ行くよー！」

タッタッタ…

「！ー！」

ブンー！！

「危ねえ…。」

何とか避けた。

「やるじゃないか。」

「なめるな!」

キーン!

「む!?こいつ出来る…」

キーン!

ブン!

シャ!

カーンキーン!

しばらく切り合いが続いた。

「ハアハア…何だこいつ。ボクとあれだけ切りあっても息一つ上がらないだと!」

「その程度か?口ほどにもないな。」

「何だと!まだまだこれからだ!」

ブン…キーン!!

観客席…

「す、すごいですね。あの白河と互角…いえそれ以上とは。」

「さすがだ隆介君。ただ者ではないと思ったが、まさかこれほどとは…」

皆が驚いていた。

「ハアハアハア…。くそ、何で当たらないんだ!？」

「遅いんだよ。力任せに斬ろうとするからスピードが出ないんだ。

…最初はかなり出来ると思ったが、この程度か。そろそろとどめと行くか。」

「やれるものならやってみろ！」

シャツ!

ズバ!!

「ガツ!？」

肩を少し斬った。

「分かるよな?今わざと少ししか斬らなかったの。もう諦めな。勝負はすでについてる。」

「な、なめるな。ボクが凡人に負けるなんてことあっちゃいけないんだ!」

「あつそ。どうせ今から負けるから。」

シャ…ズガーーン!!

「がは……」

「チェックメイトだ!」

ドサ…

「峰打ちだ。死にはしないさ。」

うおおー!!!!

大歓声が巻き起こった。

「隆介様！」

「楓さ…うお!？」

ガシッと抱きついてきた。

「ありがとうございます。またあなたに救われました。」

「お役に立ててよかったです。」

「でもあの時キャラ違いませんでした？」

「何故か僕武器を持つと戦闘狂になる二重人格なんです。」

「そうですね。ですがそれでも隆介様に変わりはありません。」

「楓さん…」

しばらく感動して動けなかった隆介だった。

そして

「いやー今日は普通のパーティーより素晴らしかったよ。少年よ、今日はたくさん楽しんでくれ！」

「は、はい!」

少し戸惑い気味だったが、やはり楽しかった。

このあと楓さんとダンスをして（とは言ってもうまくはできなかったが）時間もあっという間に過ぎ、パーティーは終了した。

へりの中…

「隆介様。今日は本当にありがとうございました。あんなに楽しかったパーティーは初めてです。」

「そ、そんなに言われると恥ずかしいです。」

「うん。やはり君には是非楓と結婚してほしいんだが…」

「あ、あの…その件については…」

「分かっている。だが君ならいつでも歓迎するぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

帰ってきた頃には外は既に真っ暗になっていた。

が、今家にはあまり近づきたくなかった。

なぜなら家から人をも殺せるんじゃないかってくらいの殺気が満ちていたからだ。

「やっばー。あいつらいるし。つーか何で僕の家の場合持ってんだよ…」

このままではラチがあかないので覚悟を決めてドアを開けた。

「おっ帰り〜隆介。」

「遅かったじゃ〜ん隆ちゃん?」

やはり二人がとびっきりの笑顔で待っていた。

しかも沙耶に至っては鞭まで持つてるし…。

「何処に行ってたのかなあ?」

「え、えっと涼太と出掛けてた。」

バチン！！
ドゴン！！

「嘘つくんじゃねーよコラ！」
「ネタは上がってるんだよ！」

ひい〜！！
家を壊さないでくれ〜！

「涼太くんから聞いたよ？神崎先輩とパーティーに行ってたって？」
な、何であいつが知ってるんだー！！！！？？？
あいつ何処にいやがった！？

「しかも一緒にダンスしてたって？うふふ、これはいつもよりキツくお仕置きしなくちゃね〜？」
「ま、待て沙耶。鞭は痛いつて。僕はマゾじゃないから。」
「元々浮気する隆ちゃんが悪いんでしょう？」
そ・れ・に。隆ちゃんをお仕置きするの面白いんだもん」

こ、このサディストがー！！

「「隆介りゅうすけ？？」
「は、はい？」
「「覚悟ー！！」「」

結局最後はこうなるのかよー！！！！！！
やれやれ…ガク……

第11話：楽しいパーティーの始まり！？ 後編（後書き）

次はドキドキの海水浴編にしたいと思います。
まあありきたりな事しか書けないと思いますが…

第12話：ドッキドキの海水浴！？ 前編（前書き）

文章が長くなりそうなので、また分けようと思います。

第12話：ドッキドキの海水浴！？ 前編

パーティーが終わって数日がたった。

沙耶と舞にいつも以上にリンチされたので回復が遅くなり、ようやく治った。

今部屋には僕、舞、沙耶、涼太（今はトイレに行ってる）がいる。とは言っても暇でやることもなかった。

「暇だね〜。」

「全くだ。」

「だから隆ちゃん。私とベッドで…。」

「何でお前はいつもエロい事しか言えないんだ！！？」

「だって隆ちゃんが私を誘ってるんだもん。私我慢できないよ〜。」

少しエロっぽく言う。

「うっ！！」

ヤバ。くらっときた。

「デレデレすんな！！」

ガン！！

「ぐっ！？（あ、危うく誘惑に負けるところだった。）」

「（ちっ失敗か。でもまだチャンスはある。）」

そんな風に色々やり取りしていると…

ガチャ…

「オーイ隆介。お前宛てに手紙だぞ。」

部屋に入ってきた涼太に一通の水色の手紙を渡される。

「あ、楓さんからだ。」

「「!!」」

あれ？何で沙耶と舞、殺気を漲らせてるんだろっ？

「隆介！早く開けなさい!!」

「手紙の内容気になるしねえ。」

いやー沙耶？鞭持つてると開けづらいんだけど…

まあいつか。

とりあえず開けてみた。

すると、達筆な文字が入った文章があった。

『拝啓 空が青く輝き、夏らしい暑さになりましたが、いかかお過ごしでしょうか？

さて、この度は隆介様とお友達様に我が神崎家が所有しているプライベートビーチにご招待したいと思います。日時と場所は一番下に書いています。

尚、拒否をした場合は隆介様に死よりも苦しい目にあってもらいます。

それでは、お体に気を付けて 敬具』

……あれ？拒否したら死よりも苦しいって…

「よかったじゃねーか隆介！プライベートビーチだってよ！」
「う、うん。みんなもいいみたいだから杏華たちも誘うか。えっと
日時は…」

一番下を見ても何も書いてなかった。

「…何も書いてないぞ？」

「どれ、ちよつと貸してみる。」

「ああ。ほら。」

「こいつは多分…これだな。」

すると涼太はライターを取り出した。

「それで一体何する気なの？」

「まあ見てなつて。」

ライターの火をつけると、手紙の下に近づけた。
すると、文字が浮かび上がってきた。

「「「！！！！？」」」

誰もが驚いた。

「涼太、これ何？」

「これは昔から機密文章とかに使われてるちよつとした仕掛けだな。
俺もやったことあるからすぐ分かった。」

「何でお前が知ってるの？」

「それはひ・み・つ。」

気持ち悪ー！

まあ教えちゃくれないって予想はしてたが…

「ところで日時は？」

「え？あ、ああ。ええと…」

『尚、日時については7月27日午前5時

場所は隆介様のお宅です。死よりも苦しい目にあいたくなければ、この日は何としてでも空けてください。では後ほど…』

はい！是非とも空けときます！

「でも7月27日は明後日じゃん。急いで準備とかしなきゃ。」

「舞ちゃんの言う通りだね。私も準備しなきゃ。」

「分かった。じゃあ杏華と優香には僕が連絡しとくよ。」

「俺も準備しなきゃな。じゃ隆介。また後で。」

みんな準備をしに一旦帰った。

早速杏華の所に電話をした。

ガチャ…

「もしもし終です。」

「あ、優香？」

「隆くん？どうしたんですか。」

「実は…」

「そうですね。分かりました。お姉ちゃんにも伝えときます。」

「分かった。じゃまた後で。」

「はい。」

ガチャ…

これで杏華の所にも連絡をしたな。

3K悠登は…どうでもいいか。

あいつの番号知らねえし。

「…僕も準備しよう。」

女の子は準備とかは大変みただけど、僕は最低限なものしかなかったから2、3時間くらいしかかからなかった。

そして7月27日…

約束の時間20分前になり、七人全員が揃った。
ん？何か多いような…

「ひでーぜ佐々城！俺を誘わないなんてよ！」

「何でお前がいるんだ？」

「すまん。俺が呼んでしまった。」

「…」「…」「涼太（さん）！？何で！？」」「…」「…」

「うっかり口が滑ってしまった。ホントすまん！…」

必死に涼太が謝る。

「まあ呼んでしまったものはしょうがないか。」「…そうね。変なことしたらぶちのめせばいいことだし。」

「な、何か俺って扱いひどくねえ？」

あわれ悠登…

そして約束の時間になった。

バリバリバリバリ…

「何かへりの音がうるさくない？」

「そう言えば…あつもしかして！」

外に出ると隆介の思った通り神崎家のへりが来た。
しかも前のより二回りくらい大きい。

「お待たせしました。隆介様、皆様…」

「やっぱり楓さんでしたね。」

「すごい！大きなへりだ！」

「ところで隆介様。何で変態もいるんですか？」

「やっぱり変態って言われたよー！」

ガンー！！

「黙ってる。すみません。実は…」

「なるほどそういうことでしたか。」

「すみません。もしあいつが変なことをしたら僕たちに言って下さい。」

「大丈夫です。私たちが向かうプライベートビーチには戦闘に長けたプロが何人もいます。心配ないでしょう。」

「分かりました。」

「では出発しましょう。皆様乗ってください。」

こうしてへりは目的地に向け出発した。

へりの中では女性陣の周りに異様な空気が漂っていた。

「やはりあなた方も来ましたか。」

「当然です！隆ちゃん一人にはさせられません。」

「それはあたしのセリフよ！」

「それに隆はあたしたちと結婚するんだからねえ。」

「そ、そうです！」

しばらく沈黙が続いたあと

「皆さんは本当に隆介様が好きなんですネ。」

「もちろん。隆ちゃん以外は愛しません！」

「あ、あたしも…（まだ隆介には告白すらしてないけど…。」

「あたしも！そのためにここに来たんだから。」

「わ、私もです！」

「ライバルが多いですわね。ですが隆介様が誰を選んで文句なしですよ。」

「……はい……」

ん？異様な空気から急に和やかな空気に変わった。

女の子ってよく分かんないな。

でも仲良くなっみたいでよかった。

「くそおー！ー！！何で佐々城ばかり！？」

何言ってるんだこいつは。

ワケわからん…

数時間後…

ビーチが見えてきた。

その隣には超豪華なホテルがたっていた。

降りると…

「「「うおー！」「」

「「「わあー！」「」

そこは綺麗な砂浜青く透き通った海だった。

「すごい…パラダイスだ。」

「これは驚愕だな。」

「うおーナンパのしがいがありそうだ。」

「お気に召しましたか？」

「うん！…ありがとうございます楓さん。」

隆介は楓の手を取る。

「い、いえ。これぐらい当然です。」

嬉しそうに顔を赤らめた。

「「「ムッ！」「」

視線が一気に一点に集中する。

ゾク…

う…悪寒が…

「とつとにかく折角来たんだから泳ごう。」

「そうですね。ではあそこで待ち合わせでいいですか？」

「決まり！それじゃ解散！」

みんな着替えに行った。

それにしてもここでも何か僕の身に起こりそうな予感がするのだが……
やれやれ……

第12話：ドッキドキの海水浴！？ 前編（後書き）

さてさて次はどうなるかな？
お楽しみに！

第13話：ドッキドキの海水浴！？ 中編（前書き）

いつの間にか読んでいる人が15000人を越えていました。

どうもありがとうございます！！

これからもダメダメな作者とのお付き合いよろしくお願いします！！

第13話：ドッキドキの海水浴！？ 中編

着替えも終わり、女性陣を待っていた。
その間悠登はナンパをしに行った。
涼太はと言うと…

「お待たせ隆ちゃん！」

「沙耶？遅か…った…ね…。」

「えへへ。どう隆ちゃん？」

そこには白いビキニを着た沙耶がいた。
容姿端麗な上にビキニとは破壊力抜群だ。
しかも沙耶は胸もかなり大きいので破壊力倍増だ。

「あ、う、うん。よく…似合ってるよ…。」

隆介は顔を真っ赤にして目をそらしながら言った。

「本当！？やったやった！！隆ちゃんをメロメロにしようとかかなり迷ったんだよ。」

ああ、辛うじてメロメロにはなっていないがかなりヤバいな…

「コラー隆介！！いちいちデレデレしない！！」

舞たちも遅れて来たようだ。

「どう隆？似合う？」

「に、似合いますか？」

杏華は青色に白の水玉模様が入ったビキニだった。だが杏華も顔が
いいため、けっこう可愛い。

優香は全体がピンクのワンピースだった。

しかし…

「優香って胸大きいでしょう？この子着痩せするタイプ何だよね。」

「た、確かに…」

「あうう。隆君そんなに見ないで下さい。お姉ちゃんも余計なこと
と言わないですよ。」

「いいじゃない。あんたの胸くらいなら隆だって釘付けになるよ。
ね？」

「そ、そうなんですか？」

「まあ…男として大きいのはいいよ。…！！？」

な、何か殺気を感じる。

しまった忘れてた…

「ふ〜ん。隆介は胸が大きい女の子が好きなんだ…へえ〜。」

「いや、決してそういうわけじゃ…」

「じゃあ何であたしを見て何も言わないのかなあ？」

舞は…黄色とオレンジが少し混じったワンピースだった。

性格はあれだが、やはり舞も顔が良かったため似合っていた。

「舞も女の子だったんだなあ。」

ピキッ！！

ガス！ドガ！

「殴るよー!!」

「も、もう殴ってるじゃねーか。まあ冗談はさておき、可愛いよ舞。よく似合ってる。」

ポツ…

「え？ええと…あっありがとっ…」

「……（ツンデレだ）」「……」

女性陣は全員そう思った。

「あれ？そう言えば涼太君は？」

「あああいつ？あいつならほら……」

ドドドドドドドド……

「うわあーくっ来るなー!!」

「ねえお兄さん！私たちと泳ぎましょうよ。」

「お兄さん！！あたしたちと遊んだらベッドで色々なことを手取り足取り教えてあ・げ・る。」

「じゅるり。はあはあ…美味しそう。」

「男に飢えてる私には絶好の相手よ!!」

中には危ない事を言ってる人もいるが、追いかけてるのは全員10代から20代後半と男に飢えてる女性ばかりだ。

「頑張れ涼太。貞操を守れよ……」

少し同情した隆介だった。

哀れな涼太の無事を祈りながら、僕たちは遊んだ。

海で水の掛け合いやボートを使ったり、ビーチバレーをしたりと非常に楽しい時間を過ごした。

あっという間に日が暮れ、涼太も何とか逃げ切り戻ってきたので、ホテルに向かった。

中に入ると中も物凄く豪華だった。

高さも大体30階くらいあって広いのに、チリ一つ無かった。

「す、すげえ……」

「ホントに豪華……」

「ほう……いいところじゃねーか。」

「た、高そう……」

「普通なら絶対泊まれないわ……」

「はわ……。すごい……」

皆が驚きを隠せなかった。

「皆様、お待ちしております。」

しばらく進んだ先に楓さんがいた。

「どうですか。私の自慢のホテルは？」

「す、すごいです。何か僕らにはもったいないくらいです。」

「それを聞いて安心しました。それでは今から少しご説明をさせていただきます。

まずお食事については3階のレストランにお越しく下さい。時間は7:00から10:00の間です。

次にお風呂ですが、4階と5階にそれぞれ違うお風呂があります。好きな方を選んでください。混浴もありますので、入りたい方は入ってください。」

「……混浴……」「」「」

女性陣がオーラを出していた。

ゾクッ…

な、何か寒気が…

つーか楓さんもこっちを見ながら笑ってるし…

それから楓さんに遊びとして、ボウリングやカラオケ、ゲーセン等を説明してもらった。

スポーツなら、卓球、バドミントン、バッチョング、アーチェリー、弓道等たくさんあるらしい。

何でもアリだなこは…

あつ。一つ忘れてた…

「ところで楓さん。3Kをどこで見掛けませんでしたか？」

「あー、あの変態ならそのソファで倒れてますよ。なんでも警備員にナンパしてボコボコにされてしまったとか。いい気味ですね。」

楓さんも何気に酷いこと言うなあ。

まあいいけど…

「泊まる部屋は30階のスイートルームです。男性と女性別々ですから悪しからず。」

「えー！？隆ちゃんと寝れないよー！！」

「まあ変態がいないってのは助かるけど…」

「はあ…隆と親密になるチャンスだったのに…」

「あつうゝ残念です…」

良かった…セーフ！！

もし同じ部屋だったら僕はとんでもないことになってたかもしれないな

い…

「せっかく隆ちゃんとベッドで……で……して、……するはずだったのに……」

「わあー！ー！ー！下品な言葉は慎め！ー！」
危なかった…沙耶の奴放送禁止用語ばかり使いやがって…

沙耶と杏華以外は全員真っ赤だった。

「何恥ずかしがってんのよ優香！結婚したらそういつことたくさんするんだから。」

「あううう。お姉ちゃんやめてよー。」

杏華よ…沙耶に毒されてはいかんぞ！

「と、とにかく部屋はこれで決まりです。言っておきますが神代さん、スイートルームの警備は厳重ですから夜這いしようとしても無駄ですからね！」

「は〜い。（ちっ、隆ちゃんに夜這いしたかったなあ…）」

そんなこんなで部屋に移動した。

楓さんは仕事があると言って戻っていった。

男性陣…

「すげー！めっちゃ豪華だ。」

「さすがはスイートルームだな。」

「ああ…女の子とこんな綺麗な夜景を一緒に見たかった…」

確かに一理あるかもしれない。
僕も誰かを見ようかな？

女性陣：

「すっごーい！！」

「もうすごすぎてコメントも無いわね…」

「あたしたちにはホントもったいないね。」

「夜景が綺麗…」

やはり似たような反応をとっていた。

部屋には豪華なソファ、ベッド、テレビ等の家具や見るからに高そうなテーブル、シャンデリアがあった。

洗面所は大理石できており、必要最低限なものは揃っていた。だがやはり一番すごいのはなんとと言っても高いところから見れる夜景である。

「……隆（介）（ちゃん）（君）と二人つきりで！」「」「」

内心そう思っていた四人であった。

食事をするため、僕たちは3階のレストランに行った。
中に入るとまだそんなに人はいなかった。

「へえ〜バイキングか。」

「でもただのバイキングじゃなさそうね。」

確かにそれは言えてる。

料理を見てみると、肉は牛肉では松 牛や佐 牛、神 牛等で豚もイベリコ等で、鳥も同等なものであった。

魚介類にしてもオマール・伊勢海老、真鯛、ウニ、トロ、鮑等のどれも高価なものであった。

あとは、他国の名物料理やデザートといったところだろう。

早速各自料理を取りに行った。

そのあと食べてみた。

味はもちろん…

「うめー！！！」

「美味しい！！見た目も味も普通のとは桁外れ！」

「む、どうしたらこんなに美味しく作れるのだろうか…」

「デリシヤスだぜ！！！」

「あはは…美味しいとしか言いようが無いわ…」

「こういう料理つてぐる イのゴチに出てきそうだね。」

「うん。そう考えると私達って今物凄く貴重な体験してるね。」

僕、沙耶、涼太、悠登、舞、杏華、優香、みんな大絶賛だった。

食事が終わり、入浴の準備をした。

予想通り風呂も広くて何十ヶ所もあった。

「うわー広いなー。」

「素晴らしいな。」

「畜生！警備が厳重で覗くことすらできないとは！」

露天風呂を見てみると、覗き対策のためか、小型カメラやセンサー

等がいくらかあった。
さすがは超一流ホテル。
警備システムまであるとは…

一方女性陣…

「広ーい！」

「流石ね…」

「おっ露天風呂もある。」

「どれから入ろうかな？」

「幸い人は全くいなかった。」

「それにしても…」

沙耶の目が光る。

ガシ！

「ひゃー！！！」

「優香ちゃんも胸がでかいなあ！」

「あううくやめてください沙耶さん！」

「うう…胸なんて、胸なんて…」

「落ち込むことないよ舞ちゃん！まだ発展途上何だから！」

「だどいいけど…」

「ねえ露天風呂行かない？」

「あっいいねえ。行こ行こ！」

露天風呂に移動した。

ガラ…

「いやー景色がいいねえ！」

「露天風呂も気持ちいいよ。」

「……………」

「どうしたのお姉ちゃん？」

「しっ！何か隆たちの声がするのよ…」

「……えっ！？」「」

みんなが柵に耳を傾けた。

「露天風呂って気持ちいいなあ。」

「疲労回復や筋肉痛とかにもいいらしい。」

「なあ佐々城。お前誰が好きなんだ？」

「何いってんだよ。」

「いやーあれだけ女の子がいればいるのかなあと思ってよ…」

ピクッ！

女性陣がみんな意識を集中させた。

「まだ分からないよ。僕今まで人を好きになったことないし、それに今の関係を壊したくない。」

「けどあまり時間はかけられんだろ？彼女たちだっていつまでも待つ訳じゃないんだ。」

「分かってるよ。でもどうしたらいいか分からないんだよ。」

その時涼太の口が開いた。

「まあお前の気持ちは分からんこともない。何せその一言で運命が変わっちまうんだからな。じっくり考えていけ。まだ時間はある。だが、後悔はしちやいかんぞ。」

「分かった。でも涼太からそんな言葉が出るとは思わなかった。」

「はは、羨ましいのかもな。人を好きになれるお前が。」

そう、人を好きになれなくなった俺と違っつてな…」

「え？それ、どういうこと？」

「まあ頑張れや！これはお前の試練だ。自分で乗り越えてこそ価値があるからな！」

バシヤ…

「先上がってるぜ。オラ悠登行くぞ！」

「あ、おい待てよ！」

二人は先に上がってしまった。

「（僕の一言で運命が変わってしまう。これが僕の試練か…）」

「……隆（介）（ちゃん）（君）……」「」「」

「やめだやめだ！今考えたってしょうがない。もう少し時間をかけてゆっくり考えよう。みんなをできるだけ傷つけないようにするためにも…」

「ありがとう隆ちゃん。」

「あんたはいつでも優しいね。」

「私達隆君を好きになって良かったよ。」

「うん。あーところで…」

「どうしたの？」

「これ覗き穴？」

「あつ多分…」

「てことは…」

「……裸見られるって事！？」」「」「」

よく見ると少し大きめのドアのような開け閉めができるやつがあった。

みんな戸惑いなく開けた。

ガチャリ…

「ガチャリ？」

後ろを見ると

「やつほー隆ちゃん！」

「何落ち込んでるのよ！」

「隆一人かあ…」

「あうう。隆君の裸だ。」

「えっ？うわ！！」

慌てて隠したが、時既に遅しで上半身も下半身も全部見られてしまった。

「な、何で覗いてるんだよー！？」

「そりゃあ隆ちゃんの前が見たいからだよ。何なら私のも見る？」

はらりとタオルを咄嗟にとったので胸を直視してしまった。

「ぶは…！」

鼻血を出したがここで気絶するわけにはいかない。

「ぼ、僕上がるよー…！」

と言い、顔を真っ赤にしながら逃げていった。

「ここまでウブだとは……」

「大丈夫かなあ？」

「多分……」

「あはは……」

入浴も終わり、部屋に戻った。
頭がまだボーッとする。

只今午後11:30……

何か疲れたのでそのまま寝てしまった。

このまま寝させてくれるのだろうか？

いや、多分それはない……

やれやれ……

第13話：ドッキドキの海水浴！？ 中編（後書き）

次で海水浴編は終わりです。

その後は次の後書きでお知らせしたいと思います。

第14話：ドッキドキの海水浴！？ 後編（前書き）

これで海水浴編終了です。何かグタグタになっちゃいました…

第14話：ドッキドキの海水浴！？ 後編

ああ…眠い。

昨日はほとんど寝られなかった。

何故寝られなかったかった？

それを今から話そう。

回想スタート！

めっちゃ疲れて寝て、起きたらまだ午前1：30を回ったところだった。

また寝ようとしたが、中々眠れなかったので少し夜風に当たりに行った。

外は風が気持ちよく所々にある明かりがとても綺麗だった。

「綺麗だなあ。いつ見ても飽きないよ。…ん？何か飛んで来てるよ
うな…」

ヒューー…

カッ！！

「うわあー！」

手紙のついた矢が僕の横を通った。
とゆーかストレスだったんだが…

ぶつぶつ言いながら手紙を見ると

『少し隆介様とお話がしたいです。外に来てくれませんか？』

楓さんか…

ただ僕としゃべりたいだけか。

指定された場所に行った。しばらくすると…

「お待たせしました。待ちましたか？」

「あ、いえ。僕も今来たところです。」

「そうですね。良かったです。」

「ところで僕に何か用ですか？」

「はい。少し雑談がしたいです。」

「雑談ねえ…。あつそうそう、まだお礼言っただけでなかった。今日は本当にありがとうございます。」

「何を仰いますか。今日の分の恩返しなどちつぽけなものですわ。」

貴方には一生たっても返せないほどの恩があるんですから。」

「いやいや、僕としては十分満足なんですけど…」

「それとも隆介様は私を助けてくれたことは大したものでもないとお考えですか？」

「い、いえ！決してそんなことは…」

「ならば良いでしょう。貴方は私の暗い人生を変えてくれた人ですから。」

…だから私は貴方と結婚したい…」

「楓さん…。すみません、まだ答えが…」

「分かっていますわ。貴方を好きになっっている人はあのメンバーだけではありませんから。」

「（確かに…、あつ舞は違うか。）…え？それどういうことですか？」

「予想以上の鈍感ですわね。（相沢さん、頑張ってください…）村

神さんほどではありませんが、貴方も学校内では人気あるんですよ。

「えええー！！？？全く知らなかった…」

「（この鈍感さはもはや病気の域に入ってますわね…）そうです。ライバルが多いんです。」

「じゃあ何で今まで舞の『義理』チヨコ以外もらえなかった上に告白もなかったんだ！？」

「本当に義理ですか？」

「はい。『余っちゃったからあなたにあげる。言っとくけど義理だから！あなたのために作ったんじゃないんだからね！』って言われたんで間違い無いです。」

「（…もはやかける言葉もありませんわね。病気とかそんなレベルじゃないですわね）そ、そうですか…大変でしたね。」

「はい。それとさっきの質問なんですけど…」

「あつそ、それは（言えませんわね。相沢さんが陰で妨害をしたたなんて…）……きっとその女子は恥ずかしがりやで告白とかできなかったんですよ！」

「そうか！沙耶みたいなのばかりじゃないから恥ずかしがってたのか。なるほど。」

「単純…」

「えっ何か言いましたか？」

「いいえ、何でもございませぬ。」

「そうですか…」

しばらくそんな話が続く

「そろそろ時間ですわね。隆介様、本当にありがとうございました。楽しくお話ができました。」

「いえ、僕も楽しかったです。」

「では隆介様。最後に一つ頼まれてはくれませんか？」

「何ですか？」

「目を瞑って下さい。」

「？はい……」

言われた通り目を瞑った。そしてそのあと

Chu!!

「!!!!!!?????」

一瞬何が起こったか分からなかった。

楓さんが僕のほっぺにキスをしてきた。

「ふふ。口は結婚の時にとっておきますわ。」

「え、あ、い、いや、あの、その……」

テンパって何が言いたいかも分からなかった。

「それでは隆介様、おやすみなさい。」

楓さんは上機嫌で戻っていった。

「……………」

しばらく硬直……

「ぼ、僕も戻ろう……」

ようやく復活した隆介だった

だが

ガバ！！

「うわ！？」

何者かに布を被せられ、そのまま連れ去られてしまった。

しばらくして…

バツ…

「うわ、服を脱がすな！！」

バシャーン！！

「ブハツ！ゲホゲホ…一体なんだよ。…ここは大浴場？でも何か違

うような…」

などと考えていると…

ガラ…

「やつほー隆ちゃん！」

「生きてる隆介？」

「うまくいったね！」

「あうう〜こついうのはちょっと…」

何と沙耶たちが入ってきた。

しかもタオルも巻いてない裸の状態で。

当然…

「ブハー！！な、何で沙耶たちがここにいて何も隠してないんだよ！？」

鼻血を豪快に出しながら言う。

「隆ちゃんさつき神崎先輩と話してたでしょ？その理由を聞き出そうとしてるの。そのために村神君にも協力してもらってこの混浴につれてきたの。」

「な、何でそれを！？」

「村神君に聞いた。」

あの野郎————！！！！後で殴る！親友でも絶対に殴ってやる！！

「で？何で楽しそうに話してたの？」

「吐けやコラ！」

「言った方が身のためだよ？」

「私も知りたいです！」

怖ええ〜〜！！

沙耶は鞭持つてるし、舞は拳を構えてるし、杏華は不可解な行動をとってるし、優香は物凄い怖い顔で睨みつけてるんですけど…

「た、ただ楓さんに呼ばれて少し話しただけです。本当です！信じてくださいー！」

よほど怖いのか、必死に土下座している…

「本当に？」

「本当です！皆さんが思ってるような事では決してありません！」

涙声で必死に言った。

「隆君の言ってる事本当みたいだよ？信じてあげようよ。」

「うん。優香がそう言うんだったら仕方ないか。」

「そうね。隆介も必死に訴えてきたし。」

「分かったよ隆ちゃん！」

僕ってそんなに信用無いんだ…

でも…

ガシー！

「ふえ？」

「ありがとう優香！君のお陰で助かったよ！ありがとう！」

隆介は嬉しさのあまり優香を抱き締めていた。

「（あうう）。恥ずかしい。でも…（うん）。私何となく分かってたよ。隆君は優しいから決して私達を裏切ったりしないことは。」

「優香…っはー！」

ゴゴゴゴゴ…

やはりみんなとてつもない殺気を出していた。

「「隆（介）（ちゃん）！！！！」」

「まっまずい！！優香、離れてくれ！」

「い、嫌です…」

ギュー！！

何と優香はさらに隆介を強く抱き締めた。

ムニョ…

「ゆ、優香！？体にとても柔らかいものが当たってる！！」

「私の胸で興奮してくれてるんだ…嬉しい。だったらもっと！」

ムニムニムニムニ……

ふおーーやべえー！

また鼻血が出そう…

「ゆ、優香！！マジヤバいつて！理性がー！！」

「いいよ、隆君なら。それに隆君の下半身は…」

「あー！！あたし以外の女の子相手に隆の×××が立ってる！

！」

「くおらー隆介！！誰彼構わず×××を立たせるなこの発情男！

！」

「隆ちゃん？私に任せてくれればその興奮してる×××を　　で

をして　　できるよー？」

えーいこの痴女どもがー！！

少しは女の子らしくしたらどうだー！！

見る優香を！そんな下品な言葉は…

「駄目です！！隆君の×××は私が　　して　　するんです！

！」

言わない…は…ず…ず…？

「あの…もしもし優香さん？」

「はい何ですか？」

「そんな下品な言葉はいつたいどこで？」

「沙耶さんやお姉ちゃんに教えてもらいました。将来的に大事なこ

とだからと…」

「この痴女どもがー！ー！純真無垢な女の子に何教えてるんだー！ー！」

「えー？いいじゃない。将来的に大事になるのは本当なんだから。」

「そうそう。こーゆーこと知らないと子供すら作れないんだから。」

「だからってなあ…」

「そ・れ・に。年頃の女の子は男の子以上に発情しているものよ！」

「それはお前ぐらいだ！お前はただの変態じゃねーか！」

ブチ！

「ふ〜ん。隆ちゃんは愛する私に向かってそんなこと言うの？」

いかん！つい口が滑ってしまった。

再び鞭を持ち出しちゃったよ！

「そんな悪いこと言う隆ちゃんにはお仕置きが必要みたいね〜。

二度と私にそんな口が叩けないように。」

や、やばい！いつも以上にキレてる…

「さ、沙耶さん？あの〜僕が悪かったのでその鞭しまっつけてくれませんか？」

「だ〜め！隆ちゃんにはたっぷりお仕置きしとかなきゃ。加えて私以外の女の子相手に×××を立たせないようにね？」

ズルズルと引きずられていく。

「誰か助けてください！僕死んじゃう！」

「『ご愁傷さま』『』『』」

助けを求めたが、あっさり見捨てられた…

30分後…
ある部屋にて…

ビシ！バシ！

「えへへ！どう隆ちゃん痛い？」

「や、止めてくれ！」

「その悲痛な声と顔がたまらない！」

バシ！ビシ！バシ！

「がああー！ー！ー！」

「もっとよ！もっと叫びなさい！！」

2時間位これが続いたという…
結局解放され寝たのは5：00だった。

そして今に至る…

現在8：00…

3時間しか眠れなかった。

しかも沙耶のせいで身体中が痛い…

忘れてた。涼太を殴るんだった。

今は部屋にいないか…
戻ってきた時だな。
すると、

ガチャ…

「よー隆介！目が覚めたよう…がっ！？」

丁度戻ってきたので無言で顔面に一発入れてやった。

「な、何すんだよ！親友の顔面を殴るなんて…」

「うるせえ！お前のせいで僕はひどい目にあっただぞ！」

「そ、それか。いやー悪い悪い。たまたまランニングしてたらお前を見かけて、それから相沢に『隆介何処にいる？』と聞かれたからつい教えてしまった…ぶふ！？」

何かムカついたのでボディーパーカーをかました。

しばらくしてみんな集まった。

ふと見ると…

「おい悠登。どうしたんだその傷？」

悠登を見ると頭と腕と足に包帯が巻かれており、あちこちに傷跡もあつた。

「聞くな！！思い出しただけでもおぞましい…」

「何だこいつ…」

「今朝、ナンパしてたら観光客になりました警備員にもしてしまつてボコボコにされてた。…自業自得だな。」

結局そうゆうことかよ…

他にすることはないのでこいつは…

馬鹿な悠登を放って僕たちは朝食を済ませた。

「しかし楽しかった旅行もこれで終わりか…」

「そうだね。海は気持ちよかったしホテルは豪華だったし…」

「僕はホテルではあまりいい思い出は無かったけど…」

「畜生ー！！警備員さえいなければ！」

「あんなのような変態がいるからああいう人が必要になるのよ…」

「でもこういふ旅行はもうできないかもね…」

「あうう。寂しいよ。」

みんな少し残念がっている。

隆介も何だかんだで結構楽しんでたためやはり残念がっている。

「皆さん。出発の準備が完了しました。よろしいですか？」

「はい。みんな行くこつ…」

しぶしぶへりに乗った。

「どうでしたか皆さん。楽しんでいただけただけでしょうか？」
「はい。楽しすぎてもつといたいという気持ちになりました…」
「そうでしたか。私としてはとても良かったことですね。また機会があれば今度は別のところに連れて行きますわ。」
「……マジですか!!!???」
「……」
「しかし楓さん。そんなに迷惑ばかりは…」

言いかけたところで楓さんに口を押さえられた。

「隆介様?くどいようですが貴方はこんなのでは返せないくらいの借りができたことを…」

「わ、分かりました。是非お願いします!」

「よろしい!」

きりがないので諦めた。

へりを降り、楓さんと別れ、そのまま解散になった。と思っただが突然舞が

「ねえ、明日涼太君の家に遊びに行かない?あたし行ったことないんだ。」

「あつそう言えば僕もないな。」

「何だ村神君、隆ちゃんたちすら家にあげなかったの?」

「い、いやー。ほら、俺よりも隆介の方が馴染みやすいと言っか…」

「んじゃー明日みんなで行こう！」

「えっ!?!」

「私も行きます。」

「えっ?えっ?」

「観念しろ涼太。もう決定した。」

「ええー!ー!ー!?!?!?!?!?!」

こうして僕たちは初めて涼太の家に行くことになった。

「(うーん。あいつらには姉貴と菜月は見せたくなかったな)。性格にちょっと困ってるからなあ…(」

やれやれ… by 涼太

第14話：ドッキドキの海水浴！？ 後編（後書き）

今回は涼太の過去に入ります。
ものすごく暗くなりますので悪しからず。

第15話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 前書き（前書き）

すいません。

涼太の過去は次に書かせてもらいます。

第15話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 前書き

翌日…

村神家前

意外にも普通の一軒家だった。

「お前の家普通だなあ。豪華かと思っただが…」

「何事も普通が一番さ。まあ行こうや。」

ドアに手を触れ、ガチャツと開けたその瞬間！

バタバタバタ…

ガツシー…！！

「お帰りお兄ちゃん！」

「たっただいま菜月…」

「……………えっ？」「……………」

誰もが一瞬何があつたか分からなかった…

「驚かせたみたいだな。こいつは妹の菜月。一コ下だ。」

「初めまして！妹の菜月です。宜しく願います。」

「……………どっどっも……………」

驚きでまだ正気に戻れなかったが、見ると髪はショートヘアで身長は舞たちより少し大きかった。

一言いうと無茶苦茶可愛い！
街を通る人殆んどが振り返ってしまいそうな可愛さだ。
こんなことを言うつと僕の命はないからあえて伏せておこう。
まあ当然…

「君可愛いね。どう？俺と付き合わない？」

「ごめんなさい。あたしお兄ちゃんにしか興味ないから。」

予想通り悠登はナンパし、玉砕した。

その間0.2秒だった…

「コラ菜月！お前も早く男を見つけて。」

「嫌！お兄ちゃん以外はいらない！」

「やれやれ…おつと長引いたな。さっ上がれよ。」

言われた通り上がった。

ガチャ…

「ただいま姉貴。」

「あら涼太お帰り。あら、お客さん？」

「ああ、俺のダチ。紹介するよ。姉の陽菜。」
「コ上だ。」
「どつども。姉の陽菜です。弟がお世話になってます。」

「あ、いえとんでもないです。」

「ふふ。可愛い子。お姉さんがいたただこうかしら…」

「え…！？」

「私彼氏いないからさあ。それとも年上は嫌？」

とんでもない！よく見ると温厚な性格に髪はポニーテール、顔も妹

と同じ…いやそれを凌駕する。

「い、いえ！あの、決してそうではないんですけど…」

さつきから殺気がなあ…

言っておくが洒落で言ったんじゃないぞ？

「隆ちゃん何デレデレしてるの！？そんなに胸の大きい人が好き？私以上の！」

確かに沙耶もでかかったが陽菜さんはそれ以上…まさに凶器だ。

「姉貴！これ以上俺のダチを困らせないでくれ…」

涼太が止めた。

ナイス涼太！

「ごめんね隆介君。困らせちゃって。」

「何故僕の名前を？」

「名前は涼太から聞いたわ。他に沙耶さん舞さん優香さん杏華さんそれから変態君だったかな？」

「違います！！変態君じゃなくて悠登です！全然違いますから！」

「あら、ごめんなさい。涼太ちゃんと言わなきゃ駄目だよ？」

「はい…」

曖昧な返事だな…

「部屋に案内するよ。こっちに来な。」

二階に上がった。

ガチャ…

「これが俺の部屋だ。」

部屋を見ると殺風景でベッド、テレビ、机、本棚といった最低限なものしかなかった。

「意外と何も無いんだな…」

「ああ。本も漫画を少しと問題集…あと論文くらいだ。」

「…どうせ問題も難しいのばかりじゃないの？」

「んな事はない。ほらこれ。」

見せられたものは東京12大に含まれるM大、関西にある有名なKDRとかだった。

「…か高一でもう入試問題かよ！」

お前は本当に高校生ですか？と疑いたくなる…

「ホント意外…あたし涼太君は何かとてつもない機密文章を持つてたりとか、危険な重火器、剣とか扱ってるんじゃないかって思った…」

ドキ！

「な、何言ってるんだよ相沢！高校生がそんなこと出来るわけないだろ。（何て勘の鋭さだ！全部当たってるし…）」

「うーん。そうなんだけどさあ。何か日頃から不可解な行動をとっている涼太君なら出来そうな気がしてさ…」

「俺は普通の高校生だ。そんな漫画みたいな事はできん！」

僕も舞と同じだ。

現に涼太は剣の腕前もすごい。

素人の僕ですら分かったくらいだ。

格闘に関しても強く、稀にヤクザの組が壊滅させられたと言つてニコラスが流れたときは、よく涼太がやったと耳にする。

親友でありながらも、僕は涼太の事を何も知らない。そう考えると何か自分が情けなくなる。

だから僕は勇気を持って涼太に尋ねた…

「なあ涼太？」

「何だ？」

「話してくれないか？お前何者だ？」

「な、何言つてんだよ。俺は普通の…」

「答える！！！」

ビクッ…

みんな驚いた。

こんなにキレてる隆介は初めてだからだ。

「怒鳴つてごめん。でも僕知りたいんだ。親友として。お前の事、もつと知りたいんだ。お願いだ！聞かせてくれ！頼む！」

「隆介…ふっ分かった。聞かせてやるよ。」

「涼太…」

「ただし！この事は決して口外しないでくれ！」

「……うん（おう）！！！！」

「分かった。お前らは『情報局エスト』って聞いたことあるか？」

「少しだけ。何か目的と場所が全く分からない裏組織くらい。」

「そうか。率直に言つと、俺はエストの一員だ。」

「うそ…」

「ホントだ。俺は今から13年前、3歳の頃にそこにつれていかれ

た。」

「何があつたの？」

「それを説明するには、俺の過去を聞かなきゃな。話してもいいが約束してくれ。話を聞いた後でも俺を嘲笑ったり軽蔑したりしないでくれ。頼む！」

「バカだなあ！僕たちは常にお前の味方だよ。」

「そうそう。あんたはいい人だから。」

「隆ちゃんの親友だもんね。」

「あんたは普通の男とは違うからね。」

「うん。だから私たちはそんな事しない。」

「俺だつて！お前に苛められちゃいるが悪いやつじゃないってのは俺ですら知ってる！」

「みんな：ありがとう！じゃあ話すよ。」

遂に涼太の過去が明らかに！

次回から始まる！

第15話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 前書き（後書き）

次回こそ涼太の過去に入ります。

物凄く暗くなりますのでそのつもりで…

第16話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 前編（前書き）

書いているうちに全部暗くと言うのは無理だったので、前編は少しバトルを入れています。

勝手な作者ですいません…

第16話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 前編

16年前

一人の少年が生まれた。

特に裕福でも何でもないごく普通の家庭に…

その家庭の両親はとても優しく、よく面倒を見てくれた。

ところが、少年の妹が生まれてしばらくの後、母親は急に病に倒れ、そのまま亡くなった。

父親は狂い、お前らのせいと言い、虐待を繰り返すようになった…

それから二年後…

相も変わらず虐待が続いてるとき、少年の前に一人の女の子が現れた。

歳は11、2歳位だった。

「君は…誰？」

「大した者ではない。それよりお前は私に選ばれし者だ。これよりお前はすぐに私と来てもらおう。」

「え？でも。僕にはお姉ちゃんと菜月が…」

「拒否権は無い。それに今のお前ではあの男から守ることはできない。もっと強くならなければならない。分かるな？」

「う、うん。」

「ならば私と来い。あの姉妹を守りたいならばな。」

「わ、分かった。」

「それでいい。」

少年は姉と妹を守るために知らない女の子についていった。

こうして少年、村神涼太の運命が変わってしまった。

しばらくするとある巨大なビルについた。
子供でも分かるくらいの大ささ、そして驚くべき技術だった。

「じ、じいは？」

「ここは『情報局エスト』。表では公開されていない秘密組織だ。」
「ど、どうしてですか？」

「分かるようにここは表よりも数十年、いや数百年進んでいるからな。中にはその技術を盗もうとする輩もいる。そのためだ。」
「そうですか…でも僕みたいな普通の人をつれてきてよかったですか？」

「ああ。私だからいいんだ。」

「は、はあ…」

しばらく歩き…

コンコン…

「局長入りますよ？」

「桜内か。入れ。」

「失礼します。」

ガチャ…

中に入るとそこには筋肉質の恐そうなおじさんがいた。

「恐いか？無理もないがな…」

「笑うな桜内！好きで恐くなってるんじゃない！」

「くく…紹介するよ。こっちはエストの局長、まあ最高責任者の氷
武雄輔だよ。」

「君が村神涼太君だね？話はあのガキンちよから聞いてるよ。宜し
く！」

「よ、宜しくお願いします。」

「だ、誰がガキンちよだ！ちっ行くよ涼太！」

「ちよ、ちよっと！」

引きずられながら出ていった。

それから会議室、コンピューター室、設計室、実験室、医務室、食
堂など色々と案内された。

途中通りすがりの人に挨拶をしたが、若い女の人には可愛いと言わ
れて遊ばれた。

そして…

「ここがトレーニング室だ。お前は今日からここで鍛えてもらう。」

「あのー鍛えるといってもまず何からすれば？」

「そうだな。まずは筋トレだな。軽く腕立て100回を3セット、
懸垂50回を2セットいつてみるか…」

「ええ！？そんなにですか！？」

「つべこべ言わずにやれ！」

ガス！！

ラリアットが綺麗に決まった。

とうとう涼太の地獄の訓練が始まった。

8時間後…

「48…49…50！はあはあ…お、終わった…」

「初日にしては上出来だな。だがこれは準備運動だからな。せいぜい30分くらいに縮めてもらねば…」

「は、はい…」

「今日は終わりだ。明日またやるぞ。」

「はい！」

一日目のトレーニングが終了した。

「あのー桜内さん。」

「自己紹介し忘れてたな。私は桜内瑞希だ。瑞希と呼ぶがいい。」

「瑞希さん。ここは主にどんな仕事をするんですか？」

「人によるが、私の場合は主に犯罪捜査、稀に戦争参加だな。」

「意外と普通だ…」

「そうだな。裏組織といっても別に犯罪を犯してるところじゃないし、逆にそういった犯罪組織と戦ったりするな。」

「僕もそうなるんでしょうか？」

「まあ私の弟子だからな。当然だ。」

「気が進みません。人を殺すなんて。」

「そうだな。私も人を殺すなんて嫌だからな。だから私は人を殺さなくてもいいように強くなるんだ。もう何人も殺してしまったからな。」

「僕もそんな人になりたいです！殺さなくても生き残れるくらいの人！」

「そうか。さすがは私の弟子だね。」

こうして一日目終了…
それから一ヶ月後…

「49…50…！」

力子！

「タイムは26分35秒か。合格。では本修行に入るか。」

「あの…何をすれば？」

「お前にこれを渡しておく。」

と言われ、一本の木刀と一丁の銃マグナムリボルバーを渡された。

「これは？」

「その二つがお前の愛用の武器となる。世界に二つと無い貴重な武器だ。感謝しなよ？」

「これが…僕の武器…！」

「銃はしまえ。しばらくは刀でいく。」

「この木刀ですか？」

「そうだ。だがただの木刀ではない。それを使いこなせたら真の力が発揮する。名を『沙夜時雨』と言つ。」

「さよしくれ？よく分からないけど何かかっこいいなあ！」

「お喋りはここまで。構えて！」

「え？でもどうすれば？」

「実践で覚えなさい！」

「えー！！??」

「シャツ…キーン!!」

「うわわ!!」

咄嗟にガード（偶然）できたがふらついた。

「ホラホラ次行くよ!!」

「キーン!シャツ!ブン!

「カーン!ドゴン!

「あ、危ない!地面が割れた!」

「よそ見は禁物!」

「あっ!」

「ガン!

「バタ…」

「気絶してしまった。」

「はっ!?!」

「気がついた?」

「瑞希さん?僕は気絶してたんだ…」

「ごめんごめん。実践だから強めにやってしまったよ。」

「あっいえ大丈夫です。」

「立てるか?」

「はい!」

「続きを始めよう。」

結局こんな訓練が4年も続いてしまった。

4年後のある日…

「おい涼太！」

「どうしたんですか？」

「遂にお前の初任務が来た。」

「来ちゃいましたか…それで一体？」

その時急に瑞希さんの表情が変わった。

「戦争の参加だ。しかも相手は人間が殆んどだ。初任務でこれはな
いと思っっていたんだが…」

「そう…ですか。一番嫌な任務ですね…」

「ああ、しかも戦っているのはレイソル軍とサンディラ軍だから。
規模はでかいぞ。」

「レイソル軍でいったら強力な犯罪軍じゃないですか。サンディラ
軍じゃ勝てませんよ！」

「そう。だから私たちはレイソル軍殲滅する。これが任務よ。」

「は、はい。」

「行くぞ。気は進まないと思うが…」

「はい、そうですね…」

遂に初任務で戦場へ…

第16話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 前編（後書き）

中編から暗くしたいと思います…

第17話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 前編 その2

とある戦場にて…

ドカーン！

ズドドドド…

「はっはっは！！サンディラ軍のようなカスが我がレイソル軍に勝てるわけがないだろ！」

やはりレイソル軍がおしていた。

「司令官！第1～第4部隊壊滅。第5～8、13、15、16部隊も壊滅手前までできています！」

「さすがはレイソル軍…我が中級軍では相手にならんか…」

「司令官！第6～第10部隊壊滅！このままでは全滅してしまいます！」

「クソ！エストからの救援はまだか！このままでは…」

司令官が諦めかけてたその時！

「すまない！待たせた！」

エストの人たちが救援が来た。

「おお！神はまだ我らを見捨ててはいなかった。

…全軍に告ぐ！！救援が来た！これで形勢逆転だ！一気に殲滅しろ！！」

うおおー！！！！と軍の士気が一気に上がる。

「一番隊二番隊は怪我人の手当で、三番四番五番隊は遠距離からの攻撃及び援護。残りは散開して敵の殲滅に当たれ！」

みんながそれぞれのポジションについた。

「行くぞ涼太。もちろんやるべき事は……」

「どんな時、どんな奴でも殺してはならない……ですね？」

「そうだ……行くぞ！」

「はい！」

敵に突撃する。

「ガキが、死ね……！」

ざっと30人くらい襲ってきたが

「すみません。僕はまだ死ぬわけにはいきません。」

ずががが……ん……！！

一気に全員をぶつとばした。

「すごい、あんな子供までも……」

「司令官……！」

「うむ。我らも負けてられん！エストに続いて我が軍の力を見せてやれ……！」

うお……！！と更に士気が上がるサンディラ軍。

「ちっこいつら急に手強くなったぞ。」

「よくも仲間たちを殺ってくれたな！我々を舐めるな！」

と急に圧してるサンディラ軍。

その頃涼太たちは…

「追い詰めたぞ！レイソル軍最高司令官ラトス＝ランダー！！」

「ふん、何やらやたら強いと思ったがやはり桜内瑞希貴様だったか
！」

「抵抗は止めてください！大人しくすれば命は取りません！」

「ふはははは！小僧、戦争でそんな甘っちょろい言葉は通用せんぞ
！」

「！下がれ！！」

ドガガガガ！！

急に銃弾が飛んできた。

「ちつ無事か！？」

「はい！危なかったですが…」

「死ね桜内！！小僧！！」

ズドドドド！！

ガトリング砲を撃ってくる。

「同じ攻撃は二度も通用しません！」

ズガン！！

とガトリング砲に刀を叩きつける涼太。

バキーン！！

見事に壊れた…

「さあ観念しな！ たつぷり吐いてもらってじっくりいたぶってやる
」！
」

「（こ、恐い…）」

「ここまでか…だが俺とて最高司令官！ 敵に捕まるくらいなら…」

カチッ

ドカーーン！！！！

何と自分で爆死してしまった。

「あ、ああ…」

涼太は啞然としていた。

「ちっ勝手なことを…引き上げるぞ！ もうここには用はない。」

「は、はい。」

任務は半分失敗したがみんなに褒められた。

「くそつ誤算だった。まさか自殺するとは…」

「何か嫌な気分です。敵なのに…」

「耐えろ！ そうゆう事するやつもいるのさ。敵にばれるくらいなら
いっそのことつてね。」

「はい。」

「さあ。今日は疲れただろ？ もう休みなさい。」

「おやすみなさい。」

「……………（急がないとな。最低でもあと3、4年はかかるか。訓練

終了まで。」

3年半後

ガキン！

キン！

チュイン！

「ぜえ、はあ、はあ……」

「よし！よく頑張ったな。これで訓練は終了だ。」

「えっ？終わりですか？」

「まあ全部では無いが、一区切りついたからな。それに家族にはもう7年以上会わせてないだろう？会ってやれ……」

「分かりました。」

「よし。帰り道は覚えてるな？また会おう！」

「はい！今までありがとうございました！！」

お辞儀をして出ていこうとすると、

「気をつけてな。決して死ぬんじゃないぞ？」

「???はあ……」

意味が分からなかった涼太であった。

涼太が出ていきしばらくして

「気をしつかり持ちなさい涼太。これからお前には今よりも格段に辛い目にあうだろう…」

けど、それを乗り越えてこそ一人前だ。だから…絶対に死ぬな！」

桜内瑞希は何か未来でも分かっているのでは的なことを呟いた。

帰り道…

「瑞希さん何か不思議なことを言ってたなあ。何か僕の未来が分かっているみたいな…ってそんなわけ無いか。漫画やゲームムじやあるまいし。」

などと自分も色々呟いていた。

そして自宅前…

「うわー何か久しぶりだなー。だいたい7年振りくらいか…。まずはお姉ちゃんと菜月にちゃんと謝らなくちゃ。黙って出て来ちゃったし。」

そう思いながらドアに手をかけようとしたとき…

「うっ！？何か前よりも空気が重くて、血の臭いがきつくなってる…」

慌ててガチャッとドアを開けた。

玄関付近には誰もいなかった。

リビングに行くと…二人の女の子しかおらず、男の姿はなかった。

「ただい…ま…お姉ちゃん、菜月…」

「……………」

「あの～お父さんは…!？」

ガシャン…!

「ぐっ…!」

急に姉の陽菜がガラスのコップで殴ってきた。

血がダラーッと垂れてポタポタ落ちている…

「教えてあげよーか？あいつはあんたが逃げ出して5年後に病気に交通事故で死んだよ…!…次はあんたの番だよ涼太！私たちがあの後どれだけの仕打ちを受けてきたかあんたにも味わせてあげるよ！」

「楽に死ねると思わないでね？お兄ちゃんには死よりも辛い目に合わせてあげるよ！」

「ちっ違う！逃げ出したんじゃないよ…」

ドガ…!

「ガッ!？」

今度は金属バットで腹部を殴ってきた…

「言い訳すんな見苦しい。さあ何日持つかなあ？」

「ま、まずい！…いつら精神がおかしくなってる。どっすねば…。」

果たしてどうなる!？

第17話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 前編 その2（後書き）

次からは暗くなる上に暴力シーンも書く予定です。
悪しからず…

第18話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 中編（前書き）

R指定です。

ご注意ください。

第18話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 中編

お姉ちゃんたちの暴行を受けてから一ヶ月後：
学校の転入も済ませた。

お姉ちゃんたちの暴行は酷くなり、殴る蹴るなんて日常茶飯事になった…

けれど手を出してはいけない。

瑞希さんの教えでもあるが、もし一般人に手を出したら殺してしまう可能性がある。

それに、理由はどうあれ逃げたに変わりは無いから必死に堪えている。

「涼太！朝ごはんまだなの？」

「ごめんお姉ちゃん。もう少し待って。」

「バチン！！」

「ぐっ！！」

「ちゃんと早く作つとけと言っただでしょ！！とことん役立たずね。」

「う、ごめん…」

「お姉ちゃん。言わなくてもこいつがクズっていうのはあたしたちだけでなくクラスの女子たちにも分かってるでしょ？」

「あっそれもそうね。」

「……………」

こんなことは当たり前だった。

そして二人が言っただように僕はクラスの女子からいじめを受けていた。二人は性格がよく、人当たりもいいから友達も多かった。

そのためその友達からもいじめを受けた。

男子は意外にも味方が多く、大した事はなかった。

二人のファンクラブを除いては…

顔も良かったため自ずとファンクラブまでできてしまったのだ。

とは言っても男子に遠慮する必要もなかったため、襲ってくる度に返り討ちにしてやった。

そして今日も学校で…

ドガバキドスガン！！

「まっ今日はこれくらいで勘弁してあげるよ。」

「あはは、明日を楽しみにしてなさい。」

「ああ、気分よくなったよ。」

また十数人の女子たちから暴行を受けていた。

「だ、大丈夫か村神？」

「ああ、これくらい大したこと無い。」

「す、すまん。俺達なにもしてやれなくて…」

「気にするな。僕が原因だから。」

耐えればいつか必ず分かってくれる時が来る。
そう信じていた…

次の日、またその次の日と暴行を受けた。
その次の日はいつもより酷かった。

「私さあ、このナイフで人を刺す感触味わってみたかったんだよね。」

「!!!??」

「キヤー飛鳥つたらこわーい!」

「じゃーさー丁度いい実験体もいるし、こいつで試そうか?」

「いいねいいね!」

「やれやれ!菜月と陽菜を傷つける奴には地獄を見せなくちゃ!」

「しよ、正気か!?テメーらイカれてるぜ!!」

「はあ〜?」

ザク!!

「ぐあー!!!!」

ほ、本当に刺しやがった…

ポタポタ…

血が肩から流れ出ている…

「な、何か気分悪くなってきたよ…」

「そ、そうだね。戻ろうか…」

「う、うん。こいつは放つてね…」

みんな教室に戻っていった…

「くそ！畜生！！」

涼太は一人苦しんでいた…

それから4年後…

三人とも小学校を卒業し、中学校に入学した。

まだあの暴行は続いている…

今の涼太は笑顔をほとんど失っていた…

心が少しずつ壊れ始めていた…

中学校に入学してからはテストで有名になり、避ける生徒がほとんどだった。

中間テスト順位

1位	村神涼太	500 / 500
2位	鮎川陽介	436 / 500

3位 岩田賢吾 423/500

「村神ー!」

「鮎川と岩田。どうした?」

「スゲーよ!お前また1位じゃねーか!1年から変わらずずっと!」

「しかも今回めっちゃ難しかったのに満点なんて羨ましいなあ。」

「大したことじゃないさ。誰でもとれる。」

「そんなこと…ん?」

鮎川と岩田が横を見ると女子たち数人がワザと聞こえるように話していた。

「ねえ、また村神涼太が1位よ。」

「マジー?きもーい!満点とか。」

「ちょっと頭がいいからって私たちを見下してるんじゃない?」

「サイテー!」

やはり陰で悪口を言っていた。

「おいお前じ」

「よせ！行こっ！」

つかかろうとした鮎川を引っ張っていった。

「どうして止めるんだよ！あいつらお前を悪く言ってたんだぞ！？」

「分かってる。だがもしあのまま構っていたらお前らも狙われてしまう。こんなのは俺一人で十分だ……」

「だがよー」

「頼む。これ以上誰も傷つけたくないんだ。分かってくれ……」

「村神……」

「陽介。気持ちは分かるけどここは村神の言う通りにしよう。」

「……分かった。」

「ありがとう、二人とも。」

二人はこれ以上何も言わなかった。

しかし今回は生徒だけでなく、教師からも姉貴は気に入られていたので、教師からも扱いが酷かった。

「ほーら村神君。この問題の答えは？」

「x=6 y=4」

つかつかと先生が近づき

バシン！！

「ぐっ！！」

教師が使う太い1m定規で殴られた。

「だーれが答えだけ言えって言った？途中式も言わなきゃ……」

「だ！！」

バキ！

「め！！」

ドカ！

「だ！！」

バシ！

「ぞ！！」

ガン！

ガタン……

流石の涼太でも頭から血を流して倒れた……

言いたくても逆らえず、言い出せない男子生徒
クスクス笑って喜んでいる女子生徒がいた……

「全くとんでもないクズね。こんな奴が陽菜さんと菜月さんの肉親なんて可哀想に。」

「!?!」

「そうそうしかもそいつあの二人を親と苛めて、楽しんでたらしいよ。」

「マジでー？きもーい、最低!」

根も葉もないでたらめを言っている。

恐らくは菜月と姉貴が勝手に作ったんだろっ…

いつまでこんなことが続くんだろっ…

俺が死ぬまで？

俺が死んだらなくなるのか？

そもそも何でこんなことをしなくちゃいけないんだ!?

ナンデ？

ナンデコンナムイミナコトシナクチャイケナイノ？モウ疲レタヨ…

「…だ…よ…」

「んー？何か言った？」

「何だよどいつもこいつも!！姉貴や菜月ばかりしか耳を傾けず俺の話は誰一人聞いてくれない!！なんなんだよ一体!俺がお前らに何かしたか!？何で事情も知らねーであいつらの味方になんだよ!

？

「何で少しも俺の話を聞こうとしないんだよ！？」
「何で……何で……う……く……ぐす……」

「みんなが黙り込んでしまった……」

「ふ、ふん。泣けばなんとかなると思ってるの？」

「女なんて……女なんて大っ嫌いだ……」

そのまま教室を抜け出した。

その夜……

「う……ん……はっ！？」

目が覚めたら何故か腕を縛られており、立つこともできなかった。

ガチャ……

「目覚めた涼太？」

何と犯人は姉貴と菜月だった。

「姉貴！菜月！これはどういうことだ！？」

「今からあんたを犯すの…。」

はっ？何を言ってるのかさっぱり分からなかった…

「その様子じゃ何も分かってないね…まあいいけど。」
菜月は服を脱がしてくる。

「止める！自分が何をしているのか分かっていないのか！？」

「分かっているよう！私たちクソ親父に同じことやられたから…。」

「何…だと…！？」

「そう。だからあんたも同じ目にあってもらうよっ。」

シャツを脱がされ、肌がさらけ出した。

「中々いい身体してるじゃん。」

「や、止める！止めてくれ…！」

ドガ…！！

「がは…！」

「うっさいアホ！黙ってやられとけ。」

そう言い二人は肌を舐めてくる。

「うあ…」

「けっこう感じてるんじゃない？」

「じゃあ今度はこっち。」

そう言っただけで今度は下半身を触られる。

「や、止めてくれ…」

「身体は正直だよ？こんなになっちゃって…」

確かにアレは膨張してた。ズボンも脱がし、直に舐めてくる。

「うああ…た、頼む止めてくれ…」

「うっさいわね！気持ちよくしてるんだから黙ってなさいよ！」

尚も二人は舐めてくる…

「うっ！」

白いものが出てきた…

「何だかんだ言いながらもやっぱ気持ちよかったんじゃないの。」

「じゃあ今度はあたしたちの中に…」

「な、何をする気だ！や、止める…！」

バキ！！

「ぐっ！！」

「黙ってなさい！」

そう言い陽菜は涼太を自分に入れた。

「あはは。何か最初よりいいよ。」

「うわあー！！！！痛い！痛いよ姉貴！！」

「もう止まらないよ！」

しばらくしてもう一回やらかしてしまった。

「はあはあ……」

「今度はあたしの番だね。」

「嫌だ！もう止めてくれ！！」

ガン！！

「っ痛！！」

「がたがた痛い！さあやるよ！！」

「いつ痛い！痛いよ！！！！」

しばらく続いた…

「いやーけっこう気持ちよかったよお姉ちゃん。」

「そうね。私も満足したわ。あんたは？涼太？」

「うっ…うわぁー…！！！！！！」

あまりの恐怖に逃げ出してしまった…

翌日…

結局あれから涼太は帰ってこなかった…
もちろん学校にもいなかった。

しかし、学校の門の前に怪しい男がいた。
全校生徒がそれを見た。
警備の人が止めようとした瞬間！

ザン！！

肩から腹にかけて斬られた。

「きゃー！！！！！！」

「な、何だよあいつは！！！！」

その男はニヤツと笑いながら

「村神涼太はここか？」

と言った。

しばらくし、男は学校を占領した。

1人ではなく、腕のたつ部下が10人いた。

「ちっ村神はいないのか。しゃあない。肉親から殺そうかな？」

「「えっ!？」」

「お前らを殺して村神をおびきだすのが一番早くていい。」

「や、やだ止めて。」

「ならば祈るんだな。助けてくれとよ。」

「それは…」

「まあ嫌ってるから無理か。ドンマイ！」

「(やだ死にたくない!助けてお兄ちゃん!!)」

ヒュ…ザク…!

「「……………えっ?」」

何とそこには腹部を貫かれた涼太がいた！

「がは！…大…丈…夫か…菜月？」

「お兄ちゃん…なの？」

「ああ…それよりテメーら！！よくも妹に手をあげようとしやがったな！無事ですむと思うなよ！！！」

「村神涼太だ！ぶつ殺せ！！！」

10人が一斉に来る。

「あめーよ！！！」

ズバババババン！！！！

一瞬で全滅した。

「す、すげー！！！」

「う、うそ。村神涼太ってあんなに強かったの？」

生徒たちは啞然とし、中には興奮してるものもいる。

「貴様何故だ！？何故肉親を庇う！どういうことをしてきたか分かってるはずだろう？」

「分かってるさ。だがそれでも二人は俺の唯一の家族なんだ！どんなに嫌われようが軽蔑されようが関係ねー！！俺は二人…を守る！」

「そのため得たこの力だ!!」

「「!!!!」」

二人はようやく自分の間違い、そして涼太が何をしていたのかに気付いた。

「そんな…そうだったんだ…」

「お兄ちゃんがあたしたちのために…」

「今更気付いたところでもう遅いわ!もう手遅れさ。」

「まだ手遅れなんかじゃない。テメーを殺して終わりだ!!」

「やれるもんならやってみろ!!」

「やって…ぐっ!?!」

腹の傷が痛む。

「隙ありだ!」

スバン!!

「ぐあー!!!!」

全身から血が流れる…

「…まだやるのか!?!」

「…たりめーだ。ハンデだよ。」

シャ！

キーン！！

「くっ！どつどこにそんな力が！？」

「テメーとは格が違うんだよ。万全の状態だったらテメーなんざ秒殺だ！

…消える！！」

ドーン！！

刀から衝撃波が発生し男は跡形もなく消えた。

「終わっ…た…か…」

ふらつと倒れた。

「お兄ちゃん！！」

「涼太！！」

「菜月、姉貴…何で泣いてるんだ？もつと喜べよ。やっと一人の憎い男が死ぬんだからよう…」

「そんなこと言わないで！死ぬなんて言わないでお兄ちゃん！！」

「ごめん涼太！私たちとんでもない間違いをしてしまった。」

「いいんだ姉貴。逃げ出したのは事実だから。」

「涼太…」

「それに俺今気分がいいんだ。大切な人たちを守れたんだから。でも未練もあるがな……」

「何？」

その時涼太は涙を流した。

「ぐす…お前らと一緒に普通に暮らしたかった…ぐっ…みんなで飯食って、笑って、馬鹿やりたかった…」

「涼太!!!」

「お兄ちゃん!!!死んじゃ嫌だよ!!!」

「姉貴…菜月…ご…め…ん…な…」

ガクッ…

涼太は動かなくなった…

「涼太!!!」

「お…兄ちゃん?嫌…!!!何で死んじゃうの!?まだちゃんと謝ってもないのに…!!!」

「り…涼太…う…ぐす…やっと和解できたのに…死ぬなんて…馬鹿…」

全生徒も悲しんでいた。

特に女子は謝ることもできなかったことを悔やんでいた。

丁度その時嫌な雨がザーっと降ってきた…

第19話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 中編 その2（前書き）

すいません！

テストで更新遅れました。

第19話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 中編 その2

「うつ、ぐす…お兄ちゃん目を開けてよ。あたしたちとやり直そうよ…」

「ん？ちよつと待って！………やっぱり！菜月、まだ心臓が動いてる。涼太は死んでない！」

「えっ？………ホントだ！急いで救急車を！」

生徒たちが大至急連絡をとりに行った。

心臓が動いていても涼太の呼吸は停止していたので決して安心できなかった。

「涼太…あなたは必ず助けるよ！」

「うん。今度は三人で楽しく生活できるように…」

そう心に決めた二人だった…

病院手術室前

赤いランプがついたまま二人は黙り込んでいた。

「お姉ちゃん、お兄ちゃんは大丈夫だよね？」

「大丈夫。手術はきつといや、必ず成功する。確証はないけど……」

その時手術中のランプが消えた。

手術開始から約三時間がたっていた……

ボタンとドアが開く。

「先生お兄ちゃんは？」

「手術は成功しました。命に別状はありません。ですが……」

二人はそのあとの言葉に集中する。

「意識がいまだに戻りません。検査したら彼の心はズタズタになって、いつ心が壊れておかしくなってもおかしくない状態でした。私はこの仕事を始めて20年になりますがこんなことは初めてです。一体何があつたんですか？」

「そ、それは……」

覚悟して今までのことを説明した……

「な、何てことを……。君たちは自分がどれだけの仕打ちをしてきたか分かってるのか!？」

医者は急に怒りだした。

「恐らく彼の意識が戻らないのは、戻ってもまた虐待を受けるとい

う恐怖から逃げてるからだろう。

分かってるのか！君たちは彼を殺しかけたんだぞ！！もしこのまま目を覚まさなかつたら君たちは人殺しだ…。」

「！！！！」

今頃になって気付いた。

自分達がしてきた過ちの数々を…

「彼は人一倍心が強いからこそまでもつたんだ。これ程の心の持ち主は見たことがない。

これからは、もし目が覚めたら彼に優しく接してあげなさい。さもないと本当におかしくなるかもしれない。私から言うことは以上だよ…。」

そう言つて医者はずつていった…

二人は涼太が運ばれた部屋に向かった。

部屋に入ると人工呼吸器が口につけられ、横に心電図があり、更にあちこちに包帯等が巻かれ、ぐったりなっている涼太がいた。やはりまだ目は覚ましていない。

「ごめんね、ごめんねお兄ちゃん。もうなにもしないから、戻ってきて…。」

「涼太。私もごめん。今度は三人で楽しく過ごそうよ。だから、戻ってきてね…ぐす…。」

必死に祈る二人だった…

.....あれ？

ここは...天国？

そうか俺死んだのか...

「なわきやないでしょー!!」

ガスー!!

「ぐほ!？」

ラリアットが綺麗に決まった...

「あ、あれ瑞希さん!？何で？」

「簡単に言うとここはあの世とこの世の狭間の世界だ。何故私がここにこれるのかを説明したら長くなるから省くぞ。」

「はあ、でも何で俺がこんなところに?」

「それはあんたが元の世界に戻りたくないと思ってるからだよ。」

「そ、そんなことは...」

「思ってないわけじゃないでしょ？また虐待を受けるんじゃないかっていうこと...」

「……………」

「気持ちは分かる。けどね涼太。逃げてばかりじゃ何もできやしな
いよ。肝心なのはそこに立ち向かう勇氣。その勇氣さえあれば苦し
い壁でも乗り越えられることもあるんだ。」

「そこに立ち向かう勇氣……」

「そう。騙されたと思ってやってみな。それに私と約束しただろう
？『決して死ぬんじゃないぞ？』ってな！」

「…分かりました。」

「さっさと行ってこい！世話の焼ける弟子だ。」

「ありがとうございます。それでは……」

涼太は笑いながら戻っていった……

「やっと一人前……いや、まだまだか？」

一人苦笑いする瑞希だった……

現実世界

「……………うつ…ここは…元の世界かな…」

微笑しながら辺りを見回した。
ふと見ると

「ん？」

ベッドの横で菜月がすやすや寝ていた。

「…起こすのも悪いし、そのままにしておくか。」

涼太は菜月を撫でながらそう言った。

20分後…

「うつ……………あれ？あたし寝てたんだ…」

「目エ覚めたか？」

「……………！！！！」

ガバ！！

「うつお！？？」

一瞬寝ぼけてて誰か分からなかったが、涼太に気付き抱きついた。

「お兄ちゃん。ぐす…良かったよ。もう起きないと思って心配したんだよ?」

菜月は涙を流しながら言った。

「そうか…すまなかったな…」

「何でお兄ちゃんが謝るの?全てあたしたちが悪いのに…あたしたちが勝手に勘違いしてお兄ちゃんを追い込んだのに…」

「いや、半分は間違っちゃいないさ。勝手に出ていったのは事実だから。」

「でもあたしたちはお兄ちゃんを殺そうとした。これは事実…そして、一生許されない行為…」

「…やめろ!…!」

「!?!?!?」

いきなり叫ばれてビクツとした。

そして涼太は優しく菜月を抱きしめた…

「もういいんだ…お前や姉貴も俺以上に親父から虐待を受け傷ついた。それで終わりだ。もう何も気にしなくていいんだ…」

「お兄ちゃん……うわぁー!ーん!…!」

しばらく菜月を慰める涼太だった…

ガチャ…

「お花持ってきた……………えっ……………」

「姉貴……………」

「り、涼太…なの…?」

「ああ。正真正銘の俺だよ。」

「……………」

ガシー!!

無言で抱きついた…

「あ、姉貴もかよ。」

「……………ごめん涼太。取り返しのつかないことして……………」

「おいおい俺はまだ死んでないんだけど……………。もういいよ。さっき菜月にも言ったから……………」

「……………うん……………ぐす……………」

二人に抱きつかれしばらく身動きがとれなかった涼太だった……………

数日後には同級生や涼太を虐めていた女子たちもお見舞いに来た。

「ごめん村神君！ホントにごめんなさい！」×複数

「いやー、まあいいよ。過ぎたこととやかく言っても仕方ないし…」

「ありがとう村神君。」

一人の女子が涼太の手を握ったその瞬間…

ドクン…

「…！…ちよ、トイレ！」

ダッシュでトイレの手洗い場に行き

「おええー！…！」

おもいつきり吐いてしまった。

ダッ…！

「どづしたのお兄ちゃん！？」

他のみんなも駆けつけてきた。

「はあはあ…。分かんねえ…手を握られた瞬間急に吐き気がしてきた…」

「やはりこうなっちゃったか…」

あの時の先生が現れた。

「先生!?’」×全員

「どうゆう事ですか?」

「君は彼女たちから肉体的・精神的ダメージを受けすぎて、極度の『女性恐怖症』になってる。」

「女性恐怖症…」

それを聞いた瞬間女子全員は表情を暗くした…

「先生、治す方法は無いんですか?」

「すぐには無理だ。少しずつ慣れていく他無い。」

「そう…ですか…」

そのまま部屋に戻った。

「……………」

「お兄ちゃん…あたしたちのせいで…」

「私たちが散々いじめてしまったから…」

「いやいいんだ。そう責めないでくれ。」

「でも…」

「治せない訳じゃないんだ。すぐに元通りさ。…けど原因はアレにあつたかもしれないな…」

「あれって…」

「…!」

『今からあんたを犯すの…』

『や、止める!止めてくれ!』

ドガ!!

『うっさいアホ!黙ってやられとけ。』

『い、痛い!痛いよ!』

『…!』

「…!」

三人は黙り込んでしまった…

「何であたしたちあんなことしたんだろ…」

「分かんない。ただの八つ当たりかもしれない…」

「たったそれだけの事であたしたちはお兄ちゃんを殺しかけた…ホントこの4年間何してたんだろ…：：：本当はただ三人で楽しく暮らしたかっただけなのに…う…く…何でかな…ぐす…」

「もういい…もういいんだ二人とも。これで終わりじゃない。また三人でやり直せばいいだけじゃないか。俺たちにはまだまだ時間があるんだ。」

「ぐす…涼太はこんな最低な姉と妹を許してくれるの？」

「最低とか言うな。二人とも俺の大切な家族だから…」

「ありがとうお兄ちゃん…これからよろしく。」

「私も。」

「ああ！」

こうして三人は失った家族の絆を取り戻したのであった。

第19話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 中編 その2（後書き）

次回で恐らく過去編は終わりです。

第20話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 後編（前書き）

長かった…

これにて涼太の過去編は終わりです！

第20話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 後編

入院から一ヶ月後…

怪我も完治し、退院した涼太…

しかし、やはり女性恐怖症は治ってなかった…

何故かは分からないが唯一陽菜と菜月だけは平気だった。
肉親という事に何か関係があるのかもしれない…

村神家

ぐつぐつ…

トントン…

ズズ…

「よし。味噌汁はこんなもんでいいか。ご飯もあと5分で魚も焼けたか…」

てきぱきと朝食を準備する涼太…

まるで主夫である…

しばらくして

「おはよう涼太…」

「ああ、姉貴おはよう。飯ももう少しでできるから。あとは皿を用意

して…」

「ちよつとちよつと涼太！」

「ん？」

「いつも言ってるじゃん。ご飯は私と菜月が作るって…」

「しかし菜月は朝起きるの遅いし、俺数日前にあいつの飯で数時間生死をさまよったんだが…」

「まああの子は今回が初めてだったから。いつも私がつってからねえ。でも分かってあげて。あの子もあなたのために頑張ってるんだから…」

「うーん、それは分かってるんだけどさあ…やはり徹底的に指導しないと俺も姉貴も命の危険が…」

「うっ。そ、そうね…」

そんな話が続いた…

朝食を作り終えた後…

「おはようお姉ちゃん…お兄ちゃん！」

ガバ！

抱きついてきた…

「おはよう菜月。」

「おはよう…っーか早く離れる！その格好だと目のやり場に困るんだよ！さっさと服着ろ！」

菜月の今の格好は下着のみだった。

「いいじゃんスキニップだよ！…お兄ちゃん顔真っ赤だよ？ははあん…」

菜月はやらしい笑みを浮かべる…

ぎゅっー！！

ムニユ…

「ななな何しやがる！早く離れろ！！」

さらにくっつく菜月…

背中には柔らかい物体が二つ当たってる…

「（ま、まずい。頑張れ俺の理性！俺だって男だからそういうことされるとさすがにヤバイ！！）」

必死にこらえる涼太。

「こら菜月、その辺にしなさい。涼太も危険になってるから。」

「は…い…」

渋々菜月は離れた…

「よーしできた。食べ食べ。」

今日の朝食はシンプルにご飯、味噌汁、鯖の塩焼き、漬け物だった。

「いただきますーす!」「」

三人揃って食いついた。

朝食が終わり、学校に行った。

あの事件の後の学校の雰囲気は変わった。

クラスの女子にも話しかけられ、いじめもなくなった。

元々涼太は顔が良かったので女子にはモテていたが、あの体質を気にしてか、スキンシップしたり告白する女子はいなかった。

それから3ヶ月後…

「え、転校?」

一人のクラスメイトが言った。

「ああ。先生にも既に言っている。あと4日後に出る予定だ。」

「どうして…やっぱり私たちがいじめたから?」

「そうじゃない。あの家にいるといつまでも過去にとらわれるんじゃないかって思ったんだ。断ち切るために家を出るんだ。」

「そうか。それじゃ仕方ないな。」

鮎川が言った。

「まあお前が決めたことだしな。俺たちが止める義理は無いさ。」

岩田も続いて言った。

「鮎川、岩田：サンキュー！」

「ただし、俺らの事忘れんなよ？」

「そつだ。今生の別れのつもりは無いからな。忘れてたら殴って思
い出させるまでだ！」

「ははは！忘れられねーよ。お前らやみんなと過ごした時間。」

それから涼太が転校するまでの4日間、ずっとはしゃぎ声と笑い声
が止むことはなかった…

あの後にした飲み会やら何やらでトラブルもあったが、無事に終わ
り涼太はとうとう転校した…

「……………」

「これで俺の過去は全て話した。もう隠しているものは無い…」

過去の話が全て終わり、沈黙が続いた。
しかし、隆介がその沈黙を破った。

「その後にまさか…」

「ああ。お前と相沢と悠登に出会った。後はお前らの知ってる通りだ…」

「そ、そんな。あたし涼太君が転入してきた日に中々握手してくれないから殴ってしまったのに…」

「ああ。だが相沢、気にしないでくれ。何も知らなくて当然だからな。」

「うん。ありがとう!」

「どうだお前ら。俺の過去を聞いて…やっぱり俺が怖いか？」

涼太は少し表情を暗くする…
しかし

「お前は本当に大馬鹿野郎だなー。」

「なっ!？」

いきなり隆介が馬鹿野郎発言をした。

「例え過去にお前がどんなことをしてかしてもお前はお前。僕たちの接する態度は変わりはないよ。な、みんな？」

「くくくうん(おう)!!」「」「」「」

みんなも頷いた。

「お前ら…ぐっ…ぐす……ありがとう。」

「ほらほら泣くな泣くな。」

「馬鹿野郎!目にごみが入ったんだよー!」

辺りが笑いに包まれた…

それより…

「おい、今何日?」

「そう言えば何か物凄く腹減ったし眠いし…」

「み、みんな…」

「どっした優香？」

「あ、あれ…」

優香が指差した方向を全員が見た。

デジタル時計のようだが…

「なっ!?!」

「い、今8月5日って…」

「とすると、村神君が話すのにかかった時間は一週間!?!?!」

「あ、あはは…ああ目が回ってきた…」

みんな空腹で倒れかけていた。

「あっはっは!話を聞いてくれた礼に飯を食わそう。こっちだ。」

「勘弁してよ〜」x6

この後みんなは一人10人前は食べたので、菜月と陽菜は啞然とし、涼太はずっと笑っていた…

「（ありがとな。お前らと会えて本当に良かったよ…）」

第20話：遂に明かされし涼太の悲しき過去！！ 後編（後書き）

最近思ってたんですが、この小説は読む人は中々いますが感想や評価が極端に少ないようです。

なので、感想や評価の方もよろしくお願いします！

第21話：お祭りへGO！！（前書き）

すみません。

何か勉強が忙しすぎて更新が遅れ気味です。

まだ続きそうです…

第21話：お祭りへGO！！

涼太の過去話が終わってから半月後の8月20日…
夏休みも終盤になっていた。

「暇だなあ…」

隆介が呟いた。

今はもう当たり前前のようにいつものメンバーが集まっていた。

「何か楽しい事無いかな？」

「ふむ。暇ならば今日ここに行ってみないか？」

サツと涼太が一枚の紙を出す。

「これは…お祭りか？」

「そう、今日の午後7時から隣町でお祭りが開かれるんだ。」

「いいねー。あたし行こう！」

「決まりだな。では6時半に現地前に集合とする。ではまたな。」

ヒュッと涼太が消えた…

お前は本当に人間か？と疑わしくなる…

とりあえずそのままみんな準備のため戻っていった。とはいっても僕は準備することもなかったので、暇だった…

午後6時20分…

現地前

誰もいなかった。

「ちょっと早かったかな？まあすぐ来るだろう。」

そう思っていると

「隆ちゃんーん！！」

「沙耶？遅か…った…ね…」

「えへへ。どうかな？お母さんと考えて選んだんだけど…」

文句なしに似合っていた…浴衣がオレンジ色と物凄く目立っていた。

「え？あ、ああ。その…凄く似合ってるよ。」

照れながら言った。

「ホント？ありがとう隆ちゃん！！」

嬉しさのあまりガシッと抱きついた。
ジタバタしていると

「こらー！沙耶！！隆介に抱きつくんじゃない！！そしてあんたも
デレデレするな！！」

「やれやれ…ホントよく抜け駆けするよね。」

「むうう…隆君は私のなのにく。」

舞、杏華、優香が来た。

杏華と優香は何となく性格にあっていて、青とピンクだった。
舞は…意外にも黄色だった。

「杏華も優香も物凄く似合ってるよ。」

「エへへ…ありがとう隆。」

「嬉しいな…隆君に言われると。」

二人は上機嫌だった。

「ちょ、ちょっと！！あたしのは！？」

何故か急に舞が怒った。

「な、何でいきなり怒るんだよ。」

「怒ってないわよ！んで感想は？」

「…馬子にも衣装？」

ガシ！！

「か・ん・そ・う・は！？」

い、痛いよ舞。

肩の骨が折れそうだよ…

「じよ、冗談だよ…その、可愛いよ舞。」

パツと手を離し

「ほ、ホントに！？」

「ああ…こんなときに嘘は言わないよ。」

「ありがとう隆介…」

ニコツと舞が笑った。

ドキーン！！

「（あれ？何で僕舞にドキドキしてるんだ？そりゃあ舞だって黙ってたら可愛いけどさ…）」

「どうしたの隆介？顔真っ赤だけど。」

「あ、いや何でもないよ！（棒読み）」

「何で棒読みなのよ。でも…へえ。」

「な、何だよ…」

「別に」。隆介には分からないことだよ。」

何だよそれっと思っていると後ろから殺気と視線を感じた。

「明日から鞭だけでなく蠟燭も使おうかな？」

「隆君の馬鹿！浮気者！女たらし！不潔！変態！」

こ、怖い…めっちゃ怖いんですけど…

沙耶、鞭だけでもきついのに蠟燭は勘弁してくれ！

明らかにSMプレイじゃないか！！

お前はSだが僕は決してMじゃないから！！

それから優香、しれっと傷つく事ばかり言わないでくれ…

僕はどれにも当てはまってないから…

「あとは変態と涼太君だけかな？」

「悠登はどつでもいいとして、言い出しっぺのあいつは何してんだ？」

「さっきからここにいるが…」

「うわあ！？」

全員が後ろを見たら普通に涼太が立っていた。

「お前いつからいたんだ!？」

「お前と沙耶さんの会話からだが？」

「最初からかよ!何で声かけなかった!？」

「いやーかけようとはしたんだが、次々と面白いことになって声をかける機会がなくなった!」

はははと笑う涼太。

隆介はわなわなと拳を震わせ

「親友なら助けるー!!!」

とストレートをかましたが、呆気なく避けられた。

「無駄だ隆介。旅行の時の俺と一緒にするなよ。」

と不敵に笑う涼太。

「く、悔しい…」

悔しがる隆介だった…

「よう待たせたな!」

悠登も到着した。

「遅いわよ!!」

「時間通りじゃないか。…それにしても、おっほー!みんな綺麗だなあ!」

「いやーあなたに言われてもねえ」

「うん。」

「あはは…」

「ひ、ひどい…」

ドンマイ悠登。

お前はそうゆう奴だ。

「よし全員集合したことだし行こうか!」

「はい(おっ)!」 x 6

こうして隆介一行は現地へ向かった。

「いやーめっちゃ人が多いなあ…」

「そうだね。」

そこはたくさん人がいてすぐにはぐれそうな位だった。

「ここは大きな祭りだから花火とかイベントもすごいから人が自然と多くなっただらうな。」

「そうなんですか。」

「とりあえずはぐれたら無理に探そうとせず向こうの神社の頂上で落ち合おう。花火は8時からだからそんなに焦る事もないさ。」

「了解!!」×6

こうして進んだ。

が、しかし案の定人が多すぎてみんなとはぐれてしまい、隆介は一人ぼっちになった。

「やれやれ、結局こうなるのかよ…仕方ない。テキストに見回るか…」

こうして隆介は買い物しながらあちこち回る事になった。

「おじさーん! たこ焼き12個!」

「へい毎度! 280円な!」

祭りの店は高いが、ここはどうゆうわけか物凄く安かった。

「いやー安いな。どれもこれも普通の祭りの店よりだいぶ違つぞ。」
などと喜びながら進むと森の中に来てしまった。

「ありゃ？ここは違うな。戻るか…」

ときた道に戻ろうとしたら
ぐは！バキ！ズギヤ！

「ん？何だ？」

殴るような音や悲痛の音が響いた。

「ケンカかな？見に行こう。」

音のする方へ向かった…

楽しく過ごそうと思ったがそうは問屋がおろさなかった…

やれやれ…

第22話：男の喧嘩はかっこいい！…のかな？（前書き）

今回はタイトル通りなので短いです。

第22話：男の喧嘩はかっこいい！…のかな？

そーっと覗くと

「あれは!？」

「はあはあ。きりがないわね…」

「あうう。怖いよお姉ちゃん…」

何と杏華と優香がナンパ男2、30人位の男たちに絡まれていた。つーか何でそんなに？

「おいおい姉ちゃん。多勢に無勢だぜ? いいから俺達と付き合えよ。」

「へへ。このまんまお持ち帰りもいいかもな。」

「ぎゃはは! それいいね!」

「僕はいけないと思えますがねえ?」

「何い?」

「「隆(君)!?」」

「何だテメエ。正義の味方気取りか?」

「そんなつもりはないっすよ。ただ僕は目の前で友達を傷つけよう

とするやつを黙って見過ごせないんですよ。」

「そうか teme エこの二人のダチか。だが残念ながら今日から彼女たちは俺達のものだから。」

「そう言われて『はいそうですか』と言う馬鹿はいないんだよ!」

「オイ teme エ。あまり調子に乗ると本気でぶっ殺すぞ!」

一人の男が少しキレ気味になった。

「弱いやつほどそうゆうことを言うんだよ。知らなかった?」

「ぶっ殺す!!」

男が殴りかかってきたその瞬間

「甘いよ。」

サツと避けて鳩尾に一発ぶちこんだ。

「ぐおー!!」

男は3mくらいぶっ飛んで倒れた。

「次は?」

「や、やべえ。あいつかなり強え…」

「ただの優男じゃなかったのかよ…」

ほとんどの男が動揺していた。

「うるたえるな！所詮多勢に無勢だ。一気にかかれ！！」

そう言つてリーダーらしき男以外が一斉に襲いかかってきた。

隆介はハアッと溜め息をつき

「数に頼れば何とかなると思つてんの？つくづく甘い……」

隆介はサツと相手のジヤブを避けてすかさずストレートをかまし、背後の攻撃を宙返りで避けキックを食らわし次々とナンパ男どもを倒していった。

「す、すごい。隆強すぎるよ……」

「隆君、物凄くかつこいい……」

二人はただ隆介の姿に見とれていた。

そしてわずか5分で2、30人を片付けて残り1人となった。

「さうして残りはあんただけだな？」

「く、くそ！おぼえてやがれ！！」

ダツと逃げようとしたが

「逃がすわけないだろアホ！！」

素早く隆介は男の背後に回り込んだ。

「な!?!は、速い!?!」

「よくも僕の友達に手を出したな。あの世で後悔しやがれ!?!」

「ま、待て!?!まだ手は出してフベ!?!??」

言い終える前に顔面にストレートを食らわせたなら漫画みたいに遠くまでとんでいった。

「やれやれ。男の風上にもおけないな。…二人ともケガはない?」

「うん!?!平気だよ!?!」

「私も大丈夫です!?!」

「そうか。よかったよかった。」

ニコツと隆介は笑った。

ドキーン!?!

「(あうううその顔は反則だよ隆君…)」

「(そうやっていつもいつも優しくなるから気付かない内に色々な女の子にモテるんだよこの天然の女殺し…)」

「あれ?どうしたの二人とも?」

「な、何でもないわよー!!」 裏声

「大丈夫大丈夫へっちやらだよ」 棒読み

「何で裏声なの？何で棒読みなの？」

「さ、さあ行こう隆！」

「そうそう。早く見て回らなくちゃ！」

「あ。こ、こらー腕を引っ張るな！」

二人に引っ張られ、あちこち連れ回される隆介だった。

やれやれ…

第23話：願わくば…

まだ花火までには時間があつたので、少し見てまわることにした。

「あ！綿菓子だー！私食べたい！！」

「へえ。優香は綿菓子好きなんだ？」

「うん！昔からお姉ちゃんと毎年買ってもらってたから。」

「そう言えばそうだったわね。』買って買って！！』ってお母さんに泣きついてよく買わせたものだったわね。」

「あうう〜お姉ちゃん隆君がいるときにそんな恥ずかしいこと言わないでよ〜！！」

「いやーそんなことないと思うぞ？可愛いじゃん優香。」

「むづ〜隆君顔が笑ってるんだけど…」

「そんな事ないよ〜？ははは！！」

「あっはっは！！」

「もうー隆君なんて知らない！！」

優香はぷく〜と頬を膨らませて怒ってしまった。

「ごめんごめん優香ちよつとからかいすぎたよ。お詫びに綿菓子買

ってあげるから。」

「ホントに？」

「ああ。だから機嫌直してくれよ。」

「わーい！やったー！！」

優香は走って綿菓子屋に向かう。
それを見た隆介と杏華は

「何か優香まだまだ小学生って感じだな？」

「でしょ？ホント可愛いよ。」

「全くだ。」

二人から思わず笑みがこぼれた。

「おばさーん！綿菓子3個！！」

「はいよ750円ね。…おや、そっちのお兄さんは女の子二人連れ
とは。もしかして二股？」

「「「ち、違います！！」「」」

皆ハモってしまった。

「僕はそんな女たらしじゃないです！！二人は友達です！」

「あつはっは！冗談だよ。そうかそうか若いっていいねえ。あたしもあと30年若ければあんたを放っておかなかっただろうに。」

「そっそうですか。あはは……」

「頑張るんだよ少年。若いうちから色々経験してた方がいいよ？あたしもあんたくらいの頃には彼氏、今の旦那との夜は盛んだったもんさ。」

「はい!!」

「な、なんの話をしてるんですか!?!」

「……………」

杏華は元気良く返事をし、隆介と優香は顔を真っ赤にしていた。

おばさんのからかいも終わって三人は綿菓子を食べていた。

「うーん！やっぱり綿菓子美味しい!!」

「ホントだね。」

「うん。僕も何年ぶり食べたか分からないよ。」

そのあとも三人は金魚すくいをやったり、食べ物を買ったり、楽しい時間を過ごしていた。

「…もうそろそろ時間か。神社に行く？」

「あ、あの隆君…」

「ん？」

「最後射的やろうよ。あたしたち欲しいものがあるし。」

射的か…そう言えば涼太に射的を鍛えられたな。
まあいいや。

「いいよ。やろうか？」

「うん！」

早速やってみた…が、二人ともあまり経験がないのか、よく当たらなかった。

「うん。射的って難しいなあ。」

「あつう〜当たらないよ〜。」

ちなみに杏華は落ちやすいが狙いにくいアクセサリで、優香は狙いやすいが落ちにくいぬいぐるみを狙っていた。

「よし！僕がやってやるぞ！」

「え？ホント？」

「できるの？」

「まあ見てなつて。」

弾は5発か…まあ3発で十分だけど。

「（まずはアクセサリ。これは……ここぐらいかな？…そこだ！）」

パン！！カン！！

見事に命中し落ちた。

「す、すごい！！」

杏華は感心してた。

「やるなー兄ちゃん！次は何行くか？」

「ぬいぐるみを…」

「おお挑戦的だなあ！あれは5年間誰にも撃ち落とせなかったもの

だぞー！やるか？」

「はい！」

「よしそれでこそ男だ兄ちゃん！」

いつの間にか野次馬が増えてきたので正直恥ずかしい……

「（……………先ずはどこから行くか…上を狙ってぐらついたところをもう一発撃ち込むか。）」

集中して銃を構える。

ポイントを1cmでもずらしたら失敗だ。

「（まだまだ。もう少しずらして…いや行きすぎか？……………よし！！）だ！！」

パン！！カン！！

弾が当たりぐらぐら揺れる。

「もう一発食らえ！！」

パン！！カン！！ボテ…

何と隆介の計算でぬいぐるみが落ちた。

うおおー！！と歓声が響きわたる。

「や、やるじゃねーか兄ちゃん！！まさかあれを撃ち落とすとは…」

「す、すごい……」

「あんたいったい何者なの？」

ムツ失礼な！

僕は普通の人間だ。

こうして射的も無事終わり、二人に渡した。

「はい二人とも。」

「サンキュー隆！」

「ありがとう隆君！」

「なあに当然の事をやったままでだよ！」

ニコツと笑った。

「……………」

「……あれ？どうしたの二人とも？」

「（ホントどこまでもずるいよねえ。あんなことされたら誰だってときめいてくるに決まってるじゃない！！）」

「（でもそんな隆君が好き。特に目立ったものもない普通の人だけど、他の人とは違う優しさや温かさがある。いつもいつも優しくしてくれる隆君が好き！）」「

「オーイ二人とも！！」

「何でもない！さあ行こう！」

「行こう行こう！」

「ちょっと引つ張るなよ！！」

三人は急いで神社に向かった。

神社

「遅い！ギリギリじゃない！！」

「悪い悪い舞。寄り道してて。」

「まあ来たからいいじゃん舞ちゃん？」

「そつね。」

「これで全員かな？」

「あつ涼太。…うん全員揃ってる。」

「なかなか良いタイミングだったな隆介！今から打ち上がるぞ！！」

涼太がそう言ったその瞬間…

ヒュルルル…

ドーン！！！！

パラパラパラ…

「おーーーーー！！！！」×全員

花火は本当に綺麗で見とれていた。

「きれいーい。」

「本格的ねえ。」

「そうだね。」

「メインイベントだからな。」

「花火はやっぱりこつでなくちゃ！！！！」

「はわわ〜。」

「たーまやー！！！！」

舞、沙耶、隆介、涼太、杏華、優香、悠登がそれぞれ呟いた。

花火はしばらく続き、皆ただただ見とれていた。

そしてあの二人は

「（うん、確信した。やっぱりあたし隆が好き。誰よりも優しく、強い隆が好き。）」

「（お姉ちゃんもそうだけど、改めて私も隆君が好き。優しく、かつこよくて、そんな隆君が好き。この気持ちに偽りはない！）」

「（願わくば、隆（君）があたし（私）と結婚できますように……）」

二人は改めて隆介に対する想いを持った。

第24話：凄まじき乙女達の闘い！！

花火も終わり、みんな話し合っていた。

「どうする？もう帰るの？」

「そうねえ、花火も終わっちゃったし…」

「ならばこれに出ないか？」

涼太が見せた紙には

「『スイカ大食い大会』！？」

「そう夏と言えば花火もそうだがやはりスイカも忘れてはならんだらう。」

「あつあたし出るー！！！」

「あううゝ私は遠慮するよ。」

「あ、あたしもちよつと…」

「私は出るー！！…何舞ちゃん？最近太り気味だから出たくないの？」

「な、何言ってるのよ！！そんなわけないじゃん！大体それを言うならあんただって…」

「私は全部胸に行ってるから。誰かさんと違ってね？」

沙耶の奴、何で舞を挑発してるんだ？

二人はライバルか？

「良いとこ気付いたね隆。察しが良いじゃない。」

「でも何のライバル？」

「…そうだった。」

「隆君はそういうことには物凄い鈍感だから…」

二人は溜め息をついている。

…何でだ？

カチン！

「いい度胸じゃない！ちょっと乳がでかいからっていい気になるなよ！？」

ムカ！

「あーらごめんね貧乳ちゃん。それとも洗濯板かしら？」

「こ、殺す！」

二人はバチバチと火花を散らした。
ある意味怖えー…

「そう言えば優勝したら何か貰えるのか？」

会場へ移動しながら隆介は涼太に聞いた。

「ああ、優勝者はUSJの無料ペアチケット＋ホテル一泊二日付が貰えるらしい。」

「無料！？」×6

「ず、随分豪華な商品だな…」

「こりゃあますます優勝しなきゃ！そして隆ちゃんとデートをして最後のホテルでは二人でベッドでイチャついて…うふふふ…」

な、何かよく聞こえなかったけど沙耶から黒いオーラが出て物凄く嫌な予感がするんだけど…

「そ、そんな事させないわ！！あ、あたしが隆介とデートして、ホテルで…ブツブツ…」

「ふふふ。勝負だったらあたしは負けてられないな。どうせ優勝しないと意味ないし。」

いや、そんな事ないぞ杏華…
参加賞でスイカ貰えるんだし。

「よっしゃー！ー！俺も出るぞ！ー！そして女の子誘って…デヘ
へ……」

気持ち悪！！

こいつだけは優勝させてはならんな。

世の女の子のためにも…

「ははは！ー！何か面白くなってきたな。それじゃ出場する奴決めた
ら俺に言ってくれ。」

結局出場するメンバーは僕、舞、沙耶、杏華、悠登、まあつまり優
香以外が出場することになった。

…あれ？

「あれ？涼太お前は出ないのか？」

「ああ。どうもこづいづいののは苦手だな…」

「意外だなあ。お前は全てできると思っていたんだが…」

「うん。」 x 5

「……お前らは人を何だと心得る……。全てが完璧な人間なんてこの
世に存在などせん！ー！」

「（それはどうかな…）」 x 6

全員が同時に思った。

兎に角出場するメンバーも決まり、出場しないメンバーは観客席に移動した。

辺りを見回すとざっと100人くらいはいた。

「す、凄い人数だね？」

「そうだな…人数が多すぎるから5組に分けて競うらしい。」

「じゃあ誰があたるかとか分からないんだ？」

「そう言うこと。」

開始30分前になったとき

「あら？隆介様ではありませんか。」

「か、楓さん!？」

何とそこには水色の浴衣を着た楓さんがいた。

「まさか隆介様に出会うとは…私たちは運命の赤い糸で結ばれてい

るのかもしれませんがね？」

「え？あ、えと…」

「だーれが運命の赤い糸よ！！」

「そつよ！勝手に決めないで下さい！！」

「出ましたわねえ私の最大のライバルたち。」

「ふふ、やはり私たちは戦う宿命にあつたようですね？」

バチバチと火花散らしてますよ四人…

もう少し仲良くなれないのかな？ 元凶

「それでは第35回スイカ大食い大会を開催します！！」

一気に会場が盛り上がった…

「それでは1組目は準備してください！」

ちなみに僕と悠登は2組目、あの四人は5組目となった。

壮絶なバトルの予感…

「ルールは簡単。制限時間の30分の間により多くのスイカを食べ、一番多かった人が優勝です。ちなみに歴代優勝者の記録は13玉です。皆さん記録を破れるよう頑張ってください！！」

うおーっ！と叫ぶ選手たち…

あの四人は

「ふふふ。ただか13玉が最高記録なんてシヨボいわね。その程度なら軽く抜けるわ……」

「な、何でこんなにも本気になるのかな？
そんなに優勝したいのかな？」

「それでは……スタート!!」

ホイッスルがなったと同時に一斉に食べ始めた。
ふむ、みんなすごい。

「そこまで!!」

ホイッスルが鳴り、計測を始めた。

「只今の勝負の1位は芳野選手の16玉と4分の1でした!!」

うおーっとみんなが叫ぶ……

「あー!! 綿菓子屋のおばさん!!」

「おや？あなたはあの時の少年かい。」

「出てたんですか？」

「ああ。あんたら若いのを見るとついついね。でも……駄目だったね。」

「記録を更新してますけど？」

「いや、今回はとんでもない何かが起こる予感がするんだよ。年の功で分かるのさ。」

「そうですか…。」

「はっはっは！まあ頑張りなさい少年。」

そういつて去った。

何かか…

僕もそんな予感が…

「さあいきなり記録を破ったぞ！今回はレベルが高いか？さあ続いて2組目準備してください。」

隆介と悠登は席についた。

「ねえねえ…あの人かつこよくない？」

「ホントだ！。彼女いるのかな？」

「何だ？誰かかつこいい奴いるのか？」

キョロキョロ周りを見たがそれらしい人は見当たらなかった。素

晴らしき鈍感男

「ふふふ。やはり俺は注目されてるな！」

「何あの人キモい。」

「ホント、横の人の知り合いかな？」

「横の人はかつこいいのに……」

残念悠登、別の意味で注目されてるな……

そう言えば最後の人の話は聞こえなかったな……

ゾク……

「な、何だ!？」

振り返ると舞と沙耶と杏華と楓さんがとてつもない殺気を出して睨んでいた。

「ひいひい何でだよ……僕何もしてないよ。」

尋常じゃないほど鈍かったので、分かるはずもない隆介だった。

「それでは……スタート！」

一斉に食らいついた。

20分後……

「も、もうダメだ…」

ボタンと悠登は倒れた…

会場は笑いに包まれる…

「モグモグ…阿呆…」

30分がたち、結果は僕の21玉で1位となった。
ちなみに倒れてるバカは12玉で終わっていた…

「すごいじゃない隆！断トツトップよ！」

「いや、分かんない。まだお前ら残ってるし。」

「おほほほ！当然ですわ隆介様。貴方を抜いて1位になり、私と…
その…デ、デートをしてもらいますわ…」

「ちょっと！あたしたちを忘れて貰っちゃ困りますよ。」

「勝っても負けても恨みっこなしですよ？」

「もちろんですわ！」

お、さっきまでの空気とは違うな。

うん、やっぱり仲がいいのはいいねえ。

結局3、4組では隆介の記録は抜けなかった。

「さあいよいよ最終戦だー!!今のところ1位は佐々城選手の21玉だ!このまま優勝となってしまうのか、はたまた誰かが記録を破るのか、5組目準備をしてください!」

みんな準備をした。

「隆(介)(ちゃん)(様)とデート…」

か念仏を唱えてるみたいにブツブツ何かを言っている…

「それでは最終戦……スタート!!」

スタートした。

「な、何かあの四人めっちゃ早くない?」

「やるなあいつら。」

「はわ〜お姉ちゃんもみんなもすごいです。」

もはや四人の決戦となっていた。

25分後…

相変わらず四人の決戦で、既に隆介の記録を抜いていた。だがやはりペースが物凄く落ちていた。

「ま、まずい。これを食べないと隆ちゃんとのデートが…」

「き、厳しいなあ。みんなすごいよ…」

「（これさえ、これさえ食べれば…）」

みんな諦めかけていたが、一人は違った。

「残り10秒！」

「（絶対に、絶対に隆介は譲らない！あたしも隆介が好きだから。このデートで告白すると決めたから…だから…）」

「残り3秒…！」

「負けない…！」

シャク…

「」「」「あ…！」

「そこまでー！ー！」

終了した。

会場から拍手があった。

「いやー今年はレベルが高かったなあ……集計の結果は……ホント惜しいけど優勝は底力で逆転勝利をした相沢選手、記録27玉でしたー！ー！ー！」

わああー！ーと再び盛り上がった。

優勝商品を貰って大会が終わり、楓さんと別れ帰路についた。

「いやーみんなすごかったなあ。」

「し、暫くはスイカ食べたくない。」

「そ、そうだね。」

「でもこのチケット9月からだからまだ使えないな……」

「待つしかないな……」

「うん。でも……よかった。」

「嬉しそうだな舞？」

「えへへ…」

「こうしてお祭りもあっという間に終わった。

来年もまたみんなで来ればいいなと僕は思う…

とじろで…

「そう言えば…」

「ん？」

「もうすぐ夏休み終わるけど、三人とも宿題終わらせた？」

「」「」「……」「」

「…終わってないんだな？」

「あ、あははは…」

「隆介お願い！手伝ってください！」

「やれやれ結局こつなるのかよ…」

「はは、俺も手伝っぞ」

「私も。」

「助かる。あつ悠登は自分でやれ。」

「何でだよ!?!」

「そんなには見きれん。自分でどうにかしろ。」

「ひ、ひでえ…」

結局宿題を終わらせるのに5日もかかり、夏休みもほぼ終わっていた。

それからは何事もなく過ごし、そして楽しかった夏休みも終わった。

尚、悠登の宿題が終わらなかったのは言うまでもないだろう…

やれやれ…

第25話：テストと涼太は恐ろしい！！（前書き）

すみません！

勉強で更新が遅れてしまいました。

第25話：テストと涼太は恐ろしい！！

夏休みが終わり、今日から始業式である。

ピュピュ...

「ん？もう朝か...」

あくびをしながら着替えて、朝食にトーストとベーコンエッグを食べ、コーヒーを飲んで家を出た。

ガチャ...

「おはよう隆ちゃん！」

「よう隆介！」

「遅いわよ！」

「元気？」

「おはよう隆君。」

「おはようございます隆介様。」

「お前が最後だぞ？」

家の前に沙耶、涼太、舞、杏華、優香
そして珍しく楓さんと悠登がいた。

「あれ〜？今日は全員集合ですか？」

「まあ今日は始業式だからな。」

「そうか。んじゃ行こうか。」

こうして隆介たちは学校に向かった。
周りを見てもみんな喧嘩もせず仲良く話している。
いつもこんなだったらいいんだが…

そして、学校に着き楓さんと別れて僕たちは体育館に向かった。

校長の長ったらしい話を軽く流して始業式が終わり教室へ向かった。

教室

ガラガラ…

「おはようみんな！」

「おはようございます片瀬先生！！」×ALL

「おおー！！このクラスを担当して約5ヶ月、やっと俺の名前を呼んでくれたかー！！この片瀬凌哉24歳感動だー！！！！」

担任の片瀬先生は号泣していた。

それほど気にしていたのか…

「というわけで言っただが明日はテストするからな。」

「エエー！？と生徒たちは嫌がっていた。」

「心配するな！テストと言っても全国模試だから。点数はまだとれなくていい。ちなみにこれは3年まで一斉に行うから。」

「あっ、でももしクラスに優秀者がいたら俺給料とボーナスアップだからなるべくとれよ？」

「個人の事に生徒を使うなー！！！！」×ALL

生徒全員が同じことを言った。

放課後…

「あゝあ。明日いきなりテストなんて…」

「しょうがないよ。学生の本業は勉強だし。」

「相変わらず隆介は真面目だねえ…」

「まっ頑張ろっぜ?」

こうして一日が過ぎていった。

そして当日…

「始め!」

一斉にスタートしたが、しかし…

「な、何だこれ！？3年までの分も含まれてるのか！？」

「こんなの解けるわけないわよ……」

「つくづくここは変な学校ねえ。」

「1年はただの恥さらしだね……」

「な、何か解ける問題を探さなきゃ……」

「寝よ寝よ……」

そう、この模試は本来3年が受けるもんだが校長がどうせだからみんな受けさせようと決めてしまったのである。
いい加減な校長だねえ……

ちなみに

「お？意外に点数とれるぞこれ……」

約一名は余裕で問題を解いていた。

そしてテストが全て終了した。

7科目もあつたので、外は日が暮れていた。

「あ〜やっとならったよ。」

「あたしもうへトへト…疲れた…」

やはりみんな疲れ果てていた。

「だがまだまだこれからも続くんだからだれてる暇はないぞ？」

「村神君。何でそんなに元気なの？」

「ずっと似たようなことやってきたからなあ…慣れだ慣れ。」

むう、やはり涼太は僕たちの数倍努力してきたんだな…

そして二週間後…

「おはようみんな！早速だが前やった模試の結果が…きたー！
ー！ー！」

「山 高広！？」

全員がそう言った。

「ちなみに校内50位以内の奴は廊下に張ってあるから見ろがいい。」

佐々城隆介	486 / 900
相沢舞	206 / 900
神代沙耶	381 / 900
柘杏華	258 / 900
柘優香	477 / 900

「あ、あはは…やっぱり悪いね。」

「でも隆ちゃんと優香ちゃんは校内500位以内だからまだいいんじゃない？」

「ううん。やっぱりまだまだだよ。」

「大体こんなのとれるわけないんだよ！」

「それにしたって舞は酷いけどな…」

「う…ごめんなさい…」

「で、変態は？」

「195」

「舞と変わらんね？」

「ガーン！！」

舞はショックで落ち込んでしまった。

そして張り紙を見に行った。
するとそこには驚くべきものが…

1位村神涼太	8 9 9 / 9 0 0
2位森谷僚	8 9 7 / 9 0 0
3位神崎楓	8 7 5 / 9 0 0
4位村神陽菜	8 5 1 / 9 0 0
5位大群拓也	8 4 3 / 9 0 0

「……………」x全員

もはや言葉にすらならなかった。
凄すぎて…

「大群先輩って言ったら生徒会執行部の…」

「ああ、あの体のでかい人？」

人は見かけによりませんかあ…

「見て見て！涼太君のお姉さん。」

「ホントだ。つーかあいつのお姉さんって零恋の生徒だったんだ…
はあ姉弟揃って頭いいのかよ…」

「神崎先輩もあるよ。」

「うん。やっぱりあの人に勝てたのは奇跡だろ絶対…」

「森谷僚……まさか森谷会長!？」

「あの3年の現生徒会長の眼鏡を掛けたクールでイケメンな人？」

「そう!はあ…顔もよくて成績もいい。その上生徒会長もやってるなんて凄いやねえ。」

「な、なんだろうこの敗北感…」

「ファンクラブもあるって話もあるよ?」

「凄いなあ…」

全てがノーマルな僕とは大違いだよ…

「大丈夫だよ?私たちは隆ちゃんが一番かっこいいと思ってるから!」

「うん!」

「そ、そう?あ、ありがとう…」

照れながら言った。

うん、やはりきっぱり言われるとけっこう恥ずかしいなあ…

「そして…涼太か。」

「うん。大方予想はしてたけど…」

「レベルが違うわね。」

「でも、それも村神君は昔から色々努力した結果ですから。」

「だな…」

改めて涼太の凄さが分かった隆介たちだった。

「あれ？隆介君たちじゃない。」

「え？あつ涼太のお姉さん。」

「こんなところにいたんだ。…何？その敗北感を味わったような顔は？」

「いやー。この点数見て自分がどれだけレベルが低いかっていうのが分かりましたので…」

「そうね。でも一番驚くべきところは涼太が森谷会長に勝ったことね。」

「どづいっ事ですか？」

「森谷会長は小学校から今まで全国模試では常にトップだったからね…」

「……………（絶句）」×全員

「今回の結果で森谷会長の闘志に火を付けちゃったからね…」

「っ、ついていけん…」

「私も（あたしも）…」

涼太よ…お前は本当に人間か？と疑いたくなるぞ…

そして森谷会長…何故あなたは零恋と言う全国でも普通よりちよい上の学校に来てるんですか…

やれやれ…

第26話：舞とデート…！（前書き）

更新遅れてすみません…

第26話：舞とデート！！

これは夏休みが終わってから二週間後のテストの結果までの間の休日の話である…

テストが終わってから数日後…

「ね、ねえ隆介…」

「ん？どうしたの舞？」

「あ、あのさ、明日から休みじゃない？だ、だからさあ…あ、あたしとこ、ここに行かない？」

舞に見せられたチケットは先月の夏休みの祭りの時に買ったスイカ大食い大会の商品だったUSJチケットだった。

「ああ、僕は別に構わないけど…僕で良いの？」

「うん！てゆーかあんたじゃないとダメ！」

「…何で？」

「それを聞くのは野暮じゃないの？」

舞は拳を構えて殺気を出していた…

「ひいいゝ、わ、分かった！とにかく一緒に行こう！！」

「うん！…じゃー明日5時に迎えに行くから！」

「お、おう…！」

こうして舞は隆介をデートに誘うことに成功した。

「やったー！！遂に隆介とデート…あつでもどうしよう、あたしデートとか初めてだし隆介に迷惑かけないかな？あぁーどうしようー！！！」

暫くパニックになった舞だった…

その頃隆介は…

「そう言えば舞と二人きりで県外に行くの初めてだなあ。…こ、これってもしかしてデ、デートなんだよね…」

今ごろ隆介は気づき顔を真っ赤にした。
なんて鈍さなんだろう…

翌朝…

AM 4 : 30

「うん、もう時間か…外は暗いな。」

朝早すぎたため外はまだ真っ暗だった。

AM 5 : 00

ガチャ…

「あ、お早う隆介！」

「お早う舞。朝から元気だね？」

「それがあたしの取り柄だから。ところで…」

「ん？」

「に、似合ってる？」

舞の格好は白のワンピースに帽子を被っていた。シンプルだがだからこそ舞の可愛さがより増した。

「う、うん。凄く可愛いよ？」

「ほ、ホント？やったー！」

舞ははしゃいでいた。

しばらくして空港に向かい、飛行機に乗った。

隆介は朝早いせいか、離陸して数分後には熟睡してしまった。

「もうっせっかくのデートなのに…でも、まあいいかあたしも寝よ。」

そう言って舞も隆介の肩に頭をよせて寝た。

3時間後…

「うん。ふあゝもうすぐ着くね。隆介、起き…」

て。と言おうとしたが

「あ、隆介の寝顔…可愛いなあ。ふふ、もう少し眺めとこ。」

結局隆介が起こされたのは空港に着いた後だった…

USJ前

「わあーすごいー!」

「こゝ、これは予想以上だな…」

さすがは日本でもトップレベルのアトラクションのある場所。
そこら辺の遊園地とは比較にならない…

「最初は何に乗る?」

「決まってるじゃない！まずは…あれよ！！」

舞が指差した方向

間違いなくジェットコースターだった…

「いきなりかよ…！」

「ほらほらボサツとしない。さっさと行くよ！」

「痛てて、引っ張るな引っ張るな。」

こうしてジェットコースターに乗ることになった。

ガーーーーー！！！！

「うわーーーーー！！！」

「きゃーーーーー！！！」

ジェットコースターは意外に速く、苦手な隆介は目を回した。

「め、目が…！」

「だらしないわねー。ちょっとジュース買ってくるから待ってなさい。」

「うん。うん。」

舞は急いでジューズを買いに行った。

「元気だなー舞は。性格はアレだけど、顔も運動も良くて、男女から人気がある。ホント僕の幼馴染みなんてもつたないくらいだね。どうして舞とか沙耶とか涼太とか僕の周りは優れてる人ばかりなんだろう…。幸であって不幸かな？

はは、面白いねー。

…それにしても舞ちょっと遅いな。」

舞がいなくなつて10分がたとうとしていた。

仕方なく辺りを探してみると数人の男と舞がいた。

「やれやれ…どうして僕はナンパ男に縁があるのかなあ…」

助けようとしたが…

「なあ姉ちゃんよう。連れの男なんかほつといて俺たちと遊ぼうや。」

「そつだそつだ。俺たちの方が楽しいつて。」

…何故だろう。何故ナンパするやつはどいつもこいつも同じことしか言わないんだろうか…

「うっさいわね！あたしはあんたたちみたいなチャラチャラした男が大っ嫌いなよ。」

「またまた強がっちゃって。ほら行くこつや。」

と男がつかもうとしたその瞬間

「あつバカ！」

と言った頃には遅かった。

男は舞のボディブローを受けて5mくらいとんだ。
なんつー馬鹿力…

「な、なんだこの女。メチャクチャ強いぞ。」

「もう一度だけ言うわ。今すぐあたしの前から消えなさい！そして二度とあたしの前に入るな！！」

「ひいひい！！！！」

男たちは脱兎のごとく逃げ去った。
今の舞…メチャクチャ怖かった…

「全く…あ、隆介！」

「よ、よう舞。」

「も、もしかして今の見てた？」

「ごめん、見た。」

舞は顔を真っ赤にして

「ああ…隆介に見られた。これで隆介に嫌われた、もうあたしは終わりだ…」

「ま、舞大袈裟だよ。大体そんなに嫌うわけないよ。」

「ほ、ホントに!?!」

「うん。だから気にすることじゃないよ。」

「隆介…」

こうして舞は元気になった。

第27話：舞、遂に…

昼食を終え、再びアトラクションを回った。

すると

「ねえねえ隆介。船あるよ？」

「ホントだ。まあ時間あるし乗ろつか？」

「うん！」

隆介たちは船に乗った。

周りには十数人のお客さんがいた。

「広いね。何だか面白い。」

「はは！そんなこと言っていると船が大変なことになるかもよ？」

「まさかあ。そんなわけ…」

ないと言おうとしたその瞬間

ザパーン！！

ドタドタ!!

不審な音がした。

「な、何だ？」

見ると海賊らしき人たち10数人が剣や銃をもって船上がっていた。

「騒ぐな!! たった今この船は俺たちが占領した。死にたくなければおとなしくしろ!!」

周りでは怖がってる人もいれば、泣いている子供をあやしめる人もいる。

「(どうする。片付ける事は可能だが下手に騒ぐと他の人たちが危ないな。人数的にも時間が少しかかりそうだな…)」

「ヒヤハハ! ざっとこんなもんよ。兄貴どうします?」

「ふむ。念のためしばらく警備体制をとれ。」

「了解!!」

と言い散らばった。

「(ちつ。警戒体制をとったか。無闇に近寄れんな。)」

「(どうすんのよ!?! あんたがあんなこと言うから!?!)」

「(ぼ、僕のせい！？僕は違うだろ！！)」

「(とにかくあいつら倒さないとやりたい放題だよ。)」

とその時

『乗客の皆さん。落ち着いて聞いて下さい。』

「アナウンス？しかも小声で…」

「あいつらに聞こえてなければ良いんだけど…」

『今応援を要請いたしました。乗客の皆さんは騒がずそのまま待機してください。決して奴らを煽つてはいけません。』

「んなに待つてられないわよ…！」

「あつバカ…」

「あつ…」

慌てて口をふさいだが時既に遅し…

「ん？何騒いでんだ姉ちゃん？」

数人の男たちが近寄ってきた。

「な、何も無いわよ。」

「嘘はよくないぞ？急に叫ぶなんてあり得ないからな。
お？よく見たら可愛いじゃねーか。丁度いい。兄貴に差し出してやるか。」

そう言つて手を伸ばしたその瞬間…

ヒュ…ドガガガ！！

「ぐはあ！？」×数人

一瞬の間に数人の男たちがぶっ飛んだ。

「な、何だ今の！？見えなかつたぞ！」

「こ、これ隆介？」

舞が横を見ると隆介が怖い表情で立っていた。

「舞に触るな…」

言葉から威圧感があり、部下はびびっていた。

その時

「君が私の部下を倒した少年か。」

親玉が登場した。

「そつだ。痛い目にあいなくては今すぐ去ることだ。」

「ふつ。君はどうしてそこまでして彼女を守ろうとする？恋人か？」

「「はあ！？」」

思わず二人はハモった。

「彼女は君がそこまでして守りたいと思うほどの大切な人なんだろう？」

「…ああそうさ。舞は顔と運動がよくて、反面短気で暴力的でよく殴られてるけれど…本当は寂しがりで、ただどいつも僕と遊んでくれた優しい女の子だ。これが理由だ！！」

「り、隆介…そんな恥ずかしいよ…」

舞は照れてたが、顔はにやけていた。

「なるほど。素晴らしいな君たちは…」

と言った時

チャキチャキチャキ…

「動くな！お前たちは包囲されている。抵抗は止める！」

応援要請で駆けつけた警官数十人が到着し、銃を構えた。

が、敵は余裕なのか、不気味に笑って

「誰に向かってそのような口を…こっちは人質がいるのにな。」

「し、しまっ…」

「隆介!!」

ドン!!

隆介は敵に銃で撃たれて倒れた。
床から血が流れている…

「き、貴様…取り押さえる!!」

バツと警官たちが男と部下たちを押さえた。

「い、いや。隆介、目を開けてよ!まだあたしあんたに好きって言うて無いじゃない…死なないでよ、隆介ー!!!!」

と泣いていたその時

「う…舞、大声を出すなよ…」

「り、隆介…?」

なんと隆介は確かに心臓を撃たれたはずなのに生きていた。

「じ、じゃあこの弾は…?」

「ああ。間違いなく…」

「麻醉ペイント弾だよ少年。」

「「えっ？」」

振り返るとさっきの敵の親玉がいた。

今度は威厳も何もない普通な感じになっていた。

「ど、どういうこと？」

舞はさっぱり分かっていなかった。

「つまり…今までの事件も全部演技だ演技。仕組まれてたんだよ。そして僕たちは見事にはまったってことさ。」

「はは、すまないね。最初はみんな引つ掛かるんだよ。これがまた面白くてねえ。」

お兄さんは笑っていたが舞は…

「ん？どうしたお嬢さん？」

「や、やばい！逃げ…」

「紛らわしいことするな——！！」

ドゴーン——！！

「ぐは——！！——！！」

「あ、兄貴——！！——！！」

お兄さんは飛んでいってしまった…

あの後必死に舞と謝り、全て片付いた。

「まったく…人騒がせもいいところだよ!!」

「だからって他人を殴るなよ…」

「だって」

それからいくらかアトラクションを回り、いつの間にか暗くなってきた。

今は人がいない高台にいる。

「もう夜か…」

「早いね…」

「うん…」

「あのね隆介？」

「何？」

「今日は本当にありがとうね？凄く楽しかったよ？」

「何言ってるのさ。礼を言うのは僕だよ。今日はありがとう。僕も

「凄く楽しかった。」

「隆介……ところでさあ、船であの人に言ったこと本気だったの？」

「あ、ああ。恥ずかしかつたけど……何となく本音を言わなきゃって思ったらつい。」

「……そうか。じゃああたしも本音を言わなきゃダメね？」

「え？本音って？」

舞は何回か深呼吸をし、そして……

「（大丈夫。今のあたしなら言える。自分に素直になるんだ、みんなみたいに……）」

「隆介、好きだよ。幼馴染みとしてじゃなくて、一人の異性として好き。世界中の誰よりも隆介が大好きだよ。」

「……………えっ？」

隆介は信じられなかったのか、ただただ呆然としていた。

丁度その時…

ドーン！！

パラパラ…

大きな花が空を華麗に舞った…

第28話：二人の心が揺れ動く…（前書き）

今回は短めです。

第28話：二人の心が揺れ動く…

.....

一瞬言ってる事が全く分からなかった……

舞が……僕の事を好き……？

「隆介？」

幼馴染みで、いつも殴って、散々やってきたのに……好き……？

「隆介！」

でも何で？いつから好きになったんだ……？

「隆介！！」

「うわぁ！？」

「どうしたのよ急にボーツとしちゃって？」

「あ、ああごめん。突然好きなんて言われたからびっくりした……」

「……言っとくけど、冗談なんかじゃないよ？」

「え？あ、うん。」

そんなの、舞の顔を見れば分かる。

いつもと違う、真剣な目、分からないはずがない……

「いつから？」

「ほんつと鈍感だよねえ。まあそこもひっくるめて好きなんだけど……」

「う、ごめん……」

「謝らないですよ。……隆介は幼い頃からいつもあたしに優しくしてくれた。もうその頃から好きだったかも知れないね。」

そして小学校高学年くらいからあんたが他の女の子と話をしていると、急に頭に来てしまう。それが嫉妬とも気付かずによく殴ってたわね？」

「そうだったな。僕は何も分からず舞に殴られてたんだな。」

「中学生になつて、ますますあんたが好きになって、独占したいけど恥ずかしくてできなかつた……」

「（意外だな……普段は大胆に行動に出たのに、こういう時は恥ずかしいのか。女の子だな……）」

「長かった、本当に長かったよ……。あんたに想いを伝えるのに16年もかかったやつだ。」

「そうだったのか…ごめん舞、気付いてやれなくて…」

「まあ鈍感なあんたには遠回しのアプローチじゃ効果ないって分かってたけどね。あんた結構モテてるからバレンタインの妨害大変だったわ…」

「じ、じゃあ僕がお前以外にもらえなかったのって…」

「そ、あたし。あんたが他の女子からチョコを貰って喜ぶ姿なんて見たくなかった…ごめんね？勝手な事して…」

「ま、まあ過ぎたこと行っても仕方ないし。舞の気持ちがどれほど大きいのかもよく分かったんだ。ありがとう。」

「隆介………」

「でも、まだ僕は返事ができない。まだ気持ちの整理がついてないし、誰が好きなのかも…」

「分かってるよ？沙耶たちだってまだなのに、返事出来るはずないもん。」

「でも、必ず答えを出す。それまで待っていてくれないかな？」

「もちろん！待ってるわよ。」

「ありがとう。」

そう言いしばらく沈黙が続いた…

「……やっぱり隆介は優しいね？」

「な、何だよ急に……」

「鈍感でドジで取り柄も殆んどないけどさ……」

「へえへえどうせ僕はノーマルな人間だよ。」

「でも、誰よりも優しくてあたしを助けてくれる、そんな隆介だからあたしは好きになっただよ？」

「ま……い……？」

この時の舞は可愛かった。いや、普段でも可愛いかも知れないが、今は今までで一番可愛かった。

美しい大きな花が舞っている中で、うつすらと頬を赤く染めて、うるんだ瞳で僕に向かって笑った顔がとても可愛かった。思わず僕もドキツとしてしまい顔を赤らめた。

その二人を美しい花が祝福するかのように照らしている。

「あれ〜どうしたの隆介？顔真っ赤だけど？」

「な、何でもねえよ！」

「さてはあたしの魅力にやられたな？うふふ、可愛い〜」

舞は隆介の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「ばっ！そんなわけないだろ！！」

「えへへ〜沙耶たちに勝てそうかな？」

「さ、さあな…。」

「（ありがとうね隆介。あたし、あんたと出会えて、あんたを好きになって本当に良かった。」

願わくば、隆介があたしのものになりますように…。」

こうして隆介と舞のデートは終わった。

今回のデートで二人の心が動いたのは間違いない！

これからどうなることやら…

やれやれ…

第29話：隆介貞操の危機！？だが結局は…

翌日の昼頃…

「お帰り〜隆ちゃん舞ちゃん！」

「ようお二人さん。」

「お土産ー！」

「お疲れさまです。」

「いいな…」

みんなが出迎えてくれた。

「ただいまみんな。」

「ただいま！」

場所を移して…

佐々城家

「でー！でー！どつだったのよゾートは？」

「あうう〜お姉ちゃん落ち着いて。」

家につき、みんなにお土産を渡したあと早速話してくれとうるさい。

「隆ちゃん？舞ちゃんとホテルで二人きりだからってベッドで××してないよね？」

「結局それかよー!!」

何でも下ネタに持っていきやがって…

一体何がお前をそんな人間にしたんだ…

「で？ほんとーに舞と×××してないよね!？」

「隆君の××は私がいただく…」

「いいから落ち着け痴女どもー!!!!」

優香…お前までとは僕悲しいぞ？

「話すしかないな舞？」

「う、うん…」

「だよなーお前らホテルで……………だったもんな？」

「「な、何で知ってるの!!???」」

確かにあの時は僕と舞だけだったはず…

「ふははは！！まだまだ甘いなお一人さん。気配を消して調査など
エストでは基本中の基本だ。」

マズツたな…

まさか気配まで消せるとは…恐るべし涼太…

「分かったよ。話す話す。」

時をさかのぼって昨日の夕方…

「見て見て！あれがあたしたちが泊まるホテルみたいだよ。」

見たら楓さんのところには遠く及ばないが、タダの割にはなかなか
豪華なホテルだった。

「いらっしやいませ。」

「あーこのチケットなんですけど…」

「ペア旅行券ですね？かしこまりました。お部屋は最上階の20階のスイートルームになります。こちらがカードキーです。」

大会の景品でしかもホテル付でさらにスイートルームってどんだけ豪華なんだよ…

……あれ？何かが引つ掛かるな…
あっ！！

「あの～もしかして一部屋ですか？」

「そうですが何か？」

やっぱりこうなるのかよー！！

「や、ヤバくないですか？若い男女って…」

「そのことならご安心下さい。当ホテルのスイートルームは防音で警備も厳重なので、外に響くこともありませんし、外部からの干渉もありません。」

「いや、あのそうじゃなくて…」

「それではごゆっくりどうぞ。」

スルーされたよ…

「まずいな、どうする舞？」

「あ、あたしは…あんとなら…いい…」

はっ？今なんて言ったんだ？

「あ、あんなら何されても構わない…」

「……………お願いだから誤解を招く発言は止めてくれ…」

仕方がないので諦めた。

途中で受付の人がニヤツと笑ったのは気のせいではなかった。
絶対わざとだ…

最上階スイートルーム

「うわぁ綺麗だなあ…」

「ホント、タダとは思えないわね…」

スイートルームは豪華なシャンデリアや大理石の床、テラスなどがあつた。

ちょうどいい時間帯だったので、そのまま夕食に向かった。

夕食はバイキングになっており、食事だけの場合は一人6000円と少し高めだったが、宿泊者は無料なので助かった…

料理もこれまた豪華で、日本からアメリカからフランスからスペインからと世界中の料理とデザートがたくさんあった。

「……今考えればあたしたちって今年は物凄く贅沢してるよね……」

「う、うん。楓さんの時といい、今といい、多分こんなに贅沢してる高校生なんて世界でも数えられるくらいだな……」

などと、ブツブツと呟きながら美味しい料理を食べた…

部屋に戻った二人。

が、ここで問題発生…

「べ、ベッドが一つ……」

ダブルベッドと言うやつだろう…

やけに幅広いベッドだ…

「ぼ、僕はソファで寝るから舞はベッドで寝なよ？」

「そ、それじゃ隆介が風邪引いちゃうよ！」

「だ、大丈夫だよ。僕は丈夫だし、部屋は暖かいし…」

まあまだ夏と秋の間くらいだから当然だが…

「べ、別にあたしは構わないよ？一緒に寝ても…」

「えっ？」

舞は顔を真っ赤にしながら言った。

「ほ、ほら昔は一緒に寝たこともあるし、き、気にすることないよ？」

昔っていつだと思ってるんだよ…

「い、いやでも…」

「…お願い、一緒に寝て？」

「ま、舞？」

舞は顔を真っ赤にして、真面目な顔をし、潤んだ瞳で言った。

「…さすがにもう断れなかったのだから、諦めて一緒に寝ることに決まっ
た…」

「の、覗かないでよね!？」

「し、しないよ!！」

今舞はシャワーを浴びようとしていた。

シユル……バサ……

衣服の音が聞こえる……

この薄い扉の向こうでは舞が……って何考えてるんだ僕は!!
いかんいかん、気をしっかり持て、意識するんじゃない。

……でも舞は僕を好きって言ってる……

「はは……ただの幼馴染みってお互い思ってたけど、それは僕だけ
だったんだ……舞は成長して人を好きになって、大人へと近づいてる
んだ……

それに比べて何やってんだ僕は……

人に好きって言われて、待たせて、挙げ句の果てにはまだ誰が好き
かすらも分かってない……

ホント僕って成長してないな……」

しばらくすると……

ガチャ……

「上がったわよ隆介。」

「う、うん……」

今の舞は妙に色っぽくて、いい匂いでとても目を合わせられなかった。

「いかにいかに。落ち着くんだ僕……」

そうして隆介もシャワーを終え、眠りにつけ……

「るはずねーだろ……」

一人むなしく突っ込んだ……

さすがの隆介も隣に年頃の女の子がいたら、落ち着くことができない。

「（な、何やってんのあたし……もうこんなチャンス二度とないのよ！……ここ、行動しなきゃ……）」

しばらく沈黙が続く……

「り、隆介!!」

「何?...うわ!?!」

グイ!

ドサ...

隆介は舞に押し倒され、上に舞が乗った。

「ま、舞...?い、一体どうしたんだ?」

「隆介...あたしもう我慢できない!!」

「うぐっ!?!」

隆介の唇と舞の唇が重なった...

舌と舌が絡み合い、嫌な音がする...

「ぷは!.....な、何やってんだよ舞!?!」

「キスだよ?あたしは隆介が好きだからした。」

「だからって、お前こんなこと...」

「いきなりキスしてごめん隆介。でもあたしもう限界だった。10年以上あんたを想ってきて、年を重ねる毎に膨らんできて...もう我慢できない...」

そう言い舞は隆介の服を脱がせる。

「ま、待て舞！！それはダメだ！！まだ僕たちは付き合っていないに……」

「何で？あたしはずっと隆介を想ってきたんだよ？それなのにまだ待たせる気なの！？」

「それは僕が悪かった、ごめん。でも、今やろうとしていることは沙耶たちみんなを裏切ることになるんだぞ……！！」

「……！！」

そうだった。あたしたち神崎先輩や沙耶たちみんなと約束したじゃない……

勝手な行動はしないって、隆介が答えを出すのを待つって……

「ごめん隆介……」

「い、いやいいけどさ。元々僕が悪いんだし……」

「だから、必ず返事をしなさいよ？」

「分かってるさ……」

まあなんとか一件落着いたみたいでよかったよかった。

「けど一緒に寝るくらいは許してね？」

「あ、ああ……」

パチンと電気を消して、そのまま寝た。

「（とうとう僕のファーストキス奪われてしまったか……）」

「（エへへ、隆介とキスしちゃった）」

そんなこんなで二人の旅行は終わった……

「……………へえー隆ちゃん舞ちゃんとキスしちゃったんだ…」

「や、あのこれは…」

「これはこれはお仕置きが必要ね〜」

「だ、だから…」

「浮気者の隆君にはたっぷりお仕置きしなきゃ。」

「ゆ、優香お前も？ちょ、ちょっと待っ…」

「」「」問答無用……………」

結局「」なるのかよ……………」

やれやれ…ガク……………」

第30話：生徒会紹介そして次なるステージへ！！（前書き）

とうとう30話来ましたか…

完結までもうしばらくお付き合い宜しくお願いします！

第30話：生徒会紹介そして次なるステージへ！！

沙耶たちにボコボコにされてから2週間がたった…

無事テストも終わり、しばらく（今月末まで）はなんの行事もなくただただ暇な学校生活を送っていた。

「暇だな…」

「まあしばらくはなんの行事もないからね…」

「あゝあ。学校じゃなければ一日中隆ちゃんといちゃつけれたのにな…」

「勘弁してくれ…僕の身が持たないよ…」

こいつは自分の容姿を分かってないのか！？
仮にもトップの容姿（と言われている）のに…

「キヤーキヤー！…」

「ん？」

「何あれ？」

廊下にたくさんの女子が並んで叫んでいた。

「まるで空港でハリウッドスターが通る時のような状況だな…」

「ホントね…」

「あ！あれ、大群先輩と森谷会長じゃないの？」

「何？」

舞が指した方向を見ると数人の生徒会の人、2m近くの大柄の男、そして眼鏡を掛けたイケメンが歩いていた。

「あれが生徒会執行部の大群拓也先輩か…めちやくちゃでけえな…」

「こ、高校生なの…？」

「そうだ。過去に何十人も問題児を肅清し、改心させた人だ。」

「何だ涼太あの人知ってるのか？」

「ああ。俺もあの人に問題児と間違われて襲いかかってきたところを返り討ちにしてやったんだ。」

「何で間違われてるんだよ…」

「さあな？」

明らかに心当たりがあるような顔と言い方だな…

「会長！今月の予算案なんですが…」

「その件については……してくれ。」

「はい！…」

「会長！理科室で化学部が規則違反の実験をしているとの報告が！」

「全くあいつらは……拓也、徹底的に叩きのめしてくれ！」

「任せる僚！行くぞお前ら！…」

「はい！…」

さすがは頭脳明晰の生徒会長、いかなることでも冷静に判断してる。
が…

「会長！私と付き合ってください！…」

「はあ！？」

「抜け駆けは卑怯だよ！会長私と…」

「い、いやあの…」

「会長可愛い！！顔が真っ赤になってるよ？」

「そ、そういうことは好きな人に言うんだ！冗談でそんなこと言っちゃ駄目だ！！」

「うーん、今時珍しい硬派の男性…素敵！」

と他の女子が襲いかかろうとしたら

「コラー！会長をからかうな！！」

と、遠くから声が聞こえてきた。

「あ、あの人は涼太のお姉さん？」

「何だ知らなかったのか？姉貴は生徒会副会長でもあるんだぞ？」

「知らなかった…」

「私も…」

「僕も…」

「と言うよりも、一番驚いたのが森谷会長の女の子が苦手だったとこなんだけど…」

「誰かさんにそっくりね？」

「な、何故僕を見るんだ!？」

「別にいゝ」

くそー沙耶の奴からかいやがって…

翌日…

「ああお前らに一つ言い忘れてたことがある。」

「なんですか？」

一人の生徒が片瀬先生に尋ねる。

「そう言えば来週球技大会だった…」

しばしの沈黙…

「何でいつもいつも肝心なことを早く言わないんですか！！？？」
×ALL

生徒全員がハモった。

「いやー悪い悪い。伝えたとばかり思ってたんだよ。」

「（こんな人が教師で大丈夫なのか？）」

「大丈夫だ。これでも教師歴2年だ。」

「エスパー！？」×ALL

「お前たちの顔を見ればすぐ分かるさ！」

……疲れるなこの人…

ともかく、時間がなかったのですぐに出場する種目を決めました。
しかし、ここで疑問が…

「先生、この『剣技』ってよく分からないんですが…これ明らかに

球技じゃないですよね？」

「そうか。お前ら知らなかったんだっけ？それはこの大会でのメイ
ンディツシュみたいなものだ。」

「具体的にはどんなことするんですか？」

「そうだな。やはり説明をしなければならんな…」

急に片瀬先生が真面目な顔になって、シリアスな空気になった…

「な、何でこんなにシリアスな空気になってるんだ…」

僕はあまりの変わりように思わず声を出してしまった…

「黙れ佐々城！！今から少しの間真面目になるんだ。俺も久しぶり
に真面目になるぞ。」

と言うことはあんたは今まで仕事をほとんど真面目にしてなかつた
ってことかよ…

仕事舐めすぎだろ…

「全員真面目になったようだな…」

「せ、先生。『剣技』と言うのは…」

「ふむ、本来『剣技』はお前たちの言うとおり球技ではない。何故それをやるかも不明だ。ただ、これは毎年負傷者が多数出ている。だが、あまりの人気故やめようにもやめられないんだ…」

「しゅ…」

生徒全員が固唾を呑んでいる…

「剣技とは…」

「剣技とは…?」

「次の話で説明する！！！」

ドタドタドタ！！

生徒が一斉に倒れた。

「何だそりゃー！！！！！！」×ALL

「はっはっは！！！！どうだ驚いたろ？」

「（ああ、今すぐ殺してえ！！）」

ワケわからん人だ…

やれやれ…

第31話：球技大会開催！！

「では約束通り剣技について説明しよう。」

「はよ説明しろやこのやろっ…」×ALL

「ゴホン。剣技というのは言わばバトルロワイヤルみたいなもんだ。」

「バトルロワイヤル??」×ALL

生徒全員に？マークがついた。

「そう。とは言っても『剣技』だから剣、刀、拳以外の使用は禁止。二人一組となって協力して戦うんだ。」

「でも先生それじゃ…」

「怪我人が確実に出るってか？」

「はい…」

「そうだ。剣も刀も本物の使用OKだから怪我人なんて普通に出る。昔は死人も出たって話もある…」

「!?!?!」

生徒たちのほとんどが怯えていた。
無理もない、死人が出るなんて危険極まりないのだから……

「だからできれば俺もしたくないが、選ばなければならない。いな
いとは思うが誰かやってくれるか？」

当然誰も手を挙げなかった……
しかし

「はい俺やります！」

「む、村神……お前話を聞いてたか？」

「はい。どうせ誰かやらなければならないなら俺がやります。」

「そ、そうか……ではもう一人は？」

「そりゃあ隆介に決まっていますよ！」

そつだそつだ隆介お前しかいねえよ……っ……っ……あれ？

「ええ！！？？僕！！？？」

「隆介、お前となら優勝も夢じゃない！」

「でも…」

「佐々城！お前ならできるー！！」

「お願い佐々城君！」

「佐々城やってくれるか？」

「……分かりました。」

覚悟を決めて剣技に出場することになった。

「よしお前ら！絶対に優勝するぞー！！！！」

「おおー！！！！」

これにて球技大会の種目決めは終わった。

放課後…

「ホントに大丈夫なの隆ちゃん？」

「まあ一応涼太には鍛えられてるし大丈夫だよ。」

「そうそう。隆は昔から喧嘩は強かったし心配ないよ?」

「うんうん。信じてるから。」

「まあ攻撃もそうだが、防御も相沢のダイナミックパンチを昔から毎度毎度受け続けてきたからなあ隆介は。」

「や、やめてよ!その度にあたし女の子らしくないって思ってしま
うんだから…」

舞は顔を真っ赤にしながら言った。

「(だったら最初から殴んなよ。男みたいなパワーのくせに…)」

心の中でそう呟いた。

「りゅーすーけー!」

「な、何で!」

「隆ちゃん声に出してたよ?」

「ば、バカな!」

しかし、時すでに遅しのようにだ…

「あたしが鍛えてやるよ!」

ドゴーン……!

「ぐばー……!」

隆介は天高く舞った……

「す、スゴい……」

「人間ってあんなに飛ぶもんなんだね……」

「あつう〜隆く〜ん。」

「死ぬなよ隆介……」

その夜……

「隆介……」

「涼太?」

何と涼太が家の窓のところにたっていた。

村神家・隠し部屋

「こんなところまで連れてきてどうした？」

「まあ優勝は間違い無いが一応昔みたいに戦ってみないかって思っ
てよ。」

「そうだな。何もしないはずいか…」

「じゃあお互い手加減なしだ！行くぞ『沙夜時雨』！！」

「久々に出番だ『灰塵』！！」

ヒュ……キーン！！

この戦いは2時間も続いたという…

球技大会当日…

「えー晴天に恵まれて……」

校長の長つたらしい話も終わり、いよいよ球技大会が始まった。

ちなみに優勝したクラスは賞金100万円ずつ、更に剣技で優勝したペアには賞金500万円と3年間学費免除という最高の組み合わせなので、何としても優勝しなければならなかった。

つーか賞金数百万でこの学校どんだけ金持ちなんだよ…

やれやれ…

第32話：男たちと女たちの戦い！！（前書き）

今年最後の投稿です！

来年も『隆介の羨ましき？日常』をよろしくお願いします！

第32話：男たちと女たちの戦い！！

「隆介止める！！」

「任せろ！！」

今は球技大会のバスケの試合の途中だった。

ちなみに僕と涼太と悠登は野球とバスケ、そして僕と涼太で剣技に出る予定だ。

「村神を止める！！」

「おせえ！」

あつという間に3人のディフェンスをかわしてレイアップを決めた。

「キヤー！村神くん！！」

ちなみに今叫んでいるやつらは言うまでもないが涼太のFCである。学年の女子の5割以上を占めるとか…

「ちくしょー！！何でお前らばかり！？」

「騒ぐな悠登。涼太はともかく僕は叫ばれてないぞ？」

「お前は学年のトップ5の美人女子たちを独占してるじゃねーか！？」

「独占とか言ってるじゃねー!!」

バキッと一発殴った。

「痛ったー!?!」

なるほど、馬鹿だから殴られてることすら分からないんだな…

「さて残り5分。90 - 14で僕らの勝ちが決まっているわけだがどうする?」

「おい隆介。ダンクぶちかましてやれ。」

「ダンク!?しかし目立つだろ…」

「彼女たちにいいとこ見せてやれよ!」

「わ、分かったよ…」

そして試合再開のホイッスルが鳴った。

「頑張れー隆ちゃんーん!!」

「いつけー隆介!!」

「いいとこ見せなさいよ隆!!」

「隆君頑張ってください!!」

学年トップ5の女子たちの黄色い声援を受ける。

「涼太!!」

「おらそこだ!」

涼太の3Pシュートが決まった。
残り2分弱…

「まずい!誰かカットしろ!!」

「とらせるかよ!邪魔だデカブツ!!」

「俺を舐めんじゃねー!!」

バシ!!

なんと悠登がボールを弾いた。

「まだまだ！間に合え！」

悠登はボールに向かってダイブした。

「佐々城！！決めてこい！！」

「でかした悠登！！」

悠登の空中パスを貰って一気にゴールに向かって走った。目の前には誰もおらずフリーだ。

「かましてやれ隆介！」

「うおー！！」

ガッン！！

ダンクの音が体育館中に響き渡る…

暫くの沈黙後…

「うおー！すげー！！佐々城のやつ！」

「さ、佐々城君ってあんなに運動神経よかつたんだ…」

「キヤー！ かつこいい佐々城君！！」

あちこちから歓喜の声が聞こえてくる。

「はは… 決めちゃったよ…」

「よくやった隆介。」

「涼太…」

結局試合は95 - 16と圧勝だった。

これでバスケの優勝は僕たちのクラスに決まった。
ちなみにサッカーとテニスは1回戦敗退と準決勝敗退という結果になった。

「隆ちゃんかつこよかったよ？」

「ありがとう沙耶。」

「村神君もお疲れ。大活躍だったね？」

「うんうん。1人で40点50点とるんですから。」

「はは！ まあ役に立ってよかったよ。」

「悠登も最後は誉めてあげてもいいかな？」

「マジで！？じゃあ相沢、ごほうびのキスを…ゴハ…!?」

「調子に乗るな変態男!!」

悠登よ、つくづくバカな男だなお前は…

「次は舞たちのバレエか？」

「うんうん。だから隆ちゃん？私たちの華麗な姿に見惚れててね？」

「い、いやそれより他の男子が見惚れると思うんだが…」

「他の男なんて興味ないの！隆ちゃんちゃんと見ててよ？」

「わ、分かったよ…」

「り、隆君…」

優香が心配そうな顔で見てきた。
そうか、優香は運動ダメダメだったな…

「大丈夫だよ優香。失敗してもいいから頑張るんだ。失敗しても誰も咎めないよ？」

「うん、ありがとう隆君！」

優香が笑った。

可愛いなあ〜なんて口に出したら沙耶たちに殺されてしまうので心の中にしまっておこう…

「いいぞーみんなー。」

「なかなかいい動きをしてるな。それにチームワークも良い。」

「杏華ちゃんパス！」

「オーケー！それ舞スパイクだ！！！」

「よーし！アターーック！！！」

バシン！！
ドゴン！！

「「「……………」」」

やはり舞がスパイクを決める度に沈黙になる…

いや、別にシラケてる訳ではないのだが、やはり舞は普通の女の子には無い力が備わっており、男子の顔も真っ青になるくらいである。なにせ僕はおるか、百戦錬磨の涼太ですら驚いている程だ。並外れた力なんだろうと思う…

結局舞のスパイクと杏華の華麗なサーブにより、他のチームは手も足も出れずあつという間に僕たちのクラスが優勝した。

「隆ちゃん！！！」

「だ、だから抱きつくな！！！」

「い、いやー相沢のスパイクには恐れ入った…」

「や、止めてよ！恥ずかしいから…」

「あの〜隆君？」

「優香、頑張ったな。偉いぞ？」

そう言って優香の頭を撫でる。

子供みたいで怒り出すと思ったら意外と喜んでくれた。
ふむ、これはなかなか使えるな。

「お前ら俺は無視かよ…シクシク…」

あ、そう言えば約1名忘れていた…

第32話：男たちと女たちの戦い！！（後書き）

次の更新は来年になります。
それでは皆さん良いお年を…

第33話：野球対決！！（前書き）

今年初投稿です！

皆さん今年も宜しくお願いします！！

第33話：野球対決！！

「隆介ー！ー！！一発ホームランかませー！！！」

「無茶言ってんじゃねーよー！！！」

えー、ただいま隆介たちは野球の試合に出ています。

1回戦は17-0と圧勝であったが、続く2回戦は名前は不明だが野球部のレギュラーが4人でその内の1人はエースピッチャーだ。

「早川翔。1年で野球部のエースとなり、投球は様々だがフォークモナックルも投げることで、ストリートは最高157km。

そのボールを捕るキャッチャーは中野慎也。早川と違って打率はそこまでよくはないが、反射神経はチームトップ。二人のコンビプレイで大抵のチームは潰される。」

「す、凄いな…どうせなら決勝で当たりたかったんだけど…」

「いや、ここでやつらに勝てば優勝はもらったも同然だ。今のうちに潰した方が良さだろう。」

「そりゃそうだけど…」

「両チーム整列、礼！」

「お願いします!!」

「やあ佐々城隆介と村神涼太。」

急に早川が話しかけてきた。
横には中野もいる。

「え？何で僕たちのこと知ってるの？」

「君たちは学校でも何かと有名だからね。佐々城は女たらしとか5股6股とか噂になってるからね。」

「そうそう！いやー佐々城君てかなりのやり手なんだなあと俺感心しちゃったよ!!」

「僕も。」

「ちがー！うー!!僕は女たらしでも5股6股でもない！友達だよ。」

「まあ何でも良いよ。僕たちは君たちと戦えるのを楽しみにしてたから。」

「俺も俺も！一度お前らの実力見てみたいから。」

「そりゃ光栄だな。それじゃ遠慮なしに行くぜ隆介！！」

「うん…（大丈夫なのか…？）」

「プレイボール！！」

とうとう試合が始まった。周りを見渡すと試合がない生徒や先輩達がざっと5、600人はいた。やはり野球部のレギュラーと陰の実力者の隆介達を見てみたいのだろう。

「1番サード……君」

1番バッターが打席に立った。

「さーて野球部のエースの力どれ程のものか…」

ザッ…

ビュー！！
スパーーン！！

「ストライク！」

「！速い！！！」

「これは、かなりの強敵だな…」

結局1番2番は三振に終わった。
そして

「3番キャッチャー佐々城君。」

「頑張れ隆介！」

「おう！」

打席に立ちバットを構えた。

「隆介ー！！三振したらボディープローかますから！」

「隆ちゃん特大ホームランー！！！」

「あんなならでできるよ隆ー！！！」

「隆君ファイトです！」

「み、みんな…」

「いやーモテモテだね佐々城君！」

「いや、あれはからかわれてるだけだから…」

「そうか？まあ良いや別に。」

ビュー！！

ズパーン！！

「ストライク！」

「やっぱりはえーな…」

「（今ので151kmか…さすがの隆介でも結構厳しいか…）」

ビュー！！

「チツ！」

キイイイーン！！

「ファール！」

「（今のを当てたか、さすがは佐々城隆介侮れんな…）」

「おほ！こりゃ面白くなってきたぞ！」

ビュー！！

キイーン！！

「オーライ！」

パシ！

「アウト！チェンジ！」

結局レフトフライに終わって次は早川達の攻撃だ。

「へへへ。村神つっても野球は素人だから楽勝だって。」

「油断するな。何が起きるか分からんぞ。」

「大丈夫だって！」

「一番ショート……君」

「どっからでも来いよド素人！」

ビュッ!!

ズパーン!!

「なっ!？」

「ストライク！」

「どうした？ド素人のボールも打てんのか？」

「へへ…わざとだわざと…」

「そうかい？じゃあ次行くぞ！」

ビュッ!!

ズパーン!!

ビュッ!!

ズパーン!!

「ストライク！バッターアウト!!」

「ば、バカな…レギュラーの俺が一球も打てなかったと!?」

「さすがは村神涼太。今のストレートを155kmで投げるとは…
ふふ、だから余計に打ちたくなる。」

「3番キャッチャー中野君。」

「キャッチャーからか。全力で行くぜ!!」

「来い!」

ビュ!!

ズパーン!!

「!さつきより速くなってる!?!」

「お前らが相手だからこれぐらいやっとなきゃな!!」

「良いね良いね!面白いよ!!」

ビュ!!

キイイン…

「ファール!」

「いってー、腕が痺れるよ。」

「とどめだ!!」

ビュ!!

ズパーン!!

「またさらに速くなった!!」

「今の球…スピードガンが壊れてなければ161kmだった…まさか高校生で160kmを超える人物がいるとは。村神涼太、ますます勝ちたくなったよ！」

「いってーなお前…」

「まだ始まったばかりだ。本番はこれからだぞ！」

「ああ分かってるさ！」

まだ1回裏が終わったばかり。

これからが本当の勝負になってくるだろう。
果たして!?

第34話：敵チームの秘密兵器！！

「す、すげえ！甲子園の決勝戦みたいだ…」

「どっちも頑張れー！」

「村神くーん！こっち向いて！！」

一気に周りがヒートアップする。

「な、何なんだこの盛り上がりようは…」

「はは、甲子園にでも来てるみてえだ。」

「ギャラリィを白けさせんためにも一発かましてこい！！」

「おうー！！」

「4番ピッチャー村神君。」

「うっしやー！！」

「来たか村神…」

「さーて村神君の実力見せてもらつよ？」

「しっかり目に焼き付けておけ!!」

ザッ…

ビュ!!

「む!!」

ズパーーン!!

「ストライク!!」

「また速くなった!!…159km!!??」

隆介がスピードガンで測つたら159kmと表示されていた。

「また速くなりやがって…しかも自己記録更新じゃねえか…」

「君や佐々城のような強い人をずっと探していたんだよ。」

「それはどうも。」

ビュー！！

「これは…ナックルボール!?」

キーンーン！！

「ファール!」

「よく気が付いたな?」

「ああ、少しぶれてたしあの不規則な落ち方はナックルしかないだ
る。」

「(だがそれを当てるとはな…この男、底が知れんな…)」

「これでとどめだ!」

ビュー！！

「スライダーか…甘い!」

キーンーン!!

「なっ…!」

「はは、とうとうヒットを打たれたか…」

ボールはセンターを抜けて落ちた。

「すげー…!!さすがは村神だな。」

「キヤーー村神君カッコいい!!」

「はは…どうも…」

涼太は苦笑いをしながら手を振った。

「（だが涼太がヒットを打っても他が打たなきゃ意味がない。やっぱりホームランしかないか…）」

「やられちゃった…」

「はは、まあ気にするな!村神君だからしょうがないって。あの二人を押さえれば点を入れられることはないと思うから。」

「ああ。村神涼太、やっぱり勝ちたいよ。」

「その意気だ！」

「5番セカンド変た…時雨君。」

「おいー！！今変態って言いそうになっただろ！！！」

「つーか悠登セカンドだったんだ…」

「俺も知らなかった…」

「何忘れてんだ！！俺そんなに影薄いか！？」

「「ああ」「間0.2秒

「もういいよ…どうせ俺なんて…」

「分かったからさっさと行け。」

「三振してもかまわんが変に目立とうとしたらぶっ殺すからね？」

「ひいひい…ちゃんと真面目にやります。」

「よろしい。行ってきなさい。」

「はいー！…！」

途中でタイムをとった涼太は悠登に威圧をかけ、悠登は急いでバツターボックスに立った。

「何であんなに威圧かけたんだ？」

「恥にならないのもあるが、あいつああ見えて筋力はめちゃくちゃあるんだ。多分俺やお前より上だ。」

「バカな！？お前ベンチプレスしたとき120kgだったじゃん。僕は75kgだったけど……」

「そうだ。だがあいつは155kgだ。おまけに握力は俺は81だったがあいつは94だ。」

「マジかよ……でも僕知らなかったよ？」

「そらそうだ。誰も見向きもしてないからな。俺以外は。」

「どこまでもかわいそうな奴……」

「だからあいつもやってもらわんな。あいつは貴重な戦力だ。」

「（驚きの連続で頭がついていけん……）」

「お？なんかでかいのが来たな。」

「来い！」

「（見た感じただの木偶坊ってわけでもなさそうだな…）」

ビュ！！

ズパーン！！

「ストライク！」

「は、速い…！」

ビュ！！

ズパーン！！

「ストライク！」

何やってんだよーっとクレームが飛んだり笑われたりしているが、
中野の反応は違っていた。

「（なんつースイングだよ。ここからでも風圧が当たるとは…これは当たったらマジでホームランが出るかもしれん…）」

「ただデカイだけか…興奮だめだな。」

「待て！無闇にストレートを投げるな！」

ビュ…！！

「くそー…！！」

キーン…！！

「何！？」

ドン…

「ファール！」

「あつぶねえ…」

「くそ、あとちよっと左だったら…」

「涼太、悠登の奴…」

「ああ。あれでもかすった程度だ。当たれば間違いなく空の果てまで飛んでいくぞ。」

「あいつ、何かやらかすかもしれんな。」

「同感だ！」

「ただでかいだけじゃなかったんだ…」

「あいつに当てられるとホームランがでちまう。変化球だ。」

「了解！」

ズパーン！！

「ストライク！バッターアウト！」

「くっ…」

「危ない危ない…」

「気にするな悠登。」

「結局俺は打てなかった…」

「大丈夫だって。俺たちもフォローしてやるからよ。」

「お前ら…」

結局そのまま残りの二人も三振に終わり攻守交代となった。

「4番ピッチャー早川君。」

「頑張れ翔。一筋縄ではいかんぞ?」

「おう行ってくるぜ!」

バッターボックスに立つ。

「待ってたぜエースピッチャー。」

「来い村神!さっきの借りを返すぜ!」

ビュ!!

ズパーン!!

「ストライク!」

「ぬう…速いな…」

「そう簡単に打たせると思うなよ？」

「だが君には一つ弱点がある。」

「何？」

「ピュ…！」

「キーン…！」

「野球は素人だから仕方ないが、君は変化球の時は必ず高めになるんだよ。僅かにだけどね。」

「くっ…（さすがはエースピッチャー。もう見抜いたか…）」

「涼太…」

ヒットになったが、この後涼太は5番6番を三振にした。

「7番サード上条君。」

「さーて君たちに彼をうちとれるかな？」

「上条だと！？」

「(涼太の奴何驚いてるんだ？まさかこの上条って奴は上手いのか？)」

ビュー！！

「…甘い。」

キーン！！

ドン！！

「なっ！？ホ、ホームラン！？」

何と上条と言う男は涼太のボールを簡単に打ち、ホームランになった。

だがその後の選手は三振に終わって攻守を交代した。

「涼太！何だよあいつは！？」

「あいつ化け物か！？あんなのが存在するのによ！？」

「忘れてたよ…高校生の中では日本一の打率とホームラン数を持つ男、上条光佑の存在を…」

「何だと！？」

謎の男、上条光佑の登場により2・0となってしまうた。
果たして上条とは一体何者なのか!?
次回に続く…

第35話：ついに決着！！

「上条光佑。182cm 86kg。平均打率9.46 一試合の平均ホームラン数5本。並外れたパワーとそれに合わない身体能力でいくつもの全国クラスのチームを潰した男だ。」

涼太がパラパラと自分専用のマル秘ネタ帳をめくりながら説明した。

「打率9割！？あり得ねえだろんなこと！！」

「そうだな。だがあいつならやりかねないな。あの人並外れた体格とオーラ。タダ者じゃねえって。」

「どうする涼太？」

「止めるしかねえだろ。あいつを止めない限り俺たちに勝利は無い！」

「…そうだな。やろうぜ涼太！」

「じゃあ！俺もやる気が出たぞ！！」

一気にチーム全体の士気が上がった。

そして試合が進みまたしても来た。

「7番サード上条くん。」

「来たか上条！」

「涼太止めるぞ!!！」

「おう!!！」

バッテリーボックスに上条が立った。

「次のホームランで止めだ。」

「上等!!！」

ビュ!!！」

「!!!!！」

ズパーン!!！」

「ストライク!!！」

「速くなったのか…」

ビュ！！

ズパーーン！！

「ストライク！」

「どうだー！」

「さっきよりマシにはなったがもう見切った…」

「へっ！今ので全力と思うなよ？」

「何？」

ビュー！！

「甘いな。顔面にぶちこんでやる…」

キーーーーーン！！

バシィー！！！！

「俺にパスしてくれてありがとうとよー！」

「バカな…」

何と涼太は素手で上条のボールをキャッチした。

「すげー！！！」

「さすがは村神だ！！！」

「キヤー！村神くーん！！！」

周りがまた更に盛り上がった。

「ははは。やりやがったな涼太。」

「おう！だがなかなか痛かったな。けっこう手が痺れたぜ…」

手をふりながら涼太は苦笑いと言った。

両チーム共に一步も譲らずに試合が進み、いよいよ9回表に突入した。

「いよいよ最後か。」

「何としてでも点を入れるぞ!」

「そうだな。佐々城からだろ? 頑張れ!」

「おう!」

「3番キャッチャー佐々城くん。」

バッターボックスに立った。

「佐々城、勝たせてもらうよ? 君たちにはかなり苦戦したけどこれで終わりだ!」

「どうかな? 勝負に100%は無いんだぜ?」

「行くぞ!」

ビュ!!

スパーーン!!

「ストライク！」

「速いな…」

「なあなあ村神、今のスピードどれくらいだったんだ？」

「160kmだな。」

「マジかよ！？佐々城ヤバいぞ！」

「あいつなら打てるさ。あいつはやるときはやる男だ。もちろんお前もな。」

「あ、ああ…」

ビュー！！

ズパーーン！！

「ストライク！」

「くっ…」

「もう後が無いぞ？」

ビュー…！！

「僕を舐めるな——！！！！」

キーーーーン！！

「なっ！？」

「ファール！」

「危なかった……」

「くそ……僕じゃやっぱり無理か……」

諦めかけたその時

「隆ちゃーん！！負けるな！！」

「沙耶……」

「諦めるなんてあんたらしくくないぞ！！」

「舞……」

「隆なら必ず打てる！あたしたちが応援してるんだから！！」

「うん。隆君は何物にも負けない力を秘めてるから！！」

「杏華、優香…」

「隆介！！俺たちは信じてるぜ！！」

「負けるなよ佐々城！！」

「涼太、悠登…」

「（ん？急に変わったな。こりゃ油断ならないな…）」

「何かよく分からんけど次で終わりだ！」

「…終わらないさ。」

「何？」

ビュ！！

「速いな。だけど打てるよ。何故なら…」

キーーーーーン！！！！

「何！？」

「はは、やられたなこりゃ…」

「みんなが僕を応援して僕に力を与えてくれるからさ。」

ドン！！

ボールは綺麗にセンターを通り抜けそのままホームランゾーンに入った。

うおーーーー！！！！と周りがますます騒がしくなる。

「すげえ！！あの早川相手に……」

「佐々城隆介、あいつそんなにすごかったのか？」

「佐々城君かっこいい！！」

「とんでもないやつが村神の他にもいたとは……」

「隆ちゃん、よかったね？」

「やっぱりあなたはそうでなきゃ。」

「隆、かっこよかったよ？」

「うん。もっと隆君好きになっちゃった。」

「ナイス隆介！！」

「すげえな！今の162kmも出てたのに…」

「そんなに！？もはや世界記録じゃねえか…」

「けどみんなの応援があつたから打てたんだよ。僕だけの力じゃない。」

「言うようになったじゃねえか。それでこそ俺の親友だ！」

ハイタッチしながら涼太は言った。

「4番ピッチャー村神くん。」

「しゃー！悠登俺たちもかつ飛ばすぜ！！」

「おう！！」

バッターボックスに立った。

「もう誰にも打たさん！！」

「バカ！落ち着け！！」

ビュー！！

「焦って球が浮いてるぜ？もらったー！！」

キーーーーン！！

「行けるか！？」

「いやダメだ。距離が足りない……」

「くそ……」

「5番セカンド変態くん。」

「ええーい！この際変態だろうがなんだろうが構つかー！！」

明らかに確信犯のアナウンスをスルーし、バッターボックスに立った。

ビュー！！

ズパーーン！！

ビュー！！

ズパーーン！！

だが早川も負けてはいなかった。

あっという間に悠登を追い込んだ。

「くそ！佐々城に偉そうなこと言っておいて…」

「諦めるな悠登！！お前も僕を応援してくれただろ？」

「そつだ、まだ諦めるには早いぜ？お前の自慢のパワー見せてみる
」！」

「お前ら…ああ！当たり前だろ！！」

「これで終わりだ木偶の坊！！」

ビュ…！！

「オラ…！！！！！！！！！！」

キーーーーン！！！！

「何！？」

「これは、時雨君を甘く見てたね…」

球はグラウンドを軽々と越えて場外ホームランとなった。

「ついに…」

「ついに…」

「ついに…」

「「「逆転だ——！！！」」」

ついに3 - 2と奇跡の逆転をした。

そしてこの日の9回裏。

「いいか…！何としても勝つぞ…！」

「「おお…！」」

「3番キャッチャー中野くん。」

「行くぜ!!」

「来い!!」

ビュ!!

ズパーン!!

「おいおい。こりゃ俺じゃ打てないな。もはや反射神経でどつなるレベルじゃないし……」

ズパーン!!

「ストライク!バッターアウト!」

「まずは一人目!」

「4番ピッチャー早川くん。」

「舐めるな!僕が負けるわけ無いんだ!!」

「甘いんだよ!!」

ズパーン!!

「ストライク！バッターアウト！」

「そうやって己の力を過信慢心してる限り俺には勝てねえ！！」

「……………」

この後涼太はわざとフォアボールにして上条までまわした。

「7番サード上条くん。」

「わざわざ俺までまわすとは……………」

「来い！ケリをつけてやる！！」

「いいだろっ…」

「……………」

「……………」

ズパーーン!!

「ストライク!」

「164km! はは、あいつすでに世界記録抜いてるよ…」

ビュ!!

ズパーーン!!

「ストライク!」

「なるほど、見切ったぞ!」

「何!?!」

ビュ!!

キイーーン!!

ビュ!!

キイーーン!!

ビュ!!

キイーーン!!

このファールは20回ほど続いた。

「ぜえ、はあ、なかなかしつこい…」

「はあはあ、簡単にアウトになるかよ…」

「だが、最後に勝つのは…」

「勝つのは…」

「俺だ!！」

ビュ!!

「フォーク、これなら行ける…ん?何か変だ…」

「へっ!んな小細工しねえよ。最後はストレート勝負だ!！」

「ふっ、俺の負けか…」

ズパーーーーン!!!!

グラウンド中にボールがグローブに入った音が響き渡った…

「調子の良いやつめ！」

隆介たちは喜びあい、胴上げをした。

「僕たちが負けるなんて……」

「仕方ないさ。あの3人を甘く見ていた俺たちが悪いんだ。特に時雨くんだな。」

「俺たちもまだまだだな。あいつらに勝てるくらい強くならなければ……」

「お前今日はエライ饒舌だな？」

「ふっ気のせいだ……」

「両者整列。礼！」

「ありがとうございました!!」

選手が挨拶をして握手をした。

「強いなお前ら。どうだ？野球部に入らないか？お前らがいたら甲

子園優勝間違い無しなんだが。」

「勘弁してくれ。僕もうヘトヘトでしばらく野球やりたくないよ…」

「「右に同じ！」

中野が勧誘したが、隆介たちは丁寧にお断りした。

「おっしゃー！このまま一気に優勝するぜー！」

「「おうー！」

勢いに乗った隆介たちは続く準々決勝を22 - 0、準決勝を25 - 0で圧勝しそして

ビュー！！

ズパーーン！！

「ストライク！バッターアウト！ゲームセット！」

「やったー！！！」

「優勝だー！！！」

「当然よー！！！」

決勝も苦戦することなく19 - 0で圧勝し隆介たちのクラスが優勝した。

しばらくして…

「隆ちゃん！！」

「沙耶！みんな！」

沙耶たちが駆けつけてきた。

「隆ちゃん凄くかつこよか…」

「ったよー！！と言って抱きつこうとしたが」

「隆介様！！」

「うお！？」

何者かが隆介を抱き締めて沙耶を遮った。

「か、楓さん？」

「はい隆介様。私ずっとあなたを見ていました。あなたの凛々しい姿を見たらますます好きになってしまいましたわ！！」

そう言つて楓は隆介の顔をを自分の胸に押し付けた。

沙耶や優香ほどではないがそれなりにスタイルがいいので隆介は顔を真っ赤にした。

「わ、分かりましたから離れてください！！」

「むう〜もう少し抱きつきたかったですか…」

しびしびと隆介から離れた。

「全く…ん？」

ふと隆介が横を見ると沙耶たちが黒いオーラを出しながらヒソヒソと話し合っていた。

「やっぱり鞭だけじゃ足りないよ。」

「あたしは隆介相手なら素手で十分だわ。」

「あたしも素手でいこうかな？」

「私はろうそくを使わなきゃ。」

……丸聞こえなんですけど……

ああ、今日が僕の命日かな……？

こうして野球が終わった。

残るはあと一つ。

「来たな隆介。」

「うん……」

「剣技に出場する選手は指定場所に集まってください。」

「行くぞ隆介！」

「ああ！」

「頑張つてね二人とも？」

「無理は禁物よ？」

「ガツーンとやっちゃいなー！」

「応援してるから！」

「行ってこいー！」

「「おうー！」」

沙耶、舞、杏華、優香、悠登から激励してもらい隆介たちは指定場所に向かった。

「エントリーされるペアはこの紙に名前とクラスを書いてください。」

手続きを済ませた隆介たち。

あとは試合を待つのみだ。

???

「村神涼太と佐々城隆介ペアが出ましたか…」

「ふっ楽しくなりそうだな。」

「ですね。俺も過去に村神に喧嘩で負けましたからね。」

「村神はもちろんだが佐々城もかなり手強いぞ？何せこの俺が見込んだ男だからな！」

「はっはっは！そりゃ手強そうですね！」

「だろー？だーはっはっは！！」

隆介と涼太をよく知っている謎の二人。

まあ多分分かっているとは思っけども正体は後ほど明らかに！

そして遂に『剣技』が始まった！
二人の運命は！？

第37話：人の恋路を邪魔する奴には神の裁きを！！

「こ、これは…」

「意外と多いな…」

会場を見ると全生徒約1500人＋近所の暇人たちで埋めつくされていた。

「これは…あれだな。見たことは無いけどローマのコロッセオのような感じじゃないか？」

「だな。会場はあんな本格的では無いが、造りと観客で大体そんな感じになってるな…」

などと言って呆けていた…

選手控え室

「意外と人が多いな…」

「そうか？こんなもんだろ。」

全員はいないと思うが、ざっと50人はいた。
筋肉質の男にイケメンに可愛い女の子とさまざまだった。

「なあ涼太。僕たち何試合目に出るの？」

「第3試合だ。相手は弱いから問題ない。」

「どんな奴？」

「ほら。あそこで下品な笑いしてる奴ら。」

指を指す方向を見ると茶髪と黒髪のちよいイケメン二人がいた。
すると、二人はこちらの視線に気付いたのか近づいてきた。

「ようお二人さん。お前らが俺らの対戦相手だってな？」

「へへへ。こりゃ楽勝だな。」

「何？」

「知ってるぜ？完全無欠の村神涼太と謎のダークホース佐々城隆介
だろ？」

「いや、ダークホースって…」

いつの間にそんな異名がついたんだ？と心の中でツッコんだ。

「特に佐々城。お前零恋の美女トップ5を独占してるみたいじゃねえか？」

「またそれかよ。別にそんなつもり無いし…」

そう言ったら相手の茶髪がキレた。

「おい調子に乗んなよコラ！お前みたいな凡人面が独占するなんざ百年早えーんだよ！」

「そうだよ。だからさ、みんな俺たちにくれよ？このイケメンの俺たちが大事に扱ってやるからよ。」

好き勝手に言うナルシストコンビ。

もはや言ってることが無茶苦茶すぎて怒る気力も出なかった。

「それはつまり彼女たちの恋路を邪魔するということか？」

「はあ？何言ってるんの村神？女はみんなこんな奴より俺らみたいなイケメンに惚れるんだぜ？邪魔するどころか手伝ってんだぜ！」

人をバカにしたように笑うナルシスト。
僕もさすがにカチンときた。

「いいだろう。ただし、僕たちに勝てたらな？」

「いいのかそんな簡単な事だよー？」

「簡単だな。」

「いいぜ。もし俺らが負けたら大人しく引き下がってやるよ。まあ万に一つもあり得ねえけどよ！」

「それだけで済むと思うなよ？」

「へーへー分かった分かった。」

ナルシストたちは笑いながら去っていった。

「涼太……」

「ああ。殺しはしないが徹底的に叩きのめしてやる！！二度とあんな減らず口を叩けねえようにな。」

「僕もだ。舞や沙耶たちをあんなやつらには絶対渡さない！」

「あいつらは女遊びが激しいで有名だからな。何十人も女の人を

手にかけて、拳げ句の果てには次々と捨てていったやつらだ。」

「外道め……」

あいつらを完膚無きまで叩きのめしてやると涼太と誓いあった。

会場

『さあ今年も来ました！毎年怪我人が出るが、球技ではないが、人氣が絶えない零恋名物の『剣技』がついに来ました！実況は私2年11組放送部部長の三狩谷はるかでお送りします！！知らない人は覚えてね？そして特別ゲストとして我が零恋のトップ5美女の神代沙耶さん、相沢舞さん、柊優香さん、柊杏華さん、神崎楓さんの5人をお呼びしています！！』

「……どうも……」

「あつう〜恥ずかしいよ……」

「何で私がこんなところに……」

うおおおー！！！と零恋の男子は少ないが力の限りに叫んだ。
なるほど、より盛り上げるために呼んだのか。
しかし、この歓声から彼女たちがどれだけ人気があるのかよく分かる。

『ここでゲストに聞いてみよう！！ズバリどのコンビが優勝すると思いますか？』

「……隆（介）（ちゃん）（君）（様）と村神（君）（コンビ）ですわ）！！！！」

『そ、即答ですね？しかし、今回の優勝候補は彼女たちが言った佐々城&村神コンビ！！という試合をするか楽しみです！！続いて剣技のルールを説明します！！』

ルールはいたってシンプルで、場内で2対2で戦い、先に相手二人に気絶、場外、降参させれば勝利です！！1回戦、2回戦、準々決勝、準決勝、決勝となり、最後に優勝したコンビはスペシャルバトルをすることになります！！相手は残念ながら私も知りません！！さあいよいよ始まります！！男も女も関係無し！！ただ強い人が勝つサドンデスバトルの『剣技』が開幕です！！』

「ついに始まったか…」

「なに、1回戦は雑魚だ。気楽に行こうや？」

「そつだね。」

『さあ行きましょう！！第一試合目は…』

第一試合目が始まった。

『さあどんどん行きましょう！！続く第三試合目は優勝候補の1年2組佐々城隆介&村神涼太コンビ！！
対するは昨年惜しくも準々決勝で敗れた2年7組佐山宏&真島祐希コンビ！！
方や優勝候補、方や強豪！！果たしてどうなるか？試合開始！！』

試合が始まった。

「ようお二人さんよう。負ける覚悟はできたか？」

「挑発に乗るな。」

「ああ。」

「どうした？怖じけづいたか？ほら来いよ。」

「そうか…」

「「なら遠慮なく！！！！」」

「シャ！！」

「えっ？」

「き、消えた！？」

「こっちだバカ。」

「いつの間にも後ろに…ぐば！！」

すかさず背後に回り込み隆介は蹴りを入れて場外に落とした。

「祐希！！」

「よそ見してる場合か？」

「バカな！？何だその速さは！？」

「説明してやる義理はない。消えろ。」

ドガン!!とボディーブローをかました。

『あ、あっけなかつたのですが勝者佐々城&村神コンビ!!』

うおおおー!!とまたしても響きわたる。

『いやーすごかった!!皆さんはどつでしたか?』

「「当然予想通り!」」

「隆と村神があんなやつらに負けるはずがないから!」

「うんうん。」

「まあ、そついでとですわ。」

『皆さんはよほど信じていたんでしょう!!素晴らしい試合でした
』

「うう……」

「っ、強い……」

「やれやれ……さっきまでの威勢はどうした？」

「うるせえ……」

「約束は守ってもらおうぞ？」

「へっそんなの知らねえよ。」

「まあそう言おうと思ったがな。」

二人は武器を構えた。

「お、おい。ちょー！」

「待て待て！話せば分かる！」

「人の恋路を邪魔する奴は……」

「神の裁きを受けるがいい……！」

その直後に二人の断末魔はかなりの範囲まで響き渡ったと言っ……

第38話：相手はファンクラブ会長！？（前書き）

長らく放置してすいませんでした。

大学で忙しくてなかなか書く暇がありませんでした…

第38話：相手はファンクラブ会長！？

あの二人の断末魔が響いた後：

「ねえ舞ちゃん、今悲鳴が聞こえなかった？」

「そう？あたしは何も聞こえなかったけど…」

知らぬが仏よ…

控え室

「まずは初戦突破したな涼太！」

「まあな！あんな雑魚どもに負ける俺たちじゃないし、本番はスペシャルバトルだからな。」

「相手は分かるのか？」

「まあ大体予想はつく。すぐに分かるだろ。」

この後隆介たちは2回戦も秒殺して準々決勝まで勝ち上がった。

『さあいよいよ準々決勝！選手はかなり少なくなってきたけど盛り上がっていきましょー！！』

準々決勝第一試合は佐々城隆介・村神涼太ペアVS匿名希望ペア？となっております。しかし、名前を隠す必要なんてあるのでありませんか？まあとにかく両コンビ入場です！！』

両コンビが入場する。
すると

「佐々城隆介！やっと会うことができた。今日貴様を倒し、美女を救う！」

「その通りである！大人しくやられるがいいのである！」

次々と訳の分からないことをしゃべる相手コンビ。

「あゝもしかしてお前たちって沙耶たちのファンクラブ？」

「正解！我々二人は神代沙耶・相沢舞ファンクラブの会長だ。だから名前を知られるわけにはいかない！！」

「あっそ…」

「ぬぬ…何と態度の悪い。叩きのめすのである！」

「涼太、この際だからファンクラブ一つ残らず潰していこうか。」

「そうだな、何かうざったいし。」

『さあ準備は整ったでしょうか？それでは試合開始！！』

試合が始まったその瞬間！

ドガア！！！！

「ぐは！？」「

何故か疑問系で声をあげて場外に落ちた。

『い、一瞬でした…私もまともに見ることができませんでした。勝者佐々城隆介・村神涼太ペア！！圧倒的な実力で準々決勝を一瞬で突破しました！！』

わーーーーー!!!と一気に盛り上がる。

「すげえ!あいつらすげえ!!」

「村神くーん!!」

「キヤー佐々城くんこっち向いて!!」

涼太はもちろんのこと、隆介もこれでファンがかなり増えたみたいだ。

控え室

「ひい!こ、殺さないで下さい!」

「ならば今すぐ解散しろ。じゃないと…」

「まあまあ落ち着きなって涼太。お前が言ったってしょうがないだろ?」

「分かりました。解散します。」

「えっそんな簡単に?」

「いや、まあ正直もう彼女たちは想い人がいるから薄々は無理と分かっていたのである。でもやっぱり俺たち彼女たちが好きだからこんなことやってるだけである。」

「だから君に彼女たちを頼みたい。必ず幸せにしてくれることを。」

初めて真顔になったファンクラブ会長たち。

「分かってるよ。だから心配しなくて大丈夫だから。」

「分かった。おい、至急それぞれのファンクラブ会長に今のことを伝えてくれないか?」

「分かった。」

こうして無事(?)に沙耶たちのファンクラブは解散した。
しばらくして…

「暇だな。まだ試合まで後30分以上あるし…」

などと隆介がぶつぶつ言っている

「こ、これは!？」

「どうした涼太?急にでかい声出して。」

「い、いや…次の準決勝の相手なんだが…」

「まさか、お前よりも強いやつが!?いや、そんなやついないか。」

「いるわ!!お前は俺をなんだと思っていやがる!?まあいい、次の対戦相手は1人はよく分からないが、もう1人はお前も俺もよく知ってる人だ。」

「嫌な予感がするんだが…」

「そうだな。特にお前が危険だな。」

「それいったいどういうこと!？」

「ま、まあすぐに分かるさ…」

果たして準決勝の二人がよく知る人とは!!

そして決勝、スペシャルバトルの相手とは!?

次回とその次の回でそれが明らかになる(はず)!!

第38話：相手はファンクラブ会長！？（後書き）

次回からはもう少し早く書くよう努力します…

第39話…ついに強敵あらわる…！…そして…（前書き）

やっとテスト終わって再開できます。
長らくほったらかしですいません…

第39話：ついに強敵あらわる！！そして…

『さあいよいよ準決勝です！！果たしてどのような試合になるのでしょうか！！まずはここまでの試合を全て秒殺で終わらせた佐々城隆介&村神涼太コンビ！！』

ワァー……！！
キヤァー……！！

「相変わらずすごい歓声だな…」

「はは、なんか少し恥ずかしいや…」

『対するはその容姿に似つかわしくない実力で次々と勝ち進んだ村神陽菜&豊崎有紀コンビ！！』

うお……！！

「ありがとう。」

「さして佐々城ってのはどんな男かなあ？」

……

「ええ……！！……？？」

「な？よく知ってる相手だったろ？」

「涼太のお姉さんが相手なんてやりづらいつて…」

「姉貴は大して強くはないが横にいる豊崎先輩はかなりの実力者で居合は全国でもトップクラスらしいぞ。」

「や、やばくない？」

「そうだな今までみたいにいきそうにはないな。」

などと話していると陽菜と髪がポニーテールで陽菜に劣らない容姿をした豊崎から話しかけられた。

「久しぶりね隆介くん。今日はお手柔らかにお願いね？」

「は、はあ…」

「何々？あんた佐々城の知り合い？」

「涼太の友達だからね。隆介くん私好みで可愛いの。あんたのタイプでもあるわよ？」

「そう？とてもそうには見えないけど。」

ゾクっ…

何だろっ…今ものすごい悪寒がしたんだが…

『さあ準備はいいでしょうか!! それでは試合開始!!』

シャツ!!

「!!!!」

ズバ!!

「ぐっ!!」

「隆介!!」

試合開始と同時に豊崎が得意の居合で斬りつけてきた。咄嗟に反応したが、間に合わずに右肩を斬られた。

「やるね。あたしの居合に反応できるなんて」

「いつてー。スピードが半端じゃないな…」

「隆介落ち着け!動きを見てたら一生たっても終わらない。感じとるんだ。」

「だったら手伝ってくれよ…」

「俺はすでに姉貴を倒したから。」

「は？」

隆介が涼太の後ろを見るとすでに陽菜は場外に落ちていた…

「いつの間に!?!」

「よそ見をしてていいのかな」

ヒュ…!!

「うお!?!」

間一髪で斬撃を避けた。
と思っただが

ズバババ!!!

「がっ!?! (ば、バカな!ちゃんと…!)」

「『避けたはずなのに』とか思ってる? 甘いよ。あたしの斬撃は刀

を振ったときの風圧も斬撃となる。カマイタチみたいなものかな」

「（やるな。さすがは豊崎先輩。居合の達人は伊達じゃないな…）」

「よし…」

隆介も体勢を立て直して構えた。

「僕だってやられっぱなしじゃないですよ…！」

シャ…！

隆介は突撃した。

特別席

「あの先輩ものすごく強いよ…」

「豊崎有紀の居合は全国トップクラスです。まさか剣技に出ているとは。」

「あれ？神崎先輩あの人を知ってるんですか？」

舞が質問した。

「ええ。以前勝負をしましたら圧倒的な実力差で敗れましたから。」

「神崎先輩ですら負けるとなると隆も相当やばいんじゃない?」

「あつう〜どうしよう〜。」

などと言っていると

「大丈夫。隆ちゃんは負けないよ?隆ちゃんの強さは私たちが一番知ってるじゃない。私たちが信じないで誰が信じるの?」

「沙耶…」

「そうだったね。」

「何てバカなことを言ってたんでしょ?」

「隆君を信じます。」

みんなそれぞれが隆介の勝利を信じた。

試合会場

キーン！！

ブン！！

シャー！！

チュイン！！

ドガン！！

長い攻防戦が続いた。

ワァー！！！！

観客の歓声も相変わらずだった。

「だいぶ動きが変わったね？やるじゃない」

「女の子にそう易々と負けるわけにはいきませんから。」

「……あたしのようなやつを『女の子』って言うてくれるんだ……こんな男みたいな強さと性格を持つやつを……」

「え？当たり前じゃないですか？どう見たって女の子でしょ？」

「そっか……」

「（一体どうしたんだ？）」

この後もしばらく続いたが隆介はあることに気付いた。

「（やはり居合は厄介だな。刀をどうにかしなければ…刀？そう言えれば豊崎先輩が持つてる刀は仕込み杖だよな？確か…）涼太、仕込み杖って携帯に便利な分強度はほとんどなかったよね？」

「（ようやく気付いたか…）ああそつだ。だから簡単に折られない居合だと厄介なんだよ。」

「そつかそついうことが。」

ようやく攻略法を見つけた隆介。

「どうしたの？急に笑顔になって。何か思い付いた？」

「はい。あなたの唯一の攻略法を。」

「そつ。じゃああたしに見せなさい」

「言われずとも！」

「シャー！！」

「（相手の刀を抜く瞬間を見て…）そこだー！！！」

ギーーーーン!!

ブシューー!!

「がは!! けっこう今のは効いたな…」

成功はしたが隆介は斬撃をモロに食らって体から大量の血が流れている。

「残念だったね。次で終わりよ」

「あなたがですよ?」

「シャ!!」

「(これでおわ…えっ? 刀身が無い!? まさかさっきの攻撃で…)」

「それが居合の、あなたの唯一の欠点ですよ? 仕込み杖は強度は無いですから。」

「最初から刀狙いだっただのね?」

「はい。そして僕の勝ちです。」

ニコツと笑いながらそう言った。

ドキー!

「(あれ?何だろこれ...)」

ドガア!!!

隆介が殴り付けて豊崎は気絶した。

『す、凄まじい試合でしたが佐々城隆介&村神涼太コンビ辛くも勝利し決勝進出です!!!』

ウオーーーーー!!!

キャーーーー!!!

会場はますますヒートアップした。

特別席

「やっぱり隆ちゃんの勝ちだよ。」

「さすがね隆介。」

「あの豊崎に勝つとはさすがは隆介様です。」

「すごいよ……」

「隆君カッコいい……」

控え室

「うん……」

「あつ気が付いた有紀？」

「陽菜？あたしは……そうか負けたんだ。」

「仕方ないよ。隆介くんだもん。」

ガチャ……

隆介と涼太が入ってきた。

「気が付きましたか豊崎先輩？」

「うん、うん……」

「すみません、本気で殴り付けてしまっ…」

「良いのよ。あんたはあたしに正々堂々戦って勝ったんだから。」

「ですが…」

「本当に優しいねあんたは」

「そっでしようか？」

「そっよ。だ・か・ら。」

ガバ！

ムニユ！

豊崎は隆介の顔を自分の胸に押し込むように抱き締めた。

「むぐぐ…」

「今日からあたしの彼氏になりなさい」

「「なっ!?!」「」

涼太と陽菜は驚き、陽菜は反論した。

「ちょ、ちょっと有紀！何勝手なこと言ってるのよ!?!」

「だってあたしこの子に心奪われたんだもん。あたしより強いし優しいししかも抱き締められたくらいで顔が真っ赤になってるんだから。超可愛い！！めっちゃあたしのタイプだよ」

「そ、そうだったんですか…」

「しかも佐々城、いや隆介はあたしのことを唯一『女の子』って言うてくれたの。あの言葉から胸のドキドキが収まらないわ！これは間違いなく『恋』よ」

「だ、駄目よ！隆介くんは私の彼氏になるんだから！！」

「いや、それは違つぞ姉貴…」

結局この口論は30分以上続いた…

特別席

「むっ…！！」

「どづしたの沙耶？」

「今隆ちゃんが女の子にデレデレしてるように感じた。」

「そ、そんなことまで分かるんだ…」

「むう…隆君後でお仕置きだから！」

「優香、あんたいつの間になんかと言えようになったの…」

恋する乙女とはここまで勘が鋭いもんなんだね…

その頃隆介は…

ソク…

「うっ！な、何か悪寒が…」

「面白いことの前触れになりそうだな！」

「他人事と思って…」

次はやっと決勝！
果たして相手は誰だ！！

第40話：リベンジ！！

控え室

「いよいよ決勝かー。相手誰なんだろう？緊張するなー。」

涼太が決勝の相手を確認しに行っている間、隆介はそう呟いた。
と、その時

ガチャ…

「待たせてな。決勝の相手が決まったぞ！」

「誰々？」

「生徒会執行部の大群先輩だ。こりゃ優勝はもらったな！」

涼太は笑いながら言った。

「でも大群先輩だつて喧嘩強いんだろ？そう易々とは…」

「行くに決まってるんだろ？あの人は過去に俺に叩きのめされたんだぜ。しかも実力ならお前が倒した豊崎先輩の方が圧倒的だ。だから心配するな！」

「あ、ああ…」

そして時間になった。

『さあいよいよ決勝戦です！！激戦を勝ち抜いたのはこの2コンビ
！！』

まずは準々決勝までの相手を秒殺し、準決勝で優勝候補の一角とさ
れてた村神陽菜&豊崎有紀コンビを破った佐々城隆介&村神涼太コ
ンビだ！！』

ワァー！！！！
キヤー！！！！

「俺たちもかなり有名になったな！」

「僕はともかくお前は元々有名だったろ…」

『対するは皆さんもご存じ！！高校生とは思えない体格と力で不真
面目生徒に制裁を下す生徒会執行部の大群拓也&頭脳ならば学年、
いや全国トップクラス！生徒会会長の森谷僚コンビ！！』

「うおー！！！！」

「どうせ僕は戦わない、いや戦えないけど…」

「森谷先輩も？」

「あの人は付き添いみたいなもんだろ。」

すると大群が話しかけてきた。

「いよう村神！借りを返しに来たぜ！！」

「まだ覚えてたとは…」

「当たり前だ！だが見ての通りうちの会長は戦闘能力は無い。だからお前の相方も控えてもらってサシで勝負したい。」

「いいつすよ。隆介、今回は休みだ。」

「分かった。無茶はするなよ？」

「へへ、まかせとけ！」

『さあ準備は整ったでしょうか！！それでは決勝戦試合開始！！』

決勝が始まった。

「オラオラオラ！！」

「止まって見えるぜ」

涼太は大群のラッシュを涼しい顔で避けている。

「す、凄い…あれだけの攻撃を避けるなんて僕にはできないよ…」

「そらよ！」

ドガ！！

「がはっ！」

涼太の右ストレートが決まり、大群は飛ばされた。

『凄い…あの大群先輩が圧倒されています！！もう勝負がつくか！？』

「ま、まだまだ…」

「この程度ですか？生徒会執行部が聞いて呆れますね！」

バキ！！

ドカ！！

ガン！！

ドス！！

「ぐっ！！（くそ、意識が…）」

大群は既にフラフラになっていた。

「終わりですか？とどめだ！」

涼太がボディーパーをいれようとした瞬間

バシィ！！！！

「なっ！？」

「と、止めた！？」

なんと大群は意識朦朧としながら涼太の拳を止めた。

「はあはあはあ…村神涼太、確かに喧嘩ではお前には勝てないだろ

「やるじゃないですか…いいパンチでしたよ？」

涼太は笑いながらすくつと起き上がった。

「涼太、大丈夫か!？」

「ああ。けっこう痛かったけどな…」

『な、なんとということでしょう…あのストレートを受けながらも村神君はピンピンしてます!!』

「いやピンピンはしてないから。痛かったし…」

「はあはあ…やはりこの程度じゃ倒せないか…」

「いやーあと4、5発受けたらさすがにやばかったですよ?」

「そうか…とどめをさしな。俺はもう何の力も残っちゃいないさ…」

「大群先輩、リベンジはいつでも受け付けますよ!!」

ドガ!!

涼太の蹴りが決まり大群は場外に落ちた。

『遂に決まりました！！優勝は佐々城隆介&村神涼太コンビ！！非常に素晴らしい戦いでした！そして二人にはこの後にあるスペシャルバトルに挑戦していただきます！！』

「とうとう来たな涼太。」

「ああ！絶対勝つぞ！！！」

「おう！！！」

遂にスペシャルバトルまで来た隆介たち。
果たして相手は誰なのか！？

次回に続く！！！！

第41話：世界が認めた男！！

控え室

「いよいよか…」

「ああ、これが最後だ。」

隆介と涼太は真剣な顔をしながら試合を待っていた。

「相手は分かる？」

「十中八九あの人だろう。まあすぐに分かるさ。びっくりするぞ。」

「びっくり??」

何のことはさっぱりだったが、そうこうしてるうちに時間になった。

『さあいよいよ始まります剣技のスペシャルバトル！！数々の激戦を勝ち抜き、そしてここまで来たコンビの登場です！佐々城隆介＆村神涼太コンビ！！！』

ワァー……！！！！
キャー……！！！！

「す、凄いな……」

「今さら驚くなよ……」

などと言っていると

「隆ちゃん……」

「この声……沙耶？」

後ろを振り向くと沙耶たちが立ち上がって応援していた。

「隆介――！！ここまで来たらあとは勝つだけよ！！」

「負けないでね隆君！！……でもあとでお仕置きだから……」

「優香……。もう何も言うことは無いわ！勝て！！」

「隆介様、勝つと信じています。」

「舞、優香、杏華、楓さん……」

「ははは！！負けられないな隆介！！」

「ああ！相手は誰だか分からないけど勝てる気がしてきたぞ！！」

「まあ世の中そんな甘くはねえんだが……」

「えっ？」

『さあ今スペシャルバトルの相手が今判明しました！！相手が……』

ザッザッザッザッ……

「さあ相手は……え？」

「はは、やはりあなたでしたか……」

「はっはっは！村神にはバレてたか。そして……よう佐々城。」

「ええー！ー！ー！ー！！！！何で片瀬先生！！？？」

これには隆介はおるか周りの観客も驚いてた。

「何で先生？」

「あたしも全然分かんない…」

「「右に同じ。」」

「（こ、これは非常にマズイですわ。片瀬先生は豊崎を越える居合の達人中の達人。隆介様が敵う相手では…）」

「な、何故先生？」

「それはな佐々城。俺が強いからだよ。ここにいれるくらいな。」

「で、でも…」

「気を抜くな隆介！！」

涼太は刀を構える。

「片瀬先生は剣の腕、特に居合は世界が認める達人中の達人だ。正直俺も勝てる自信が全く無い。」

「嘘だろ!?!」

「はは、一つ言っておくとな佐々城。豊崎くらいの相手じゃ俺に傷一つつけられないから。」

「!?!?!?!」

「さあお喋りはここまでだ。武器を構えろ。少しでも気を抜いたら……死ぬぜ?」

ゾクッ……

「（な、何だこの威圧感は……今までの人たちとは明らかに違う……。）」

「本気でやるぞ隆介!?!じゃないとマジで死ぬぞ!?!」

「お、おう!?!」

『さ、さあ準備は整ったでしょうか?それでは試合開始!?!』

試合が始まった。

シュ!?!

「うわ危ない!!」

「いつまでそっちを見てるつもりだ？」

「なっ!?!い、いつの間に背後に!!」

ギイン!!

「涼太!?!」

「ボサツとするな!次来るぞ!!」

隆介の背後に回り込んだ片瀬の最初の斬撃は涼太によって防がれた。

「さすがは村神、だがこれはどうだ？」

ギギギギギン!!!!

片瀬の目にも止まらぬ斬撃が次々と涼太に襲いかかる。

「くそ!反撃のチャンスが…」

「おっと隙だらけだ。」

ドバン!!

「ぐっ!!」

「涼太!!」

片瀬は涼太のわずかな隙も見逃さず肩に斬撃を入れた。

「全身を斬るつもりだったが避けられたか。だが……!!」

ブン!!

ピッ!

「やるな佐々城。俺の背後をとってかすり傷を負わせるとは。だが、後のことは考えてなかったな？」

バキィ!!

バゴン!!

「がつ!!」

すかさずパンチがきて隆介は軽々と壁にぶっ飛ばされた。

「大丈夫か隆介！」

「げほげほ、まだ大丈夫だよ……」

「しかしこのままじゃまずいな……」

観客席

『つ、強い！強すぎます！！あの村神君と佐々城君が赤子同然です
！！このまま一気に決着がつくのでしょうか！？』

「隆ちゃん……」

「涼太くんですらあしらわれるなんて…片瀬先生って何者？」

「あの人は世界で5本の指に入るほどの居合の達人。豊崎もあの
人に教わってましたわ。」

「じゃあ豊崎先輩よりずっと強いってことじゃないの!？」

「そうですね。この試合は隆介様たちが圧倒的に不利ですわ……」

「隆君…負けないで…」

「どうした佐々城、村神そんなものか？」

「くそ、何て強さだよ………」

「あんな上等な刀じゃ武器破壊もできねえしな………」

「どうする涼太？」

「ちょっと来い………」

ゴニョゴニョ……

「分かった………」

「さあてそろそろいいか？」

「行きます!!！」

シャー!!

「むっ!!」

キーン!!

「急に速くなったがそれではまだ俺には到底及ばんぞ？」

「まだまだ!!！」

キーン!!

カン!!

ブン!!

チュイン!!

シャー!!

ドガン!!

「準備完了……」

バキ!!

「ぐっ！」

「なかなかだったな佐々城。だがこれで終わ…」

ズバーン！！

「がつ！！！」

「涼太！！！」

なんと涼太は片瀬に背後を取り一太刀入れた。

「なに！？む、村神…いつの間に俺の背後に…」

「気配を消したんですよ。隆介に気をとられるからこんなことになるんです。戦場で敵に背を向けるなど愚の骨頂！！！」

「おのれ……！！？か、体が…」

「気を一点に集中し、あるやり方で斬れば一時的に相手の神経を麻痺させることができる。隆介！！！」

「おっ！！！」

チャキ…

「これはまずいな…」

「うおおおー！！！！！！」

ズババーン！！！！

「がは！！！！」

ドガン！！！！

隆介と涼太の渾身の一太刀が片瀬の体を切り裂き、ぶっ飛んだ。

わあー！！！！つと観衆が大歓声をあげる。

「すごいよ隆ちゃん村神くん！！」

「だ、大丈夫なのかな先生は…」

「大丈夫（と思う）！！」

「隆介様もすごいです、村神涼太…あんな技を身につけていたなんて…」

『そ、壮絶な戦いでしたが勝者は…』

「いやまだだ！！！」

『えっ？』

ふと見ると片瀬がフラフラになりながら立ち上がった。

「はあはあ…嘘だろ！？僕たち本気で斬ったんだぞ！？」

「やはりこの程度じゃ倒せないか…」

「はあはあ…だがかなりダメージはあったぞ？惜しかったな…」

チャキ…

「構える隆介！！もう一回だ！！」

「おう！！」

もう一度やろうとするが

「ここまでダメージを与えた褒美に俺の奥義を見せてやろう…」

カチン…

そう言っていると片瀬は刀を収めた。

「何を？」

「その目にしっかり焼き付けとけよ？見ることができたらな…」

「とうとう来るか…世界トップクラスの片瀬凌哉の居合が…」

「行くぞ…奥義真空破斬！！」

ヒュ…

「（……あれ？間が長いな……）」

「いけない！隆介様！！」

「（今わずかに風の音がした。先生は…既に抜刀してる！？）しまった！！」

「どうした涼太！？」

「ふっ、村神は気付いたみたいだがもう遅い！！」

「何が……あれ？周りこんなにボロボロだったっけ……」

ズバババン！！！！

「がああ！！！！」

「涼太！！！」

バシューー！！！！

「がっ……」

ドサドサ……

隆介と涼太は片瀬の奥義を受け倒れた。
辺りに大量の血が流れている……

次回に続く！！

第42話：決着！！（前書き）

復活です…

今まで待たせてしまって本当にすいません。

何とか書き上げますので気長にお待ちください！

第42話：決着！！

……
……
長い沈黙が流れた……

『こ、これはなんということでしょう……
これが世界レベルであるんでしょうか。片瀬先生、目にも写らない
抜刀術で二人まとめて倒してしまいました……』

ザワザワザワ……

「だ、大丈夫なのかあいつら……」

「死んで……ねえよな？」

周りがざわついている。

観客席

「り、隆ちゃん……」

「隆介！涼太くん！！」

「ああ……」

「ちょ！優香しっかり！！」

「片瀬先生……これほどとは……」

「お、おい見ろ！」

観客の一人がそう言うと

「う、くっ……」

涼太は起き上がった。

「ほうさすがは村神。伊達に鍛えてはいないな。」

「げほっごほ……はあはあ……り、隆介……ぶ、無事か……？」

しかし隆介からは何の返事もなかった……

「（い、痛い……か、体が動かない……息ができない……意識が朦朧とする……僕、死んじゃうのかな……。）」

「ぐ、隆介！し、しつかりしろ！！」

「（涼太？無事だったんだ…でも僕今指先も動かせないんだ…）」

「その程度か佐々城？やはりお前はクズだ。」

「（な、に…）」

「お前がこのまま死ねばあそこにいる相沢や神代たちは悲しむだろう。言つたよな？女を泣かす男はクズだと。」

男だったら…死ぬ気で女と女の笑顔を守れよ！！！！それができねえってんならそのまま死んじまえ！！クズごときに女と関わる資格なんざねえんだよ！！！！！！」

片瀬の怒声が会場全体響き渡る。

「！！！！（そうだ。僕は自分の優柔不断のせいで沙耶たちに迷惑をかけてきたつてのに…これじゃクズって言われても仕方ないな…。）」

「む！！」

「隆介！！よかった…死んでなくて…」

「はあはあはあ…あ、当たり前だろ涼太…ぼ、僕にはまだやらなきゃいけないことが山程あるんだからさ。」

「…そうだな。」

何と隆介と涼太は満身創意だが、執念と根性で再び立ち上がった。

「す、すげえあいつら！すげえぞ！！」

「村神くん！佐々城くん！頑張つて！！」

「さーさーき！！さーさーき！！」

「むーらーかみ！！むーらーかみ！！」

佐々城と村神コールで会場は一気に盛り上がった。

「立ち上がったか佐々城。意識は朦朧としているがよく立ち上がった。」

「ぺっ！はあはあ……あ、あれだけ好き放題言われたらおちおち寝てられませんよ……」

「その心意気やよし！そろそろ決着をつけよう。俺もお前たちもほとんど体力なんか残っちゃいないしな……」

「「はい！」」

そう言うとお互い武器を構えた。

第43話：優香ヤンデレ化！？（前書き）

今年初投稿です。

なんか2ヶ月に1話の投稿になっております（涙）

なんとかしなければ…

第43話：優香ヤンデレ化!?

医務室

「う……」

「お、隆介起きたか？」

気が付くと医務室で寝ており、涼太はすでに起きていた。

「涼太？そっか、僕たちは負けたんだ……」

「そつだな……ギリギリでだが……」

「……………」

回想

「……………」

ズガーーン!!!

「「「……………」」」

バシユーー!!!

「ゴフッ」

「ごめん沙耶…舞…杏華…優香…楓さん……………」

ドサドサ…………

「何がごめんだよ…バカ野郎……………」

ドサ…………

「あの後どうなったんだ？」

「大変だったぞ。俺も倒れてから30分後に目が覚めたが、外は大騒ぎだし相沢たちは、特に優香ちゃんは錯乱して静止するのに一苦労よ。」

「そうか、やっぱりみんなに心配かけたんだ…」

しばらくすると

バーン！！

「隆ちゃん大丈夫！？」

沙耶たちが勢いよく扉を開けて入ってきた。

「みんな…うん、とりあえず大丈夫だよ。」

「よかった。あの後優香が暴れて大変だったんだから。」

「あうう〜お姉ちゃん言わないでよ…」

「はは、心配かけてごめんな優香？」

「ううん。隆君が元気ならそれでいい。」

「そういえば隆介、片瀬先生来た？」

「いや、来てないけど何で？」

「いや、隆介たちを見に行くって言ってたから。」

「そっいえば……」

「どうした涼太？」

「控え室近くで先生らしき人が倒れてたような……」

「なんだって！？一体誰が……ん？」

ふと隆介が優香を見ると何やら不敵な笑顔を浮かべていた。

「うふふふ、隆君を傷つけたんだ。当然の報いだよ、うふふふふふ……」

「な、何か優香が黒くなっている……」

「優香が徐々にヤンデレ化してる！？」

改めて優香の恐ろしさを知った隆介だった。

こうして剣技も終わり、賞金はスペシャルマツチで負けたのでもらえなかったが、学費は見事に免除となり残すは結果発表のみとなった。

「1年生総合優勝…1年2組！」

「やった!!！」

「当然よ!!！」

優勝は隆介たちのクラスになり、長かった球技大会は幕を閉じた。

帰り道

「あーあ、隆ちゃんたち学費免除でいいな。」

「苦労したんだ、いいじゃないか。」

さて次は何があるやら…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4380e/>

隆介の羨ましき？日常

2010年10月12日05時17分発行